移民ネットワークの形成とその役割

－台湾台中に在住のフィリピン人移住労働者を事例として

移民網絡的形成及其功能

－以居住台灣台中的菲律賓籍勞工為事例

指導教授：松永 稔也 助理教授

東海大學日本語文學系碩士班

修士論文

研究生：渡邉　美奈子

2009 年 6 月（民國九十八年六月）

要約

本論の目的は、台湾における外国人労働者が形成する「移民ネットワーク」に注目し、その形成や役割について分析することである。

近年、国際化に伴い国境を越えた人の移動が世界中で起きている。台湾では、1970 年代後半から高い経済成長を背景に、所得の上昇や教育水準の向上、生活スタイルの変化から、労働条件の劣る低賃金不熟練労働分野において労働者不足が深刻化していった。そこで台湾政府は、労働力不足を改善するために 1991 年に外国人労働者の受入れを開始した。その後、外国人労働者数は飛躍的に増加したが、1990 年代後半から景気は後退していき、台湾政府は外国人労働者数の削減に転換した。また、外国人労働者に対するニーズも変化していき、従来の労働集約型産業から介護や家政婦といったサービス産業に従事する外国人労働者が増加していった。現在、台湾では二国間協定を締結した、フィリピン、インドネシア、タイ、ベトナム、マレーシア、モンゴルから外国人労働者を受入れている。

フィリピン人労働者は 1991 年から正式に受入れが始まり、2009 年 3 月時点で約 69,000 人のフィリピン人労働者が仲介業者を介して台湾に働きに来ている。彼らは台湾で様々な人とのつながりから成る移民ネットワークを形成し、その移民ネットワークは彼らの生活世界を支えている。本研究では、彼らが形成している移民ネットワークの形成経緯やその役割に注目した。また、移民ネットワークに潜むマイナス面や家族との関わりなど、従来の研究ではあまり論じられることがなかった点についても調査した。

調査の結果、フィリピン人同士のつながりは、親密度が高いつながりと親密度が低いつながりから成っていることがわかった。台湾で共に過ごす時間の長さや同じ地域出身といった要因で、親密度は高くなりそのつながりも強くなる。一方、たまにしか会わない人との比較的弱いつながりは、教会やフィリピンレストランなどネットワークの中心地ともいえる場所での出会いをもとに形成されている。また、少数ではあったが台湾人とのつながりを持つフィリピン人もおり、移民ネットワークと一まとめにしても、その内実は様々であることがわかった。

移民ネットワークの役割として、情緒的役割、言語的サポート、経済的援助、情報的機能があった。これらの機能やサポートは、それぞれ個別に分離したものではなく、1 つ 1 つが関連している。それぞれ、常に強いつながりで結ばれている友人から得ているわけではなく、機能によって使い分けいている。また、強いつながりを形成する要因の 1 つである同じ地域出身で同じ言語でコミュニケーションを図るということは場合によっては、誤解を生じ小さな争いを引き起こす可能性があることがわかった。また、強いつながりは閉鎖的なネットワークを形成し、孤立を招く恐れもあることも示唆された。

目　次

1.　序章 1
1.1　はじめに 1
1.2　本稿の目的 1
1.3　外国人労働者、移住労働者、移民ネットワーク 2
1.3.1　外国人労働者と移住労働者 2
1.3.2　移民ネットワーク 3
1.4　本論文の構成 4
2.　台湾における外国人労働者について 5
2.1　台湾の外国人労働者受入れ政策 5
2.2　台湾の外国人労働者政策の経緯 6
2.2.1　導入以前(1970 年代後半～1980 年代前半) 6
2.2.2　導入･拡大期(1980 年代後半～1990 年代前半) 7
2.2.3　緊縮期(1990 年代後半) 8
2.2.4　不況による再緊縮期(2000 年～2008 年) 8
2.2.5　世界的な金融危機による影響（2008 年末～現在） 9
2.3　台湾の外国人労働者受入れ制度 10
2.3.1　受入れのプロセス 10
2.3.2　台湾の人材仲介業者について 11
2.4　台湾における外国人労働者の概況 12
2.4.1　外国人労働者の人数及び国籍について 12
2.4.2　台湾で働く外国人労働者の労働状況 14
2.4.3　管理の対象としての外国人労働者 15
2.5　台湾における外国人労働者受入れの意識 16
3.　台湾におけるフィリピン人移住労働者 18
3.1　台湾で働くフィリピン人移住労働者 18
3.2　フィリピン人移住労働者の来台要因 20
3.2.1 フィリピン政府に内在する要因 20
3.2.2　フィリピンの社会問題に内在する要因 21
3.2.3　賃金格差 22
3.3　台湾におけるフィリピン人移住労働者の概況 23
4.　先行研究と本論文の意義 26
4.1　移民ネットワークの役割に関する先行研究 26
4.1.1　Grank and Caces(1992) 26
4.1.2　Goza (1994) 26

4.1.3 Winters, Janvry and Sadoult (1999) 27
4.1.4 Bauer, Epstein and Gang (2000) 27
4.1.5 Arango (2000) 27
4.1.6 Massey and Aysa (2005) 28
4.1.7 樋口(2005) 28
4.2 フィリピン人移住労働者の移民ネットワークに関する先行研究 28
4.2.1 Caces, Arnold, Fawcett and Gradner (1985) 29
4.2.2 Goss and Lindquist (1995) 29
4.2.3 Nagasaka (1998) 30
4.2.4 Lan (2003) 30
4.3 本研究の意義 31
5. 調査概要 33
5.1 調査協力者 33
5.2 調査方法 35
5.3 分析の方法 36
6. 結果と考察 37
6.1 移民ネットワークの形成 37
6.1.1 フィリピン人同士のつながり 37
6.1.2 フィリピン人同士のネットワーク形成のきっかけ 40
6.1.3 台湾人とのつながり 41
6.1.4 台湾人以外の外国人とのつながり 44
6.1.5 まとめ 45
6.2 ネットワークの役割 46
6.2.1 情緒的サポート 46
6.2.1.1 精神的安寧 46
6.2.1.2 共感 47
6.2.1.3 相互依存 48
6.2.2 言語的サポート 49
6.2.3 経済的サポート 50
6.2.4 情報的役割 51
6.2.4.1 台湾についての情報 51
6.6.4.2 フィリピンについての情報源 53
6.2.4.3 仕事に関する情報 54
6.2.4.4 生活に密着した情報 56
6.3 ネットワークの問題点 56
6.4 ネットワークの中心的な役割をもつ教会 59

6.5　ある協力者のネットワーク 61
6.6　フィリピン人労働者とその家族について 63
7.　終章 66
7.1　まとめ 66
7.1.1　台湾で形成される移民ネットワーク 66
7.1.2　移民ネットワークの役割 67
7.2　今後の課題 69
7.3　結びにかえて 70
参考文献 73
謝辞 78

1. 序章

1.1 はじめに

国際化に伴い国境を越えた人の移動は世界中で起こっている。労働者、難民、留学や国際結婚など移動の形態は多岐に渡る。筆者自身国境を越え、台湾での生活を通して、慣れない生活に対する戸惑いや不安、面白さなどを感じてきた。2 度の海外生活を通して、人とのつながりが異国の地で大変重要であると痛感した。特に自分の言葉で話せることの大切さや同郷人が身近にいることの心強さを感じた。日本にいる家族や友人は当然のこと、台湾にいる友人には多くの面で支えてもらった。この感覚は、多かれ少なかれ、同じく国境を越えてきた人々に共通するのではないかと思われる。現在台湾では、一定の単純労働分野において、二カ国間協定[1]を結んだ国から外国人労働者[2]の受入れを行っている。この外国人労働者にも同じことが言えるのではないかと考えられる。

外国人労働者のように「国境を越えて移動する人々（越境する人々）は、いくつかの拠点となる地域を中心に、その移動と生活世界を支える多様なネットワークを形成する」(石井、久米、遠山、平井、松本、御堂岡編 1997:218)という。また、古田ら(2001)によると「現在では、2,3 世から 5,6 世の人人がそれぞれの地域で日系人の社会をつくり、現地社会に同化しつつも、強い民族意識で結ばれたネットワークを形成している」(古田、石井、岡部、平井、久米 2001:219)ともいわれている。

このように移住労働者に関する文献の中には、「ネットワークが形成されている」という文面をよく見かける。実際に外国人が比較的多く居住する地域や集まる場所に行くと、同郷人同士の集まりを多く目にすることができ、ネットワークが形成されていることは察しがつく。しかし、ネットワークはいつからどのようにして形成され、それは送出国から連続しているのか、移住後に新たに形成されたのか、などネットワークの根本については、移民ネットワークに関する文献の中ではほとんど見られない。こうした点について明らかにすることで、移民の姿を描き出すことができるのではないだろうか。

1.2 本稿の目的

台湾においても、多くの外国人労働者は「ネットワークを形成している」だろう。それは休日の公園や各国のレストランなどに行けば感じることができる。しかし、台湾において外国人労働者のネットワーク形成にまつわる議論はこれまでほとんどされてこなかった。台湾で働く外国人労働者は「就業服務法」という厳格な制度の下で管理の対象とされ、単に労働をするためだけの資源と捉えられがちであると思われる。このような状況の中、台湾在住の外国人労働者たちはどのようにしてどのようなネットワークを形成しているのだ

---

[1] 2009 年 3 月現在タイ･インドネシア･フィリピン･ベトナム･マレーシア･モンゴルから外国人労働者を受け入れている。

[2] 本稿で対象とする外国人労働者は就業服務法第 46 条第 8 項から 10 項に該当する労働者である。具体的には製造業、建設業、漁業部門の労働者、家事･介護労働者を指す。

ろうか。ネットワークを形成するのに困難な点はあるのか。また、ネットワークは彼らにとってどのような役割を果たしているのだろうか。このような問題意識のもと、本研究では以下のことを明らかにすることを目的とする。

①台湾において外国人労働者は移民ネットワークを形成しているのか。

②形成しているとすれば、その移民ネットワークはどのように形成されたのか。

③その移民ネットワークはどのような役割があるのか。

石井ら(1997)によると、移民ネットワークの働きにより、移住労働者は自身に負わされた多様な不平等をあるときには迂回し、あるときに乗り越えることができる。また、移民ネットワークの形成は、移住労働者の「トランスナショナルな生活世界の形成そのもの」(石井ら 1997:23)である。なぜ移住労働者にとって移民ネットワークは必要なのか、移民ネットワークは出身地から持ち込まれているのか。こうした点を明らかにすることで、「ネットワークは形成されている」という単調な論から一歩抜け出せるのではないだろうか。様々な問題を乗り越えようとしている彼らの日常的な実践である移民ネットワークをミクロに論じていくことで、移住労働者の姿を描いていくこともできると考えられる。

1.3　外国人労働者、移住労働者、移民ネットワーク

本研究で用いるキーワードに「外国人労働者」「移住労働者」「移民ネットワーク」がある。以下で本研究において「外国人労働者」「移住労働者」「移民ネットワーク」をどのように捉えているかということを述べていく。

1.3.1　外国人労働者と移住労働者

台湾では、就業服務法第 46 条第 8 項から 10 項に該当し、製造業、建設業、漁業部門の労働者、家事･介護に従事する外国籍労働者のことを「外籍労工」すなわち「外国人労働者」と呼んでいる（佐野;2004）。「外国人労働者」とは他国からの労働者を受入国の視点からみた場合の呼称である。したがって、受入国台湾の視点から論じることを示すために上記の外国籍労働者を「外国人労働者」と表現することにする。

一方、フィリピンでは海外で働く労働者を「migrant worker」すなわち「移住労働者」と呼んでいる（小ヶ谷;2003）。「移住労働者」とは「自分の国籍国ではない国において、報酬を得る活動に従事する予定である者、現に従事している者、または、従事してきた者をさす」(駒井編 1997:256)。そのため、送出国フィリピン側からの言説の場合は「移住労働者」とする。つまり、文中の主体が受入国側であれば、「外国人労働者」、反対に主体が送出国であれば「移住労働者」ということである。

本稿ではこれらの用語を受入国送出国の視点の違いによって適宜使い分ける。視点の違いによって同じ労働者でもこのような用語の違いが生じる。これは、受入国側と送出国側の移住労働者に対する受け取り方や考え方が違うことも表している。また、「台湾人－外国人」という区別を一層際立たせていることにもつながる。さらに、フィリピン国内では海外で就労するフィリピン人を OFW（Overseas Filipino Worker）とも呼んでいる。「OFW はフ

ィリピンの政府機関が認定して海外に派遣する契約ベースの労働者」(二村 2005:104)である。そのため、政府機関による統計などOFWのみを対象とした言説についてはOFWと表現するが、政府機関の関与に関わらずフィリピン国外で働いている労働者については、「フィリピン人移住労働者」と総称する。

このように、用語の複雑さや多様さは移住労働者を取り巻く状況や問題の複雑さや多様性の表れだと考えられる。移住労働者に対して受入国はどのように捉えているのか、そこにはどのようなスタンスの違いがあるのか、ということも本論文でも課題として取り上げているテーマでもある。

1.3.2 移民ネットワーク

国境を越えて移動する人々が形成する移民ネットワークがある。樋口(2005)は以下のように移民ネットワークについて論じている。

移民ネットワークとは、個々の移民に利用可能で、移住過程に影響を及ぼす社会関係の総体を指す。(中略）移民ネットワークといっても、移民間の個人的な関係のみを指すわけではない。移民斡旋組織でも業務請負業でも、あるいは外国人支援組織や国際交流協会でも、移住過程に影響を及ぼすのであれば、移民ネットワークとみなす。（樋口 2005:78）

移民ネットワークは、移民間の個人的なつながりだけではなく、移住後の受入国の人々や組織、機関も組み込まれ、多様な人々によって形成される。移住労働者は「国境を越えた移動と自己実現のために生活上必要な施設や人と人の繋がりをつくり出さなければならない」(石井ら 1997:23)。移民ネットワークの役割については様々な研究がされている(4.1に詳述)。移民ネットワークは、移住地の情報や住居、仕事を提供し、移住に伴う費用やリスクを抑える働きがある。また、精神的安寧のためのサポートを提供する(Gurank and Caces;1992)。しかし、台湾に来るフィリピン人移住労働者は仲介業者を介して来るため、住居や仕事は移住前に決定されている。先行研究の対象となっている家族や親族を頼って移住労働をした人とは状況が変わっている。また、台湾に来る前に先に親族や友人が台湾にいたという労働者は少なく、ネットワークは移住後に新しく形成されることが多い。フィリピン人移住労働者はフィリピンにいるときにも個々のネットワークを形成している。そのネットワークとは別に、移住後に新たな移民ネットワークを形成する。台湾にいる移住労働者たちは、どのような情報やサポートを受けているのだろうか、自国ネットワークと移民ネットワークはどのような違いがあるのか。このような課題の解決となる糸口を掴むために、台湾在住のフィリピン人移住労働者が織り成す移民ネットワークを論じることが、本研究の課題である。

1.4　本論文の構成

第 2 章では、受入国台湾の外国人労働者政策全般について概観する。そして第 3 章で、台湾におけるフィリピン人移住労働者について概観する。それにより、台湾においてフィリピン人移住労働者はどのような位置づけに置かれているのかが見えてくると思われる。

第 4 章では本研究のテーマである移民ネットワークに関する先行研究について検討する。これまでの研究の移民ネットワークの形成と役割をみていき、それらの研究の到達点とその限界点について概観する。そして、その上で本研究の意義について述べたい。

第 5 章では今回の調査概要について述べる。調査協力者、調査方法、調査項目について説明する。第 6 章では、調査結果に基づいてフィリピン人労働者が台湾で形成するネットワークについて明らかにしていく。そして、形成されたネットワークの役割を分析する。そして終章ではまとめと今後の課題を論じ、論を結ぶ。

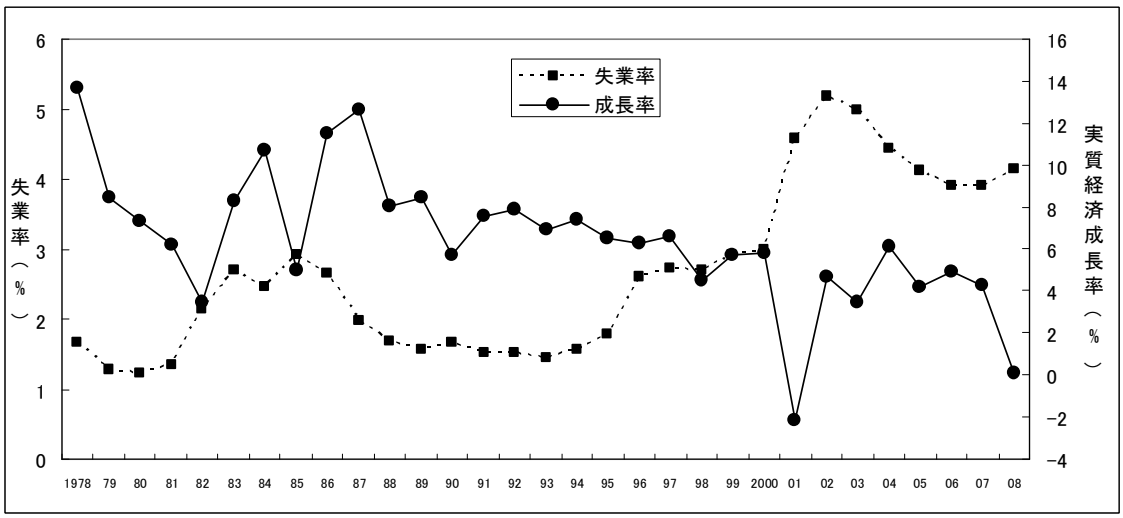
2. 台湾における外国人労働者について

本章では、外国人労働者を受入れた台湾の経済的背景、その政策と現在の概況について概観する。

2.1 台湾の外国人労働者受入れ政策

台湾は、60 年代から 80 年代の間に著しい経済成長をとげた。失業率も 2%前後を維持し、1980 年代後半から労働集約型産業(製造業、建設業等)を中心に労働者不足が深刻化していった。図 1 は台湾の経済成長率と失業率の推移である。1989 年台湾政府は重大公共事業を進めるために外国人労働者の受入れを開始した。現在、重大公共工事（公私立学校、社会福祉施設、病院等の建設）、重大投資製造業（経済部工業局の投資案件審査による）、看護･介護、家政婦、船員の単純労働分野において、タイ･インドネシア･フィリピン･ベトナム･マレーシア･モンゴルの 6 ヵ国と二国間協定を結び、移住労働者の受入れを行っている。

図 1：台湾の失業率と成長率の推移



（出典）行政院労工委員会 HP より筆者作成

労働政策研究所(2007)によると、台湾の外国人労働者受入れについて大きく分けて 2 つの理由があげられている。1 つ目は、本国労働者が不足している地域の仕事、または本国労働者が就きたがらない仕事の従事者を確保することである。台湾では国民所得や教育水準の向上により、特に若者の 3K（きつい･汚い･危険）職種の忌避や、少子高齢化や台湾人女性の社会進出の活性化による介護不足という傾向にある。そして 2 つ目は地域労働者の職業促進を図ることである。台湾では人件費高騰により、人件費の安い中国をはじめとするアジア諸国に続々と産業が移転し、産業の空洞化が問題となっている[3]。産業の空洞化は本国労働者の失業を引き起こしている。そこで、低コストの外国人労働者を受入れることで、

[3] JB Press（http://jbpress.ismedia.jp/articles/print/794）より。

地域企業、特に製造業の海外移転に歯止めをかけ、台湾の地域労働者の雇用を確保する狙いがある。

台湾の外国人労働者について、以下の 4 つの基本政策に基づき台湾政府は雇用可能な業種、期間、雇用後の管理方法などを規定している(稲月;2006)。1 つ目は、台湾人労働者の雇用に影響が出ないことである。そのため行政院は外国人労働者が増えすぎないようにコントロールし、受入れ総数を一定範囲内に抑えるようにしている。台湾にとって「あくまで外国人労働者の導入は本国労働力の不足を補充するための手段」（林 2006:23）であり、代替的ではない。それゆえ、本国労働者の労働権益を侵害してはならないのである。2 つ目は、受入れた労働者の永住は認めないことである。外国人労働者は契約を最大 3 年ごとに更新しなければならず、更新も 2 回まで、計 9 年間しか滞在することができない。また、3 年ごとに必ず一度本国に戻らなければならない。このように、台湾政府は外国人労働者の滞在が長期化することを防いでいる。3 つ目は、治安を乱さないことである。外国人労働者の逃亡を防ぐために、外国人労働者が 3 日間無断欠勤した場合、雇用主は直ちに警察局、労工委員会、移民署に連絡しなければならない。また、「聘僱外國人易觸犯之法條」によって、逃亡者に対して厳しい罰則が定められている。4 つ目は、台湾産業構造の高度化の妨げにならないことである。台湾は日本同様国土が狭く、資源に乏しい。しかし、ハイテク産業の発展は台湾の急成長に大きく貢献した。台湾の経済的成長のため、すなわちさらなる産業構造の高度化を進めていくために、サイエンスパークも数多く建設されている。各企業は「外国人労働力の導入に伴う技術革新の遅滞」(林 2006:24)を防ぎ、さらなる技術開発の発展に努めることが要求されている。

2.2　台湾の外国人労働者政策の経緯

ここでは、森本(1994)、余、陶(1999)、明石(2006)を参考にしながら、2.1 で概観した台湾の外国人労働者受入れ政策の経緯を明らかにしていく。受入れの経緯を導入期から拡大期、調整期から抑制期、不況期から現代の区分に分けて論じていく。

2.2.1　導入以前(1970 年代後半～1980 年代前半)

7%前後の高い経済成長を背景に、1973 年に台湾政府は「十大建設計画[4]」を推進する計画を発表した。この計画は、計画の段階から大規模化していき、建築分野で大量の雇用が必要とされた。さらに十大建設計画は 1984 年に「十四項目基本建設計画」と拡大していった。この計画で台湾政府の立場から特に重要と思われる 14 の建設計画について、労働者が不足した場合にのみ外国人労働者を雇用できる、という具体的な施策に乗り出した。このときの雇用条件は、20 歳以上の男性のみで、雇用期間は 1 年、必要に応じて 1 年の延長が認められ、計 2 年間の滞在期間であった。また、一工事につき外国人の割合が全体の 3 分の 1 を超えてはならない、という上限もあった。しかし、この時期は、労働許可を持たない外

[4] 中正国際空港建設、南北国際道路建設、縦貫鉄道電化、中国石油化学コンビナート建設などの十大公共事業のことである。

国人不法就労者[5]が社会問題となり始めていた時期でもあった。

2.2.2　導入･拡大期(1980 年代後半～1990 年代前半)

1980 年代後半になると、台湾通貨の高騰や賃金の上昇といった経済成長に押され、失業率は1%台にまで低下､台湾の産業構造も変化しサービス化が進んでいった｡それとともに、所得の上昇や教育水準の向上、生活スタイルの変化から、地元の若者たちを中心に相対的に労働条件の劣る低賃金の不熟練労働の部門や職種を避ける本国労働者が増えていった（吉村;2000）。そのため、労働集約型産業の労働者不足はさらに深刻化していった。1990 年の平均不足数は 134,850 人、不足率は 3.05%であった[6]。さらに、台湾で不法就労外国人労働者も増加していった。そこで台湾政府は不法就労労働者を締め出し、労働力不足を補うために、外国人労働者の導入に踏み切った。

1989 年 10 月に「十四項目重要検閲工程入力需給因応措置法」が成立し、重大公共事業を進めるために外国人労働者の受入れを開始した。このとき約 1,000 人のタイ人労働者が受入れられた。さらに 1991 年 7 月に台湾政府は「国家建設六ヵ年計画」を実施した。これは約 8 兆 2000 億元規模の大型投資である。そのため政府は同年 10 月に外国人労働者の受入れを民間業者に開放した。このときに開放された業種は、6 業種 15 職種である。開放された 91 年の 12 月にはすでに約 3,000 人の外国人労働者がこれらの職種に就いていた。この開放により建設現場や製造業の労働力不足が大幅に改善された。

外国人労働者の受入れを開放すると同時に、不法就労者への取り締まりも強化された。1990 年 2 月に「不法滞在･不法就労外国人の調査･処理計画」が交付され、政府による本格的な不法就労者の取締りが始まった。台湾政府は、自首してきた不法就労者に対する罰則を停止するという特別救済措置を行うことで帰国を促した。1994 年 3 月までに自首してきた不法就労者 22,579 人が台湾から出国した(龔;2008)。

1991 年 12 月に「就業服務法」が成立、翌年 5 月に交付施行、同年 7 月に就業服務法第 5 章に「外国人招聘許可及び管理法」が交付施行された。この法律で外国人労働者の雇用について、法的根拠が整備された。就業服務法は、外国人労働者の就業範囲、就労年数と契約更新回数、許可手続き、管理制度、外国人雇用税などを内容とするものである。就業服務法には不法就労者についても言及されており、不法に外国人労働者を雇った雇用主には、3 年以下の禁固刑、または 30 万元以下の罰金が課されることになった。この時期の外国人労働者の主な送出国はタイ、フィリピン、インドネシアであった。1992 年 9 月には就労できる業種がさらに拡大し、最初の 6 業種を含む 68 業種になった。翌年 1 月にはさらに 5 業種が追加され、合わせて 73 業種になった。この年は外国人労働者数も飛躍的に伸び、92 年は 15,924 人[7]であったのが、93 年には約 97,000 人にも膨れ上がった。そして 1994 年には

---

[5] その数は 40,000～50,000 人であったという(Tsay;1992)。
[6] ウ(1992)を参考に算出。
[7] そのうち政府公共工事関連で受け入れた外国籍労働者は 6,463 人、6 大業種 15 職種は 7,886 人、看護･介

150,000 人以上になり、国内の失業者数を上回ることになったため、政府は外国人労働者の受入れを制限するようになった。

2.2.3　緊縮期(1990 年代後半)

1990 年代前半まで 1%台であった失業率も徐々に上昇し、1996 年には 2.6%になり、その後もゆるやかに上昇していった。そこで政府は外国人労働者の緊縮策へと転換した。政策として具体的に、製造業及び建設業で雇用できる外国人労働者数の割合を 30%から 25%に引き下げた。また、家政婦として雇用できる条件も、それまでは家庭にいる子供の年齢が 12 歳以下なら雇えたが 6 歳以下に変更となった。その一方で政府は 1997 年 5 月に就業服務法を改正し、それまでの外国人労働者の滞在期限 2 年を 3 年に延長した。これは雇用主にとっての教育コストの削減や外国人労働者にとっての安定した収入といったメリットがあるためである。

2.2.4　不況による再緊縮期(2000 年～2008 年)

1997 年のアジア通貨危機以降、失業率はさらに上昇し 2000 年は 2.99%だったのに対し、翌 2001 年には 4.57%と急上昇した。また、経済成長率も世界的 IT 不況や米国テロの影響を受けて初めてマイナス成長(-2.17%)に落ち込んだ。そして 2002 年には失業率がとうとう 5%台に到達した。そのため行政院労工委員会の主任委員に就任した陳菊氏は、外国人労働者の数を徐々に減らしていくという方針を発表した。これを受け、台湾政府は介護部門や一般製造業などの分野で、外国人雇用条件を引き上げた。その一方で、2001 年に「就業服務法」が改正され、滞在期間が計 6 年になった。また、2001 年 11 月からこれまで雇用主が負担していた食費と宿泊施設費を労働者が負担することが取り決められた。上限 4000 元が定められたが、これは実質的な賃金値下げにつながった。

この時期から大型建設プロジェクトも一段落つき、看護介護サービス分野での外国人労働者のニーズが高まったため、建設業分野から看護介護サービス分野へとシフトしていった。そのため、建設業に比較的多く従事していたタイ人が減少傾向に、看護介護サービス分野に比較的多く従事しているインドネシア人が増加傾向にある(図 2 参照)。2000 年にはベトナムから新たに労働者が導入され、主に介護労働者として従事するようになったほか、2004 年にはモンゴルからの受入れも開始した。

2005 年 8 月、高雄で大規模なタイ人労働者による暴動が起きた。1,728 名のタイ人労働者が行政院労工委員会に対して、住環境や労働条件の改善を訴えた。これは、タイ人労働者が日ごろから劣悪な住環境であること、携帯電話の利用や飲酒を制限されていること、粗末な食事、体罰など不満を募らせる要因が多々あったためである。暴動後、タイ人労働者を管理していたコンサルティング会社と雇用主、タイ人労働者は 12 時間にもおよぶ交渉を行い、タイ人労働者側の 16 の要求のうち 14 に雇用主側が同意することで終着した。この

護労働者は 669 人であった。

暴動をきっかけに、行政院労工委員会は、外国人労働者を 100 人以上雇用している企業に対する監視を強化することを発表した。また、今回の件を重く受け止めた行政院長が謝罪の意を示した。さらに行政院労工委員会は、雇用主から提供される外国人労働者の宿舎や食事などの生活環境を確かめるために抜打ちチェックをする特別チームを設けた。

2007 年 7 月に就業服務法が改正され、外国人労働者の滞在期間が計 9 年に延長された。また、最低賃金の見直しもされた。台湾では外国人労働者にも本国労働者と同じ最低賃金が適用されている。現行の月額 1 万 5840 元から 1 万 7280 元（引上げ幅 9.09%）に引き上げられた。これは労働基準法で定められているため、労基法に適用されない家政婦及び看護介護労働者には該当しない。しかし、最低賃金の引き上げ実施に伴う政府の補助措置として、外国人労働者の食費、宿泊費の上限を現行の月額 4000 元から 5000 元に引き上げたため、実質的な賃金値上げには結びついていない。

2.2.5　世界的な金融危機による影響（2008 年末～現在）

2008 年 9 月にアメリカ大手証券会社リーマンブラザースの破綻をきっかけに、世界的な金融危機に陥り、台湾経済も大きな影響を受けた。台湾株式市場の加権指数（台湾の株価指数）は大幅に下落し、2008 年 2 月に 1 ドル＝29.95 元を記録した台湾元が、2008 年 12 月には 1 ドル＝約 33.5 元と、台湾元相場の急上昇を引き起こした。実体経済にも影響が及んでおり、成長率は 2008 年の第 3 四半期からマイナス成長となり、第 4 四半期には-8.36%にまで急降下した。2009 年の年成長率はマイナス成長(-2.97%)が予測されている。失業率も 2008 年 8 月に 4.14%であったが、12 月には 5.03%と 5%台にまで悪化した。

世界的な消費低迷を受け、台湾の製造業企業は特に大きな打撃を受けている。内外需の減少により、台湾内での消費の低迷に加え台湾経済を支えていたハイテク産業品の輸出が減少した。2008 年 10 月台湾政府は、製造業を中心に企業での本国労働者のリストラを防ぐため、外国人労働者を 5 万人減少させると発表した。そのため、製造業に従事する多くの外国人労働者が契約満了の前に解雇となり、帰国させられている。中には 1 年以上もの契約期間を残して解雇、帰国させられたフィリピン人労働者もいる。彼らの中には、斡旋料さえまだ返し終わってない人もいる[8]。金融危機が起こる前の 2008 年 8 月には 37 万 3336 人いた外国人労働者はわずか 5 ヶ月で 35 万 5743 人に減少していった。台中縣労工處によると、2008 年 12 月から 2009 年 1 月まで、1 日平均 20 人の外国人労働者が契約を終了させられ、帰国しているという[9]。また、本国労働者の失業悪化を防ぐために、2009 年 1 月労工委員会王如玄主委はさらに 3 万人の外国人労働者削減と重大工程では本国労働者のみの就労に限定することを発表した[10]。世界的な金融危機が長期化すれば、さらに多くの外国人労働者が解雇されると思われる。

---

[8] 2008 年 12 月に行なった筆者によるフィリピン人労働者への聞き取り調査による。
[9] 聯合新聞網 2009 年 1 月 31 日付(http://udn.com/NEWS/SOCIETY/BREAKINGNEWS2/4710992.shtml)
[10] 自由時報 2009 年 1 月 20 日付(http://www.taiwanus.net/news/news/2009/200901201413121549.htm)

このように、台湾は経済的需要に合わせて外国人労働者受入れ政策を適宜変化させている。台湾政府にとって外国人労働者が、「産業発展の積杆(こうかん)であるとともに、任意に雇用･解雇しうる安全弁として機能」(伊豫谷 2001:88)するような政策を一貫して行なっているのである。契約書を結んでいても、企業側の都合で解雇することは容易である。それに対し、外国人労働者は労働条件が守られなくても解雇を恐れ訴えることもできない、非常に弱い立場に置かれているのである。

2.3 台湾の外国人労働者受入れ制度

2.3.1 受入れのプロセス

外国人労働者を受入れる際に、雇用主はまず台湾内で求人募集をしなければならない。行政院労工委員会職業訓練局に属している就業服務センターに求人票を提出しなければならない。それと同時に、3 日以上新聞の求人広告に掲載しなければならない。待つこと 2 週間、応募者がいない、あるいは応募人数が不足している場合に限り、外国人労働者の募集許可を申請することができる。申請を受けた行政院労工委員会は、雇用主が台湾で求人活動を行っていたかという事実調査やヒアリング調査などのチェックを行う。なお、外国人労働者の受入れ人数は台湾人労働者の比率によって上限が決まっており、この比率は産業や条件[11]によって異なる。申請を受理された雇用主は「人材募集許可」をもらい、6 ヵ月間の外国人労働者募集の権利を与えられたこととなる。

許可を得た雇用主は通常台湾の人材仲介業者に募集を依頼する。依頼を受けた台湾の人材仲介業者は、外国人労働者の送出国の人材仲介業者に募集･採用を依頼する。送出国側の人材仲介業者は、台湾側の募集要項に沿って人材を募集する。そして、仲介業者は、応募または登録してきた外国人労働者に対して面接や筆記試験などを行い、採用を決定する。面接の際、台湾側の仲介業者や雇用主が加わる場合もあるが、「外国人労働者の受入れが成功するかしないかは、現地人材仲介会社の能力に依存する部分が大きい」(労働政策研究所 2007:68)。人材の受入れは、優秀な人材を集めることができるという送出国の人材仲介業者の手腕にかかっているとも言える。また、優秀な人材を提供できる送出国の人材仲介業者とネットワークを持たなければならない意味でも、台湾の仲介業者の役割も大きい。

採用者の決定においては、口頭インタビューや筆記試験などが行われる。台湾のある半導体メーカーP 社の場合、フィリピン人労働者を採用する際に、まず午前中に 10 問 20 分間の数学の筆記試験を行う。その場で解答合わせをし、正解解答数が 7 問以上の受験者のみがその日の午後から面接を受ける。面接官は台湾人とフィリピン人合わせて 6 名おり、1 人 5～10 分程度英語でインタビューが行われる。1 ヵ月後に採用通知が送られる仕組みになっ

[11] 具体的には、製造業でハイテク型の場合、労働者数に 10%を乗じた人数を超えないこと、建設業の場合、雇用上限は 30%であるが、外国人労働者 1 名雇用を申請する場合は台湾人労働者を 1 名採用しなければならない。また、原住民や身体障害者を 1 名雇用した場合、外国人労働者を 2 名雇用の申請ができる。介護施設の場合は、患者数や床数によって異なり、上限は台湾人労働者の人数を超えてはならない、となっている(労働政策研究所;2007)。

ている。

採用者が決定したら外国人労働者はビザを申請し、渡台することとなる。外国人労働者を雇用する企業は、行政院労工委員会に「就業安定費」を支払わなければならない。就業安定費は業種によって設定されており、ハイテク産業を中心とした製造業で外国人労働者 1 人当たり月額 2,400 元、一般建設業および漁船船員で 2,000 元、施設および在宅介護･看護で 2,000 元、家政婦(雇用主が台湾人)で 5,000 元となっている。これは主に台湾人失業者のための職業訓練費といった台湾人のための雇用安定に使用される。外国人労働者の賃金は最低賃金を下回ることはできない。また、労働基準法の規定にそって、残業代も支払わなければならない。渡台後 3 日以内に、雇用主は外国人労働者を行政院衛生署指定の医療機関で健康診断を受けさせなければならない。その後、到着から 6 ヵ月、18 ヵ月、30 ヵ月後に健康診断を受けさせなければならない[12]。そして、渡来後 15 日以内に行政院労工委員会に「雇用許可」を申請しなければならない。この雇用許可を申請しなければ、違法就労になってしまう。また、健康保険および労働保険への加入手続きをしなければならない。外国人労働者は雇用期間中の病気や負傷、出産などの保険金の支払いを受けることができる。そして、外国人居留証の申請手続きを行うこととなる。

2.3.2　台湾の人材仲介業者について

外国人労働者の約 9 割が人材仲介会社を通じてのルートで来台している(行政院労工委員会:2008)。台湾で人材仲介会社を設立する際に、ライセンス料(保証金)として 300 万元を銀行口座に置いておかなければならない。この保証金は、ライセンスの更新時の際にも銀行口座に置かなければならない。評価ランクが A の業者に対しては、ライセンスの更新時の保証金が 100 万元減額される[13]。また、「人材仲介就業服務専業」という資格を取得した有資格者を雇用しなければならない。人材会社の規模に応じて有資格者の雇用人数は規定されている。人材会社の従業員数が 5 名以下の場合は有資格者 1 人、6 名から 10 名以下の場合は 2 人、10 名以上の場合は 3 名雇用しなければならない。人材仲介業を行う上で必要な知識と能力があることを示す試験の合格者が人材仲介就業服務専業を取得できる。この試験は年 3 回行われ、出題範囲は法規分野と専業分野の 2 分野に分かれている。

外国人労働者に対する仲介業者の高額なサービス料詐取を防止するために、サービス料も定められている。したがって、仲介業者はこのサービス料以外の仲介手数料などを徴収することは認められていない。外国人労働者が仲介業者に支払うサービス料は来台 1 年目が月額 1,800 元、2 年目が月額 1,700 元、3 年目が月額 1,500 元である。外国人労働者は 3 年間で合計 6 万元のサービス料を支払わなければならない。

台湾では、悪質な台湾の仲介業者を防ぐために、2004 年から年 1 回台湾の仲介業者に対

---

[12] 以前は女性の外国人労働者に対して、妊娠検査も行っていた。しかし、人権問題も絡み批判も相次いだため 2002 年 9 月に中止となった。

[13] ただし、最低保証金額は 100 万元であるため、減額は 100 万元を限度としている。

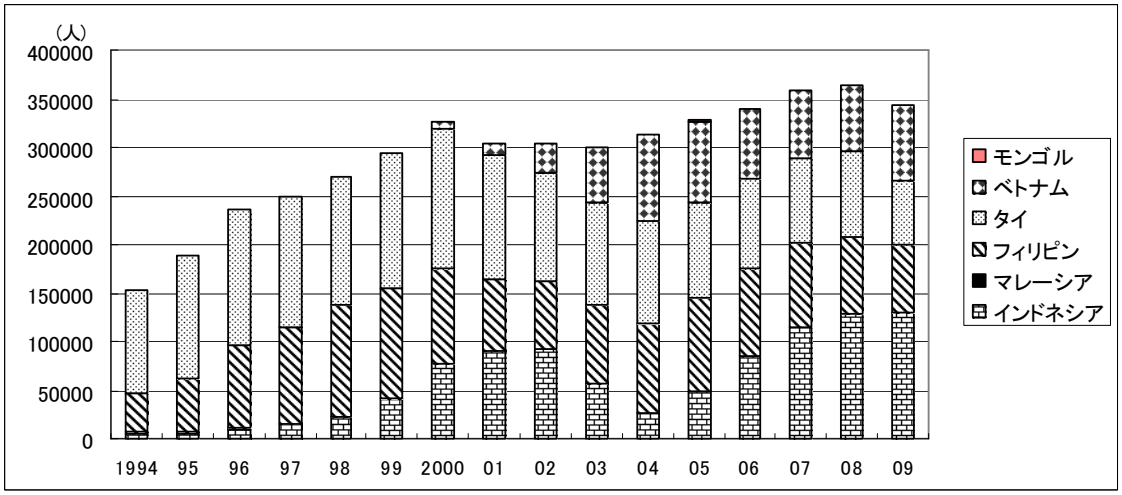
して評価を行っている。この評価結果はインターネット上で公開されており、誰でも閲覧することができる。こうした取り組みを通じて、悪質な仲介業者が淘汰されることを期待している。評価は品質管理、顧客サービスといった多岐に渡る項目においてそれぞれ判定され、合計点で A から C ランクに分類される。一定期間 C ランクの仲介業者で改善が見られなかった場合、仲介業者はライセンスが剥奪される。また、ライセンスは 3 年ごとの更新が必要である。2007 年では、仲介業者 916 社の評価がおこなわれ、A ランクは 99 社、B ランクは 644 社、C ランクは 172 社であった。

2.4　台湾における外国人労働者の概況

2.4.1　外国人労働者の人数及び国籍について

2009 年 3 月現在、台湾で働く外国人労働者の総数は 34 万 3,227 人である。この人数は台湾の総労働人口の約 3%を占める。国籍別に見ると、インドネシア人が一番多く、3 割以上を占めている。続いてベトナム人、フィリピン人の順となっている(図 2 参照)。2004 年末ではタイ人が一番多く、3 割以上を占めており、インドネシア人はわずか 8.7%しかいなかった。少子高齢化に伴い外国人労働者に対する需要が変化していき、外国人労働者に求められる職種が製造業ならびに建設業から介護看護サービスや家政婦へと移行していったため、外国人労働者の国籍も推移していっている。インドネシア人は看護介護サービス労働者が多いのに対し、タイ人は製造業や建設業に多く従事している(表 1 参照)。そのため、インドネシア人増加とタイ人減少という傾向がある。台湾政府は、国内の経済発展と社会的な需要にあわせて受入れ政策を変化させているといえる。

図 2：台湾における国籍別労働者の推移



(出典)行政院労工委員会 HP より筆者作成

外国人労働者の業種別でみると、建設業が 1.5%、製造業が 47.2%、看護介護サービスが

49.0%で、看護介護サービスが 1 番多い(表 1 参照)。家政婦が 0.7%、漁船が 1.6%とわずかである。国籍によって、業種の偏りが若干見られる。

表 1：2009 年 3 月国籍別業種の割合(括弧の割合は、それぞれの業種に占める国籍の割合)

	建設業	製造業	看護介護	家政婦	漁業
総数(人)	5,107	162,015	168,179	2,539	5,387
インドネシア	58 (1.14%)	12,478 (7.70%)	113,087 (67.24%)	1,351 (53.21%)	4,060 (75.36%)
マレーシア	―	10 (LT 0.00%)	―	―	―
フィリピン	167 (3.27%)	45,266 (27.93%)	21,530 (12.80%)	1,064 (41.90%)	871 (16.17%)
タイ	4,277 (83.74%)	59,817 (36.92%)	1,408 (0.83%)	18 (1.33%)	16 (0.29%)
ベトナム	605 (11.85%)	44,444 (27.43%)	32,151 (19.11%)	106 (4.17%)	440 (8.17%)
モンゴル	―	―	3 (LT 0.00%)	―	―

(出典)台湾行政院労工委員会職業訓練局 HP より筆者作成

性別でみると、圧倒的に女性が多く全体の 62.53%を占めている。しかし、国によって性別の割合は様々である（表 2 参照）。これは、それぞれ従事している業種の違いによるものと思われる。

表 2：2009 年 3 月台湾で働く外国人労働者数とその国籍と性別

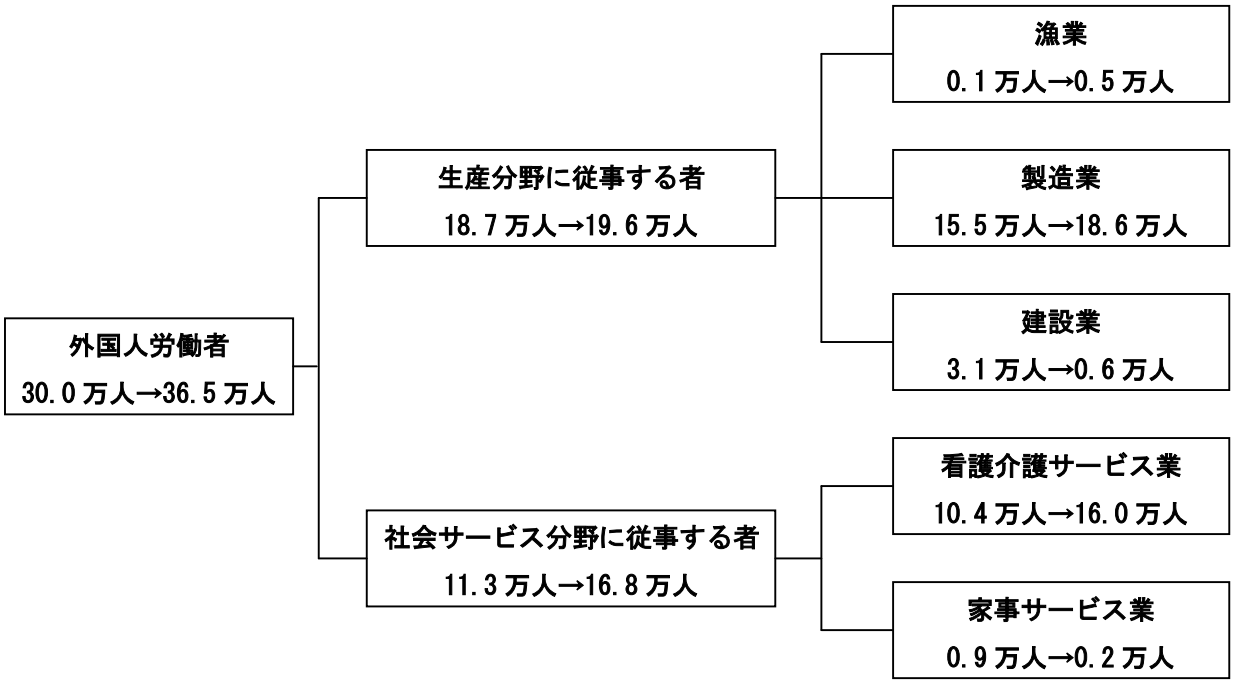
	全体	男性		女性	
総数(人)	343,227	128,615	(37.47%)	214,612	(62.53%)
インドネシア	131,034	15,398	(11.75%)	115,638	(88.25%)
マレーシア	10	10	(100%)	0	(0.0%)
フィリピン	68,898	24,283	(35.24)	44,615	(64.76%)
タイ	65,536	55,822	(85.18%)	9,714	(14.82%)
ベトナム	77,746	33,104	(42.58%)	44,642	(57.42%)
モンゴル	3	0	(0.00%)	3	(100%)

(出典)台湾行政院労工委員会職業訓練局 HP より筆者作成

図 3 は 2001 年 12 月から 2008 年 12 月までの分野ごとの増減をまとめたものである。現

象としては、建設業が大幅に減少しており、看護介護サービスやホームヘルパーは増加傾向にある。また、生産分野に従事する外国人労働者数は 2001 年 12 月～2008 年 12 月の 7 年間で 9000 人増とそれほど大きな変化がないのに対し、サービス分野に従事する外国人労働者数は 5 万 5000 人増と大幅な増加となっている。外国人労働者数の増加もさることながら、その業種内容にも大きな変化があるといえる。

図 3：外国人受入れ人数の推移(2001 年 12 月～2008 年 12 月)



(出典)労働政策研究所(2007)参考に筆者作成

2.4.2　台湾で働く外国人労働者の労働状況

現在製造業および建設業に従事している外国人労働者には労働基準法が適用されるが、家事･看護介護サービスに従事している外国人労働者には適用されない[14]。台湾の労働基準法では、労働時間や最低賃金と残業代の規定、休暇など労働に関する一般的な項目が規定されている。

2008 年 12 月に発表された行政院労工委員会の調査によると、2008 年 6 月時点の製造業に従事する外国人労働者の月額平均賃金は 23,069 元であり、前年比 6.4%増であった。内訳は、経常性賃金が 17,757 元、残業代が 4,829 元、その他が 483 元である。建設業に従事す

[14] 台湾政府は 1998 年 4 月に家事･介護労働者にも労働基準法を適用した。しかし、労働時間や残業時間、休日の明確な境目がない家事･看護労働者にとって労働基準法を適用すると月の残業時間だけで基本給とほぼ同額になり、賃金が約 2 倍にも膨れ上がるため雇用者の経済的負担を圧迫するといった問題がおき、翌年 1 月に再び除外された。

る外国人労働者の月額平均賃金は 23,541 元であり、前年比 12.0%増であった。内訳は、経常性賃金が 17,948 元、残業代が 5,274 元、その他が 319 元である。

製造業に従事する外国人労働者の月平均労働時間は、225.4 時間（前年 230.4 時間）で、内訳は通常労働時間が 178.2 時間（同 182.4 時間）、残業時間が 47.2 時間（同 48.1 時間）である。建設業に従事する外国人労働者の月平均労働時間は、230.8 時間（前年 223.0 時間）で、内訳は通常労働時間が 180.9 時間（同 176.1 時間）、残業時間が 49.9 時間（同 46.8 時間）である。保険加入率は 100.0%でなんらかの保険に加入している。大多数は労工保険と全民健康保険に加入している。

家事･看護介護サービスに従事する外国人労働者の 2008 年 6 月の月額平均賃金は 18,288 元であり、前年比 0.2%増加であった。内訳は経常性賃金が 16,039 元（前年 16,008 元）、残業代が 1,966 元（同 1,866 元）、その他が 283 元である。家事･看護介護サービスに従事する外国人労働者の 1 日の平均労働時間は 13.1 時間と､かなりの長時間労働を強いられている。また労働時間についてなんらかの規定をしているものは 19.3%しかおらず、4 分の 3 以上の労働者が労働時間に規定がなく労働に従事している。しかし、労働時間を規定していない労働者の 1 日平均労働時間は 13.1 時間、規定している労働者も 1 日平均労働時間は 13.1 時間と、労働規定の有無と労働時間とは関係ないことがわかる。休日についても 54.1%の雇用主が「休日はなし」としており、部分的に休日を与えるが 41.1%、休日ありはわずか 4.8%であった。家事･看護介護サービス労働者の保険加入率は 98.57%で、その大多数が全民健康保険に加入している。仕事内容について複数回答で調査したところ、病人の介護が一番多く、94.88％の家事･看護介護サービス労働者が病人の介護を行っている。次いで、家事が 68.55%、心身障害者の介護が 44.52%、子供の世話が 5.12%であった。この結果から、外国籍看護介護サービス労働者の多くが複数の仕事に携わっていることが分かる。

2.4.3　管理の対象としての外国人労働者

外国人労働者は台湾政府の強い管理の対象となっている。外国人労働者が労働先から逃避･離脱することを防ぐための制度が、大きく分けて 3 つある。雇用主変更の原則禁止、強制貯蓄、3 日以上の無断欠勤の禁止である。就業服務法第 59 条によると、雇用主が死亡または海外に出国してしまった場合、船が沈む、修理などといった理由により雇用主が労働者の労働を確保できない場合、雇用主が事業を辞めた場合、賃金未払いが発生した場合、労働者に過失がないのに契約を破棄させられた場合に限り、外国人労働者は雇用主を変更することができる。安易な雇用主変更を禁止し、離脱を防いでいるのである。

外国人労働者は「借金や斡旋料の返済、また仕送りの必要性から、より高い賃金を求め離脱を行うものと政府は考えている」(龔 2008:23)。そのため、強制貯蓄を行うことは、離脱を防ぐのに有効な手段の 1 つと捉えている。台湾政府は月々の「儲蓄」と呼んでいるが、実際は離脱を防ぐための強制貯蓄となっている。雇用主は外国人労働者の賃金の 30%を貯蓄することができるようになっている。雇用主は契約終了時に外国人労働者に貯蓄を返還

しなければならないが、返還しない、利子を渡さない、雇用主が使い込むといったケースがある(龔;2008)。

外国人労働者が 3 日以上無断欠勤をした場合、雇用主は警察、行政院労工委員会、健康保険局に速やかに通報しなければならない。通報しなければ、3 万元以上 15 万元以下の罰金となる。また、3 日以上無断欠勤した場合は契約が破棄され、外国人労働者は即刻国外強制退去となる。

これ以外にも、雇用主側が定めた独自の管理ルールがある。例えば、台湾にある電子部品製造会社 N 社は以下のようなルールを外国人労働者に採用している。

・パスポートは仲介業者に預けること。
・寮の門限は午後 10 時。10 時を過ぎた場合、1 回につき 2000 元の罰金を支払わなければならない。また、3 回目で契約を破棄、本国に送還される。
・寮の部屋の中ではコンピューターや DVD プレイヤーを使用してはならない。
・寮の部屋の中では食事をとってはならない。
・寮内で料理をしてはならない。
・備え付け以外の電気製品を使用してはならない。
・寮内では禁酒･禁煙。
・ゴミを落としてはならない。もし見つかった場合は、1 回につき 500 元の罰金を支払わなければならない。
・長期休暇（台湾の新年）の場合でも外泊してはならない。
・寮内で喧嘩をしてはいけない。
・物音をたててはならない。
・物を壊してはならない。
・壁にポスターを貼ってはならない。
・寮に異性を連れてきてはいけない。

また、製造会社 P 社では、外国人居留証と健康保険証も会社が管理しており、外出時にその都度受け取らなければならない仕組みになっている。出かけるときに外国人労働者は外出表に外出先や出発時間、予定帰宅時間を書いてサインをする。そのときに管理人から外国人居留証と健康保険証を受け取る。帰宅したら再びサインして、居留証と保険証を返さなければならない。このように企業はあらゆる面で細かく規定を設け、外国人労働者を管理しているのである。外国人労働者は「雇用する者－される者」という上下関係が非常に明確な立場で雇用されており、常に弱い立場に置かれているのである。

2.5　台湾における外国人労働者受入れの意識

これまで、台湾における外国人労働者に関する政策や制度について概観してきた。台湾政府は 1990 年代の好景気による労働者不足を補うため、そして台湾人女性の社会進出によ

る家事、介護労働を担うためという台湾社会の動きに連動して外国人労働者を受入れている。外国人労働者の受入れは台湾政府の労働政策の一環によるもであるが、労働者への虐待、賃金未払い問題、仲介業者による搾取、労働者による幼児虐待、窃盗、逃亡など様々な問題も引き起こし、これまで新聞紙上を賑わせている(安里 2004)。そのような状況の中、台湾人の外国人労働者に対する意識も否定的なものが多い。

林(2006)が行なった台湾板橋市における外国人労働者受入れの意識調査によると、「IT 技術者などの専門職に従事する外国人が増えること」について、「好ましい」と「どちらかといえば好ましい」と答えた人は 21.8%と 43.1%であり、合わせて 64.9%である。それに対し、「工場などでの単純労働に従事する外国人が増えること」について、「好ましい」と「どちらかといえば好ましい」と答えた人は 4.1%と 25.9%であり、合わせて 30.0%と大きく低下していることが分かる。また、「欧米系の白人が増えること」について、「好ましい」と「どちらかといえば好ましい」と答えた人は 4.1%と 29.5%であり、合わせて 33.6%であるのに対し、「東南アジアから外国人が増えること」については、「好ましい」と「どちらかといえば好ましい」と答えた人は 3.3%と 16.2%であり、合わせて 19.5%と低下する。この調査結果から分かるように、同じ外国人であっても仕事の技能や国によって、台湾への歓迎の度合いは大きく異なる。この意識の違いは、外国人労働者が増えると犯罪といった社会問題が発生するという偏見からきているのではないだろか。

2.4.3 で論じたように、外国人労働者は非常に厳格に管理されている。ある会社の寮は、工業の敷地内に隔離されたような形で建っている。そのため外国人労働者の「顔」が見えにくいうえに、外国人犯罪や不法就労についての報道などによって不安が煽られ、それが「好ましくない」という台湾人の意識を生み出していることもあるのではないだろうか。外国人労働者は台湾経済の必要によって呼び込まれ、また追い出されている。したがって、外国人労働者の問題は外部から持ち込まれた社会問題ではない。にも関わらず、外国人労働者に対する「好ましくない」という意識は高く、そういった意識が高まれば差別や偏見を招く可能性もある。また、外国人労働者に対する「好ましくない」という台湾人の意識は外国人労働者にも伝わり、両者が心の壁を作っていることもある。そして相互理解ができず、さらに差別や偏見を助長するという悪循環に陥る危険性もある。外国人労働者は決して台湾で歓迎されていると言いがたい状況の中、管理の対象とされ差別や偏見を感じながら労働し生活しているのである。

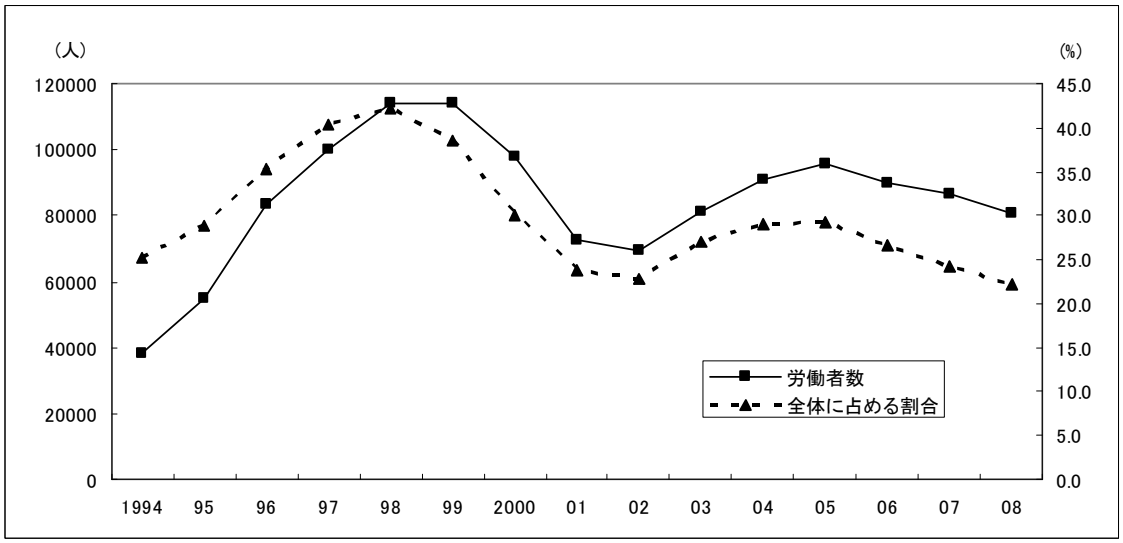
3. 台湾におけるフィリピン人移住労働者

2 章で台湾における外国人労働者受入れ政策を概観した。本章では、今回調査対象であるフィリピン人労働者に焦点を当て、台湾とフィリピンの関係について概観する。

3.1 台湾で働くフィリピン人移住労働者

1980 年代後半に、台湾は外国人労働者に関する二国間協定の覚書をフィリピンと締結した。現在 2 国間には正式な外交関係がないため、フィリピン政府は台湾にマニラ経済文化事務所(MECO: Manila Economic and Cultural Office)を置き外交代行事務所としている。1991 年に初めて合法的に認められたフィリピン人労働者は 33 名であった。しかし、それ以前より、多くのフィリピン人が不法滞在として台湾に滞在していた。Tsay(1992)によると、1980 年代後半に 5,000 人から 7,000 人のフィリピン人不法滞在者がいたという。1991 年に台湾政府が合法的に外国人労働者を認めたとき、フィリピン政府はすでに台湾に就労している非合法労働者の正規化を提案した。しかし、台湾政府はこれを拒否し、自首してきた非合法労働者には罰則を与えないアムネスティを実施した。龔(2008)によると、1994 年 12 月に 1 ヵ月間だけ行われたフィリピン人に対するアムネスティで、約 3,000 人の労働者が帰国したという。91 年に合法的に外国人労働者が認められてからは、フィリピン人労働者数は増加の一途をたどった(図 4 参照)。

図 4：台湾におけるフィリピン人移住労働者数と外国人労働者全体に占める割合の推移



(出典)行政院労工委員会 HP より筆者作成

1991 年にはたった 33 人しかいなかったフィリピン人労働者は、94 年には 3 万 8,000 人、96 年には倍以上の 8 万人以上となり、翌 97 年には 10 万人を超した。しかし、2000 年から台湾で就労するフィリピン人労働者数が急激に減少した。これは、台湾政府がフィリピンからの労働者受入れを一時的に凍結したためである。

1996 年台湾とフィリピンは航空協定を締結した。しかし、この協定は台湾側に非常に有利な協定であるうえ、フィリピン政府は台湾側が協定で決められた直行便の座席数を守らないため損害を与えたと主張した。この協定の改定期となった 1999 年にフィリピン政府は台湾側に協定内容の変更を申し出たところ、台湾側はこれを拒否した。そのため、航空協定の再締結をフィリピン政府が拒否し、1999 年 10 月に協定が終了した。フィリピンと台湾を往来するフィリピン人は香港などを経由しなければならなかった。同時に逃亡したフィリピン人労働者をカトリック教会がかくまっていたことや、フィリピン人労働者による台湾人被介護者の扱いの問題といったこと(明石;2006)も浮上し、台湾国内ではフィリピン人労働者の受入れ凍結の世論が高まった。そして台湾政府は 2000 年 6 月にフィリピン人労働者の受入れを凍結したのである。

その後協議を重ね、航空協定をめぐる争議から約 1 年後の 2000 年 9 月に再び新たな航空協定が締結され、フィリピン人移住労働者の受入れ凍結は解除された。新たな航空協定は、1996 年に双方が交わした航空協定を基礎に修正が加えられた。 この問題は、当時のフィリピン大統領であったエストラーダ大統領が MECO にフィリピン航空に対しいくらか不利になっても台北との直行便を即座に再開させるよう命令し、決着した(明石;2006)。そのためフィリピン政府は、新航空協定は旧協定よりフィリピン側にとって不利な協定だと自覚しながら締結したのである。

また、2.3.4 で論じたように、2001 年 11 月 7 日台湾政府は、これまで雇用主が負担してきた食費と宿泊費を外国人労働者が負担することを命じた。これは実質的に賃下げにつながった。この法案に対して、フィリピン政府は最後まで反対した。しかし、台湾政府は再びフィリピン人労働者凍結をちらつかせたため、フィリピン政府は合意せざるを得ない状態になり、最終的に合意した(龔;2008)。

このような台湾政府の姿勢から、台湾にとって外国人労働者政策が国内の労働力不足を補うための経済的要因だけではなく、外交交渉上の手段としての外国人労働者政策ということが伺える[15]。また、労働者を積極的に送出したいフィリピン政府は、台湾政府に対して強く意見を主張できず、従わざるを得ないという権力構造があるといえる。フィリピンは台湾にとって 14 番目に大きい貿易パートナーであるのに対し、台湾はフィリピンにとって 8 番目に大きい貿易パートナーである。2008 年 6 月末の時点における台湾の対フィリピン投資は 974 件で、その投資金額は 18 億 4,100 万ドルである。台湾はフィリピンへの投資ランキングで 7 位を占めている[16]。台湾はフィリピンにとって、重要な貿易相手国であると同時に、主要投資国でもある。また、2006 年 11 月には台風により多くの死傷者がでたフィリピンに対して台湾は 30 万ドルの義捐金を寄付するなど、フィリピン政府にとって台湾は経

[15] 労働者問題をめぐる政府間の軋轢は対フィリピンだけではなく、他国にも見られる。インドネシア政府に対しても、インドネシア人労働者の離脱率が高いことや仲介業者の偽造書類の問題、またそういった問題にインドネシア政府が協力的ではないことを理由に 2002 年 8 月インドネシア人労働者の受け入れを凍結した。2004 年 12 月にインドネシア政府が問題解決に努力するという旨を示し、凍結解除となった。

[16] Radio Taiwan International(http://japanese.rti.org.tw/default.aspx)より。

済的にも大きなポジションを占めている。

3.2　フィリピン人移住労働者の来台要因

2.2 で台湾に内在している外国人労働者の来台要因を概観した。本節では、フィリピン政府及びフィリピン人労働者が抱えている来台要因を概観する。

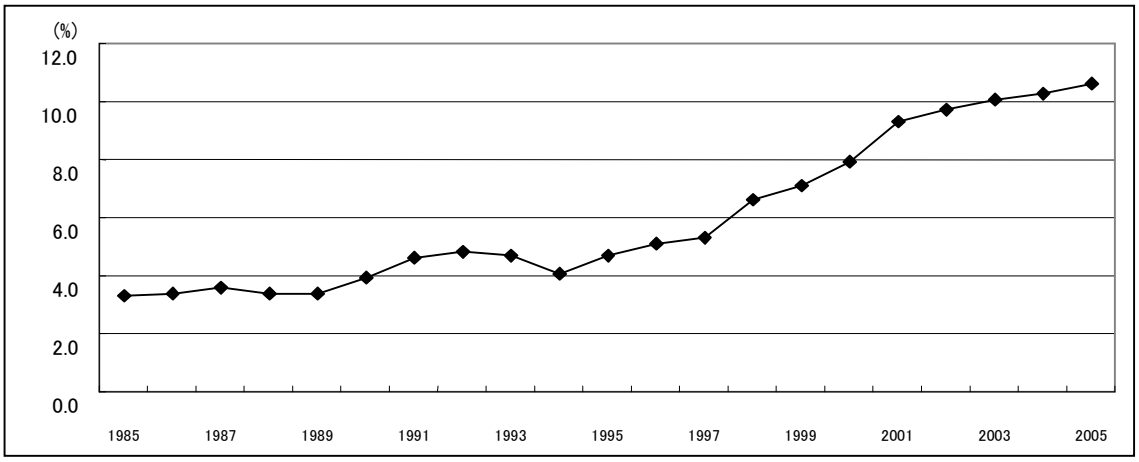
3.2.1 フィリピン政府に内在する要因

1970 年代フィリピン政府は、石油化学プラントなどの建設を目指す 11 大工業プロジェクト計画を実行し、輸入代替工業化をさらに進めた。またこのときに、フィリピン政府は地域の経済発達と開発にも取り組もうとしていた。しかし、第二次石油危機やそれに伴う世界的不況の波を受け、このプロジェクトのほとんどが途中で中断を余儀なくされ、多額の負債を抱えることとなった。1980 年代に入るとフィリピンの経済成長率は低下の一途をたどり、それと同時に財政赤字の増大、国際収支の悪化、累積債務の増大により内外の経済状況は悪化して、経済危機に直面した。また、世界的不況の影響を受け輸出も伸び悩み、1984 年の為替の変動相場制への移行に伴うペソの切り上げとインフレに見舞われた。1980 年代の経済的停滞とそれに伴う社会不安の高まりを乗り切るために国家的事業の一環として、フィリピン政府は「国策としてフィリピン人の海外での就労を奨励」(二村 2005:3)したのである。この国策の目的は「①海外雇用により国内の失業率を緩和する、②海外で技術を修得し人的資源開発に貢献する、③国内への送金を義務づけることにより外貨獲得、しいては国際収支改善に貢献する、ことである」(同)。

1998 年から 2005 年にかけ、移住労働者による送金額は GNP 成長率の約 0.9%を占めており、その割合は現在も増加の一途をたどっている(図 5 参照)。移住労働者送金はフィリピン経済を押し上げる重要な要因の 1 つである。フィリピン経済にとってこの移住労働者送金は「国家の生命線(vital lifeline for the nation)」(Constable 1997:33)となっているのである。2001 年 8 月には当時のフィリピン大統領は、フィリピン人移住労働者を「海外フィリピン投資家(OFIs: Overseas Filipino Investors)と呼び、改めてフィリピン経済に対する貢献を強調した[17]。

[17] Philippines Today（http://www.philippinestoday.net）より。

図 5：フィリピンの GNP に占める OFW 送金の割合



(出典)フィリピン国家統計局 HP を参考に筆者作成

このようにフィリピン経済は移住労働者の送金に依存し続けている。そのため、移住労働者の失職は国の景気後退にもつながる。フィリピン人労働者が置かれている厳しい労働環境や人権侵害など多数報告されていても、フィリピン政府は労働力輸出を減らす取り組みは行っていない。それどころか、関係機関や関連法案を次々と設立し、政府による移住労働者の依存は一層強まっているといえる。フィリピン政府は海外出稼ぎ労働の積極的参加のプロモートを行なっており、社会のあらゆる層に「移民の文化(culture of migration)」が浸透している(Sills;2007)。そのような環境で海外労働を行なっているフィリピン人労働者は、国から十分に人権等が守られているとは言いがたい状況下にあるため、受入国においてさらに弱い立場に置かれているといえる。

3.2.2　フィリピンの社会問題に内在する要因

3.2.1 でフィリピン政府の国策としての海外労働の要因を概観した。しかし、「状況を微視的にとらえると、フィリピン人の労働移動は、人口過剰、高い失業率と不完全雇用率、貧困、その他のフィリピン国内の問題をかかえる社会経済指標などの大衆を押し出す要因によって説明される」（バレスカス、山田訳 1994:112）。つまり、国策でありながら、その一方で生活のために海外に出稼ぎに行かざるをえない状況であるといえる。

2000 年から 2005 年にかけての日本の人口過剰率が 0.2%であるのに対し、フィリピンの人口過剰率は 1.8%と極めて高い。2000 年から 2007 年にかけての人口過剰率は 2.04%であり、増加傾向にある。

フィリピンではマニラ首都圏に人や富が集中し、他の都市や地域との格差は著しく大き

い。とくに貧困率[18]や失業率、不完全雇用率[19]の地域差は拡大する一方である。フィリピンの地理的状況が経済市場へのアクセスの困難さを招き、地域格差の原因の一つとなっている(二村;2005)。また、ミンダナオ島イスラム教自治地域では、フィリピン政府とフィリピンからの独立を目指すイスラム武装勢力との長年の抗争の結果、開発が遅れているという他所とは異なる原因もある。そのため、イスラム教自治区はもっとも貧困率が高い。2006 年のマニラ首都圏の貧困率が 7.1%であるのに対し、イスラム教自治地域の 1 州、タウィタウィ州は 78.9%であった。フィリピン全土の貧困率も 26.9%と極めて高い。失業率は、2008 年 7 月のフィリピン全土の失業率は 6.8%に対し、マニラ首都圏の失業率は 11.3%と、首都圏の失業率は極めて高い。2007 年 8 月のマニラ首都圏の人口は 11,553,427 人で全人口の 13.0%が首都圏及びその近郊に人口が集中しているため、首都圏及びその近郊の州の失業率は極めて高い。また、女性の失業率が 36.8%に対し、男性の失業率は 63.2%である。そのため「労働者の海外派遣については、フィリピン国内で常に高い失業率を示している労働市場においてミスマッチを減少させると同時に、海外送金による外貨がフィリピン国内に還流し国際収支への貢献等メリットが多くある」(同:109)。フィリピンが抱える社会問題も移住労働のプッシュ要因の 1 つである。

3.2.3 賃金格差

海外出稼ぎの要因の 1 つとして、賃金格差がある。フィリピンでは、6 人家族が生活していくためには 1 日 764 ペソは必要である[20]が、最低賃金は日額 350 ペソしかない。月 30 日働いたとしても月額 10,500 ペソである。台湾では製造業や建設業に従事する外国人労働者にも労働基準法が適用される。そのため、最低賃金は本国労働者と一律で、月額 17,840 元(25,634 ペソ[21])と定められており、その額はフィリピンの 3 倍以上である。安里(2006)によると、香港では外国人労働者の最低賃金が月額 3,270 香港ドル(20,542 ペソ[22])、シンガポールでは月額 295 シンガポールドル(9,525 ペソ[23])と定められており、アジアの他の受入れ国に比べて台湾の賃金は高い。平野(小原)(2006)によると、フィリピン人労働者が受け取った平均賃金は月 16,490 元(23,694 ペソ)で、うち残業代は月 4,975 元(7,128 ペソ)であった。台湾では、他のアジアの外国人労働者受入国よりも高い賃金を得ることができ、このことは大き

---

[18] フィリピン政府はその公式測定基準で、貧困ラインを「食料及びその他の基本的ニーズを満たすために最低限必要とされる年間一人当たりの所得」と定義づけている。貧困率は、3 年に一度国家統計局（NSO: National Statistics Office）が実施している家計調査（FIES: Family Income and Expenditures Survey）のデータに基づき各地域ごとに貧困ラインが算出され、全体の人口／家族数に占める貧困ライン以下の人口／家族数の割合として算出されている。世界銀行は支出ベースで、OECD は平均年収の中央値の半分で貧困ラインを算出しているため、貧困率は各測定基準や計算方法によって若干異なる(国際協力銀行;2008)。本稿では、フィリピン政府の公式な貧困率を用いている。

[19] 週労働時間が 40 時間未満の者を指す。

[20] 国際労働組合組織情報 HP(http://www.jilaf.or.jp/rodojijyo/Phillippines.html)より。

[21] 1 台湾元=1.43 ペソ（2009 年 4 月 24 日の為替レート）換算。

[22] 1 香港ドル=6.28 ペソ（2009 年 4 月 23 日の為替レート）換算。

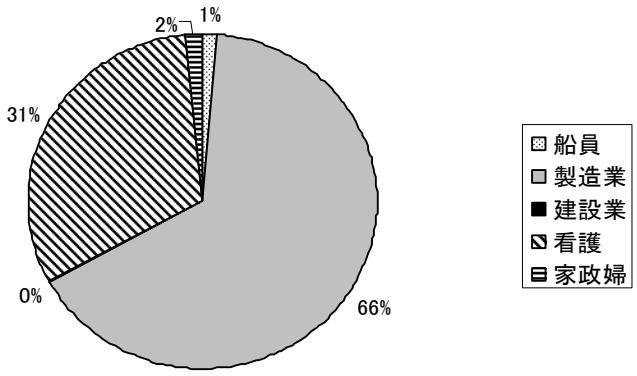
[23] 1 シンガポールドル=32.29 ペソ（2009 年 4 月 23 日の為替レート）換算。

な来台要因の 1 つである。

3.3　台湾におけるフィリピン人移住労働者の概況

台湾には 2009 年 3 月時点で 68,898 人のフィリピン人労働者がいる。前年同月と比べると 3.5%減少している。フィリピン人労働者の 7 割が製造業に従事している(図 6 参照)。フィリピン人は英語話者が多いために、コミュニケーションが取りやすいことや、英語の手順書や説明書を理解できるといった理由で積極的に雇用する企業もある[24]。また、近年看護介護サービスに従事するフィリピン人労働者が飛躍的に伸びている。少子高齢化や女性の社会進出といった理由により、介護サービス分野の需要が高まったためである。

図 6：台湾で働くフィリピン人移住労働者の職種内訳(2009 年 3 月)

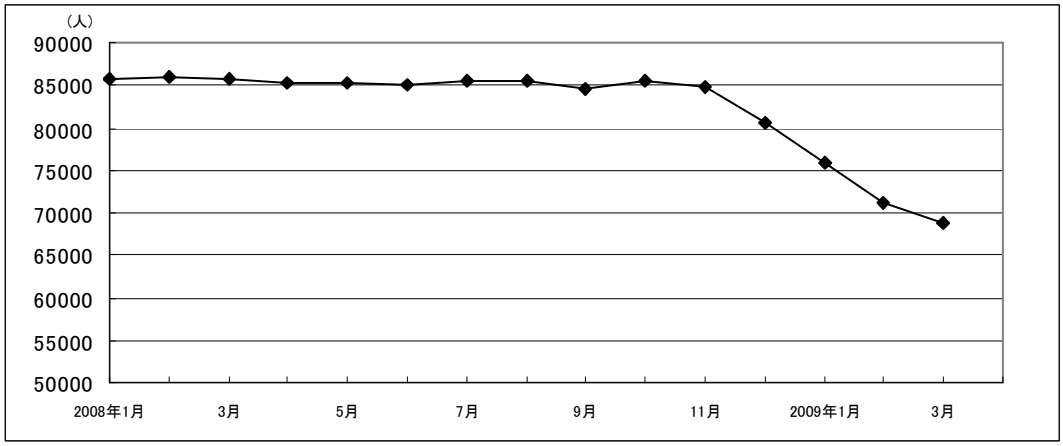


(出典)行政院労工委員会 HP より筆者作成

2008 年 11 月まではフィリピン人労働者数は 85,000 人前後をキープしていたが、2008 年 9 月にアメリカのリーマンブラザース破綻をきっかけに世界的な金融危機の影響を受け、2008 年 12 月から減少傾向にある。世界的な金融危機の影響により、製造業に従事する多くのフィリピン人移住労働者が解雇された。中には契約雇用期間を 1 年以上も残して解雇になった労働者もいる。2008 年 11 月までは 8 万 5000 人前後で推移していたが、12 月から減少していき、2009 年 3 月には 6 万台にまで減少した(図 7 参照)。

[24] 筆者による台湾の人材仲介業者への聞き取り調査から。

図 7：台湾におけるフィリピン人労働者数の近年の推移



(出典)行政院労工委員会 HP より筆者作成

フィリピン人労働者の中には、強制無給休暇をさせられた労働者もいる。1 日休まされるごとに給料から 710 元を差し引く企業もある。不景気がしばらく続くと判断した企業は、契約の途中であっても外国人労働者に解雇を言い渡した。解雇を言い渡されたフィリピン人移住労働者は、仲介業者が間に入りながら企業側と交渉したが交渉は決裂し、多くのフィリピン人移住労働者が契約を残して強制帰国となった。

このような深刻な状況において MECO が行っている救済措置は、必ずしもフィリピン人労働者を保護するための救済であるとは言いがたい。解雇を言い渡されたフィリピン人労働者は MECO に相談をもちかけたが、会社側を説得するというよりはフィリピンにある台湾系エレクトロニクス会社の工場を紹介したり、カナダへの申請を紹介しただけであった[25]。また、Migrant International によると、台湾に在住する多くのフィリピン人労働者が、MECO による労働規制の弾力化により最低賃金より低い賃金しか受け取れてないという[26]。これは、MECO がフィリピン人労働者の解雇の代わりに台湾政府に対してフィリピン人の労働規制の緩和を図り、賃金低下や無休暇などを引き起こしているという。Migrant International は台湾で働くフィリピン人労働者の権利や福祉が損なわれても、MECO は台湾の企業を擁護するような傾向を持っているのではないかと指摘している。本来労働者を守る立場であるはずの MECO も、自国の利潤を守ることが優先され、フィリピン人労働者たちの権利が蔑ろにされているといえる。

2 章 3 章を通して、台湾における外国人労働者は経済活動だけではなく非経済活動においても厳格に管理されており、非常に弱い立場に置かれていることが分かった。残業代の未払いや強制貯蓄、劣悪な住環境や契約に基づかない一方的な解雇など基本的人権が損なわ

[25] 筆者によるフィリピン人移住労働者の聞き取り調査より。
[26] Migrant International（http://migranteinternational.org/）より。

れている。また、長時間労働や休日がないなど過酷な労働条件で働いている。さらに台湾社会からは、労働者としては受入れられていても、生活者としては受入れられておらず、差別や偏見の眼差しで見られている。

また、受入国のみならず、送出国からも基本的人権や福祉が守られていないまま、送出国の利潤のために働かされているという側面もみえる。フィリピンでは「『労働力輸出』は今や伝統的輸出主力商品であった砂糖や銅を上回る実績を挙げる『商品』となっている」(菊地 1992:183)。そのため、多少フィリピン側に不利であっても、フィリピン政府は労働力の受入れ拒否を避けるために二国間航空協定を締結したのがいい例である。また、労働者の失職を防ぐために、フィリピン政府は台湾側から提示されたサービス残業や無休暇を受入れている。それらの代償はさらに弱い立場にいるフィリピン人労働者が払うことになる。

このように外国人労働者は台湾において搾取を受けやすく、差別の対象となり、基本的人権が守られない非常に弱い立場に置かれている。そのような中で、彼らはどのような移民ネットワークを形成し、どのように様々な困難を乗り切りながら台湾で暮らしているのだろうか。

4. 先行研究と本論文の意義

「台湾においては、外国人出稼ぎ労働者は管理の対象としてとらえられており経営学や企業管理学の分野における」(平野(小原) 2002:128)研究や地域社会への適応を調査した研究が多い[27]。一方、外国人労働者が織り成す移民ネットワークについて論じた研究はほとんど見られない。そこで本研究は、台湾における外国人労働者の移民ネットワークに焦点を当て、調査し考察することを試みる。石井ら(1997)は、外国人労働者は制度的に生活保障がない現状であるため移民ネットワークは必要不可欠なものと述べている。また、大野ら(1997)は、フィリピン人の日本での生活において、移民ネットワークは社会的に重要な働きをしていると論じている。では、台湾にいるフィリピン人労働者ではどうだろうか。

4.1 移民ネットワークの役割に関する先行研究

本節では、移民ネットワークに関する先行研究を紹介する。家族や親族から成る移民ネットワークの役割を論じている研究が多い。

4.1.1 Grank and Caces(1992)

Grank と Caces は、過去のデータを基にして移民ネットワークの機能について考察している。Grank と Caces によると、移民ネットワークは移住に伴う費用やリスクを抑えることによって、移住を加速させる働きがあるという。初めて受入国に移住する移民は、情報があまりないなかで自力で仕事や住居を見つけなければならず、移住にかかる費用は非常に高くなる。しかし、移民ネットワークが発達し、送出国にいる移住希望者が受入国にすでに移住している親族や友人から、移住前に受入国の生活や仕事など必要な知識を得ることで、移住に伴う費用とリスクは低下する。また、移民ネットワークは移住前だけでなく、移住後にも重要な役割を果たすという。移民ネットワークは新しくやってきた移民に、住居や経済、仕事の情報または精神的なサポートも提供すると考察している。

4.1.2 Goza (1994)

Goza は、1980 年代にブラジルからアメリカとカナダに移住したブラジル人の適応について論じている。1980 年代半ばから、ブラジルからアメリカやカナダに移住するブラジル人が急増した。アメリカやカナダのある地域に多くのブラジル人が集まり、コミュニティができてきた。その要因として移民ネットワークがあげられている。

Goza は 380 人のアメリカやカナダのある地域に移住したブラジル人を調査したところ、64%のブラジル人が同じ地域出身であった。また、移住した年も 1987 年が一番多く、ほとんどのブラジル人は 1987 年から 1990 年にかけて移住していた。また、初めてカナダに着いたときにどこに泊まったかを質問したところ、39%が友人の家、20%が親族と答えた。カナダに着いてから 6 日以内に仕事が見つかったブラジル人は 32%もおり、80%以上の人がカナダに着いてから 1 ヶ月以内に仕事を見つけることができた。Goza は、ブラジルとカナ

[27] 施(1992)、Tsay(1992)、楊ら(1996)、行政院労工委員会(1996)、謝ら(1997)、余、陶(1999)、楊ら(1999)など。

ダやアメリカのある特定地域が移民ネットワークにより強く結ばれており、移住希望者が移住しやすい条件を作り出していること、先に移住した親族や友人が仕事や住居の援助をしていること、親族や友人に頼ることができ新しい土地にすぐ慣れることができるといった要因から、ブラジル人の移住が増加していると考察している。

4.1.3 Winters, Janvry and Sadoult (1999)

Winters らは、メキシコの 275 地域 1,453 世帯を対象に調査し、メキシコからアメリカに移住した要因と移民ネットワークの機能について論じている。

親族などで構成される移民ネットワークは、メキシコにいる移住希望者に仕事や受入地の情報や住居の援助を提供する。この情報や援助は、移住に伴う費用やリスクを抑えるため、移住の要因の 1 つになっている。そして、移民ネットワークは移住後には経済的援助や、住居や交通手段、食料の援助を提供する。また、Winters 等は、親族間のネットワークが拡大すると、コミュニティが生じると述べている。コミュニティ間同士のネットワークが発達すると、親族ネットワークがない人にも援助を提供することができるようになり、移住は費用やリスクが高いものという認識から、メキシコ人にとって一般的なものに変わったという。そのため、多くの移民希望者に移住の機会が開かれることになり、アメリカにおけるメキシコ人移民増加の要因になったと論じている。

4.1.4 Bauer, Epstein and Gang (2000)

Bauer らは、アメリカに移住したメキシコ人移民に対して、7000 以上ものメキシコ人世帯に行なった調査である。本調査は、ある特定のアメリカにある地域に移民したメキシコ人の合計数、移民したメキシコ人数、移民を経験したことがあるメキシコ人数を調査分析し、移住地と出身地との関係を明らかにした。

本調査によると、あるアメリカの受入地域の移民ネットワークが拡大するにつれて、その受入地を選択する移民も増加することが明らかになった。メキシコのある地域出身者はアメリカのある特定地域に移住しようとする。これは、メキシコのある地域とアメリカのある地域とが、親族や友人から成る移民ネットワークによってつながっており、新しい移民にとって移住しやすい環境だからである。Bauer 等は、ある地域への移住を決定付ける送出し要因として、3 つの要因をあげている。1 つ目は、移民ネットワークを通じて、移住前から移住地域の労働市場について情報が得られること。2 つ目は、アメリカでもメキシコの商品が手に入れやすくなること。3 つ目は、先に移住した家族や親族からの様々な援助を期待できることである。また、Bauer 等は、移民が増えることで、移民間同士で仕事の取り合いが起き、それが賃金低下に影響するというマイナス面についても述べている。

4.1.5 Arango (2000)

Arango は、移民ネットワークは移住している、あるいは移住先から戻ってきた親族や友

人とのつながりで構成される対人関係の総体であると述べている。そして、この移民ネットワークは経済的サポートや仕事を提供するほか、移住に伴う費用を抑える働きもある。また、移民ネットワークは、移住の要因の 1 つであるという。多くの移民は、他の誰かが移住し、送出国と受入国とをつないでいるために移住するという“連鎖移住(chain migration)であると述べている。Arango によると、個人的な結びつきで移住した場合はソーシャルキャピタル(social capital)[28]が形成されるが、個人間のネットワークではなく斡旋業者を通して移住した場合は、ソーシャルキャピタルは同様に生じることはないという。

4.1.6 Massey and Aysa (2005)

Massey と Aysa はラテンアメリカからアメリカに移住した移民に対して、移住とソーシャルキャピタルの関係を論じている。

ソーシャルキャピタルとは、個人やグループになんらかの利益をもたらすネットワークのことである(Bourdieu and Wacquant;1992)。Massey と Aysa は、メキシコ移民だけでなくプエルトリコやドミニカ共和国、コスタリカといった他のラテンアメリカからの移民も、先に移住した親族や友人からソーシャルキャピタルを受けていると報告している。ソーシャルキャピタルは、移住に伴う費用を抑え、アメリカへの移住の要因の 1 つとなっている。また、初期にアメリカに移住してきた移民よりも、移民ネットワークを頼りに移住してきた移民のほうが教育レベルや技術的なレベルは低いが、先に移住していた移民とのソーシャルキャピタルを利用して、仕事や住居が確保しやすくなると考察している。

4.1.7 樋口(2005)

樋口は在日ブラジル人企業家に対する調査を行い、企業家らが持つ社会的ネットワークの特徴を再考している。

在日ブラジル人が日本でレストランや雑貨店といったビジネスを設立する際に、ビジネスに必要な経験、情報や信用、資金を提供してもらえるネットワークを調査した。その結果、金銭面でのサポートは家族と日本で知り合った友人から提供をうけており、経験と情報･信用では家族よりも、日本で知り合った日本人やブラジル人から提供をうけていることが分かった。その一方で、親戚やブラジルにいたときからの友人は、ビジネス設立に必要なソーシャルキャピタルをほとんど提供していなことが明らかになった。本調査より、樋口は移住地である日本で新たに構成されたネットワークの重要性を論じている。

4.2 フィリピン人移住労働者の移民ネットワークに関する先行研究

本節では特にフィリピン人移民を対象とした移民ネットワークに関する研究を紹介する。

---

[28] Social capital には「社会資本」「社会的資本」「社会関係資本」「関係資本」「ソーシャルキャピタル」など様々な訳があり定訳がないため、誤解を生じないように本稿では「ソーシャルキャピタル」と表記する。

4.2.1 Caces, Arnold, Fawcett and Gradner (1985)

Caces らはフィリピンイロコスノルテ州に在住のフィリピン人 1700 人以上を対象に、1980 年代半ばに移動の動機付けと移住地の選択について調査を行なった。

Caces らはアメリカ州に移住している親族の有無とアメリカへの移住希望について調査した。その結果、アメリカに親戚がいないフィリピン人では、わずか 1.0%の人がアメリカへ移住したいのに対し、アメリカに 3 名以上親戚がいるフィリピン人では、74.9%の人がアメリカへしたいと答えた。また、アメリカにいる親戚数が多くなるにつれて、アメリカへ移住したい人も増えることが分かった。

また Caces らは、マニラ及びハワイに住居を提供したり仕事探しを手伝ったりしてくれる親戚や友人がいるフィリピン人に、マニラ及びハワイへの移住希望についても調査している。この調査結果によると、マニラに親戚や友人がいないフィリピン人で、ハワイへの移住希望がある人は 0.9%であった。それに対し、ハワイに親戚や友人がいる、あるいはマニラとハワイ両方に親戚や友人がフィリピン人で、ハワイへの移住希望がある人はそれぞれ 21.4%と 14.9%であった。Caces 等は、移住は純粋な個人の現象ではなく、社会的ネットワークに関連しておこると考察している。

本研究では、移民ネットワークの役割として移住の動機付けが明らかになった。大量のデータに基づいており信頼性があると思われる。しかし、移民ネットワークには移住の動機付けという役割以外もあると考えられる。移民ネットワークのその他の役割についてはほとんど述べられていない点に限界がみられる。

4.2.2 Goss and Lindquist (1995)

Goss と Lindquist は、フィリピン人移住労働者を例に、国際労働移民の構造化理論について論じている。

移民ネットワークは国際労働移民の過程において重要な働きがある。この移民ネットワークは一般的に親戚や友人などで構成される。移民ネットワークは移住地の選択に影響を及ぼすほか、仕事や住居の提供といった様々なサポートを提供する。そのため、ある特定地域に移民が集住する傾向にあるという。しかし、Goss と Lindquist は、近年こういった親族や友人との相互扶助を元にした移住労働よりも、斡旋業者を介して移住労働するシステムが次第に制度化してきていると指摘している。1977 年までは、フィリピンの南タガログ地方のある小さな村落の移住はほぼアメリカに限定されていた。この移住は村落に住んでいた家族や親族、友人から構成される移民ネットワークを頼りにした移住であった。その後、斡旋業者を介した契約労働というシステムが制度化されていき、1980 年代からこの村落の移民は、このシステムを利用してアメリカだけでなくより多様な地域や職に移住労働していった。

この研究は、移民ネットワークによって提供された移住ではなく、斡旋業者を介した移住労働のシステムが制度化されたことを指摘している点に特徴がある。しかし、相互扶助

による移民ネットワークの役割については論じられているが、斡旋業者による移住労働のシステムが制度化された場合の移民ネットワークの役割についてはほとんど論じられていない。斡旋業者を介して移住した場合、移民ネットワークも越境しているのか、それとも移住地で新たに構成されるのか、その点が本研究の課題となるだろう。

4.2.3 Nagasaka (1998)

Nagasaka はフィリピンイロコス地方のある村落からイタリアへ移住した移民を対象に移住の展開過程と親族ネットワークの拡大について論じている。調査は 1992 年 12 月から行われ、ある親族の移住の動態を調査している。

イロコス地方のある村落から 1 人の女性が、イタリアで家政婦として働いている学生時代の友人に会い、イタリアへの移住を決意する。友人は女性に入国や仕事のサポートし、女性は家政婦の仕事を見つけることができた。それから、女性は自分の兄弟姉妹に対して、渡航にかかる費用を貸したり住居の世話をしたりして、8 人兄弟のうち 6 人がイタリアの同じ地方に移住した。また、そのうち 2 人が夫婦で移住した。その後、兄弟だけではなく、親戚などへも援助が広がっていった。親族で構成される移民ネットワークは、移動に伴う費用の援助、住居や仕事のサポートを提供し、イロコス地方のある村落におけるイタリアへの移住が拡大していった。

また、Nagasaka はイタリア移住者の子ども養育についても注目している。イタリアに移住労働した夫婦の間に生まれた子どもをフィリピンにいる親族が養育し、両親は養育費を送金している。この近親者間の国境を越えた協力関係について論じている。

この研究は、移住の展開過程及び故郷と移住地間の密接な親族ネットワークの拡大と重要性について、フィールドワークを通して論じている点が特徴である。また、国境を越えた協力関係の形成維持は、近親者間の緊張が生じる、あるいは顕在化する契機ともなりうる不安定な側面も持つという点を明らかにしている。この研究で論じられているネットワークは、血縁関係を元にした親族ネットワークのみである。イタリアで新たに形成されたネットワークについて論じられていない。イタリアに移住したフィリピン人労働者は、イタリアではネットワークを形成しないのか、親族ネットワークはイタリアでどのように拡大していったのかについては、この研究の課題であろう。

4.2.4 Lan (2003)

Lan は、その論の中で台湾における外国人労働者のネットワークについて触れている。Lan は台北に在住のフィリピン人およびインドネシア人移住労働者について述べている。

Lan によると、台北駅周辺はフィリピン人およびインドネシア人労働者のネットワークの中心地になっている。インドネシア人労働者は新しい友人を見つけたり、来台前のトレーニングで出会った他のインドネシア人労働者に会うために台北駅周辺に訪れる。フィリピン人労働者の場合、教会がネットワークの中心になっている。台湾にいる移住労働者のほ

とんどが携帯電話を持っており、常に友人と連絡を取り合うことができる。しかし、家政婦として働いている移住労働者は、製造業で働く移住労働者に比べて休みが少なく、社会的なサポートや精神的安らぎが得にくいという。

Lan の報告は、台湾の外国人労働者のネットワークについて論じた、数少ない報告である。台湾における外国人労働者が織り成す移民ネットワークについて明らかにした研究はほとんど見ない。この研究により、台北駅や教会はネットワークの中心的役割を果たすことが分かった。しかし、社会的なサポートとは何か、精神的安らぎとは何かまでは言及されていない。また、調査対象者の性別や台湾滞在歴が不明であり、論文中の「家政婦」はフィリピン人なのかインドネシア人なのかなど不明な点が多い。これらの点も本研究に課せられた大きな課題であると思われる。

以上、移民ネットワークに関する先行研究を概観してきた。いずれの研究も、その機能について詳しく論じられており、一定の成果をあげている。多くの先行研究は家族や親族から成る移民ネットワークの機能について細かく論じている。しかし共通の課題は、家族や親族からなる移民ネットワークのみを対象としている点である。現在の移住労働は家族や親族などの相互扶助による移住だけではなく、仲介業者を介した移住も多く見られる。相互扶助による移住から仲介業者を介した移住へと変化した場合、単なる移住の仕方が変わっただけではなく、その移民の生活や社会も変化していると考えられる。つまり、移住の仕方の相違は、移住後の生活や社会にまで影響を及ぼすのではないかと思われる。仲介業者を介した移住労働の場合の移民ネットワークの形成やその役割やサポートは、従来の先行研究の枠組みから見ることができないのではないだろうか。

4.3　本研究の意義

本研究の意義は大きく 2 つある。1 つ目は、仲介業者を通じて単身で台湾にやってきたフィリピン人移住労働者に対してフィールドワークを行い、移民ネットワークについて論じている点である。4.1 および 4.2 において、移民ネットワークの機能に関する研究を概観した。いずれの研究も、親族や友人などの相互扶助による移住の場合のネットワークの機能を論じている。4.2.2 の Goss and Lindquist が指摘するように、近年では仲介業者を介した移住労働が増加している。台湾では外国人労働者の家族の呼び寄せは認められておらず、ほとんどの外国人労働者は仲介業者を介して単身でやってきている。親族や友人からなる移民ネットワークを利用して移住した場合と、様相は変わってきている。本論文は、台湾にいるフィリピン人労働者の移民ネットワークの形成と役割に焦点を当て、近年増加してきた仲介業者を介した移住労働者の移民ネットワークの新たな役割やその問題点などを明示することができると思われる。

2 つ目は、本研究はインタビュー形式だけでなくフィールドワークも行い、インタビューから得られたフィリピン人労働者の「語り」と日々の「出来事」を合わせて論じている点

である。調査当初は移民ネットワークについて調査を行っていた。しかし、著者と対象者との関わりが少しずつ「調査」から「交流」へと変化していった。その交流を通して初めて見える移住労働者の生活世界を明らかにすることができる。これは、台湾における外国人労働者の立場を考察するうえで重要であるといえる。

台湾にいる外国人労働者の移民ネットワークを先行研究の枠組みから見ることはできないのではないだろうか。先行研究にあるような、個人的な人間関係をもとにした移住は、家族や親族が移住に必要な資源を提供する。また、移住地にすでに家族や親族からなるコミュニティが存在しており、そのコミュニティに参加することになる。一方、仲介業者を介した移住の場合、仲介業者が移住に必要な資源を提供する。また、移住地には家族や親族がいることは少ない。移住過程が違えば移民ネットワークの形成にも違いが生じるのではないだろうか。この点を明らかにするためにも、本調査を行なう必要があると考える。

台湾にいるフィリピン人労働者は管理の対象とされ不安定な立場に置かれながら、フィリピンにいる家族のために毎日働いている。それと同時に台湾で自己の価値観を持ちながら生活もしている。労働者であると同時に生活者でもある彼女たちは台湾で日常の生活の中でどのような移民ネットワークを形成し、彼女たちはどんな現実を生きているのか。本研究は、台湾にいるフィリピン人労働者の移民ネットワークの様相を明らかにすると同時に、彼女たちが台湾でどのような生活世界を形成しているのかを検証する研究でもあるといえる。

5. 調査概要

5.1 調査協力者

本研究の調査協力者は、就業服務法第 46 条第 8 項から 10 項に該当するフィリピン人労働者である。筆者の中国語能力に問題があり、英語でコミュニケーションをとることができるため、フィリピン人労働者を調査対象者とした。調査方法により、以下の 3 つのグループに分けることができた。

A グループ：台中縣大雅にある N 社で働くフィリピン人移住労働者 20 名。N 社は主に電子部品の工場であり、協力者たちは製造業に従事している。工場から車で 10 分弱のところにドミトリーがあり、1 部屋 8～10 人で共同生活をしている。ドミトリーは女性のみで、フィリピン人のほかにタイ人女性がいる。ドミトリーには、寝室以外にフィリピン及びタイのテレビ番組が見られる食事部屋やスポーツをする部屋、荷物を置く部屋などがある。また、計 12 台のパソコンが置いてあり、10 分 10 元でインターネットができるようになっている。

A グループの平均年齢は 25.86 歳で最年少が 22 歳、最年長が 31 歳である。平均台湾滞在歴は 25.6 ヶ月で、最短滞在歴が 13 ヶ月、最長が 36 ヶ月であった。

表 3：A グループ一覧（全員女性、滞在歴の単位は月）

	年齢	台湾滞在歴	中国語能力		年齢	台湾滞在歴	中国語能力
A1	25	28	3	A11	25	13	1
A2	22	28	2	A12	28	13	2
A3	31	32	2	A13	23	25	2
A4	31	33	2	A14	30	32	2
A5	30	31	2	A15	31	33	2
A6		27	2	A16	25	16	2
A7	24	29	2	A17	27	14	2
A8	25	36	2	A18	24	27	1
A9	24	36	2	A19	25	29	1
A10	28	35	2	A20	24	16	1

(注 1)空白は未回答

(注 2)中国語能力：1.全然できない　2.あまりできない　3.まあまあできる　4.流暢にできる

B グループ：C 仲介業者を通してアンケートを行ってもらったフィリピン人移住労働者 12 名である。C 仲介業者は台中市にある。今回は、主に家政婦や介護看護に従事しているフィリピン人や台中縣から比較的遠いところに住んでいるフィリピン人にアンケート配布を依頼した。C 仲介業者の 2007 年の評価は 75 点の B ランクであった。

B グループの平均年齢は 34.0 歳で A グループよりも高く、最年少が 23 歳、最年長が 45

歳であった。平均台湾滞在歴は 40.0 ヶ月で A グループより長かった。最短が 7 ヶ月、最長が 80 ヶ月であった。

表 4：B グループ一覧（滞在歴の単位は月）

	性別	年齢	台湾滞在歴	現在地	職業	中国語能力
B1	男性			沙鹿	製造業	2
B2	男性	28	7	嘉義	製造業	2
B3	女性	29	24	彰化	製造業	2
B4	女性	27	60		製造業	2
B5	女性			彰化	介護	3
B6	女性			台中市	介護	2
B7	女性	40	23	台中市	介護	2
B8	女性	35	3	台中市	介護	1
B9	女性	23	28	彰化	介護	2
B10	女性	27	66	彰化	介護	1
B11	女性	45	80	彰化	家政婦	2
B12	女性			嘉義	家政婦	2

(注 1)空白は未回答

(注 2)中国語能力：1.全然できない　2.あまりできない　3.まあまあできる　4.流暢にできる

C グループ：教会やレストランで話しを聞いたフィリピン人移住労働者 12 名。今回の統計的な調査には含まれていない。しかし、貴重な発言を多くいただけたため、その発言は分析で引用している。C5 と C10 は介護労働者として、C11 は家政婦として、それ以外の協力者は製造業に従事している。C12 のみ男性である。平均年齢は 29.8 歳、平均台湾滞在歴は 45.8 ヶ月であった。

表 5：C グループ一覧（滞在歴の単位は月）

	性別	年齢	台湾滞在歴		性別	年齢	台湾滞在歴
C1	女性	24	24	C7	女性	24	8
C2	女性	33	15	C8	女性	27	47
C3	女性		33	C9	女性	36	55
C4	女性	25	48	C10	女性	40	46
C5	女性	28	24	C11	女性	28	96
C6	女性	26	24	C12	男性	37	84

(注 1)空白は未調査

調査対象者全員、仲介業者を通して台湾にやってきている。台湾に来る前から親族か友人がいた協力者はAグループ、Bグループ合わせて9名おり、Aグループで5名(25.0%)、Bグループで4名(33.3%)いた(表6参照)。Aグループ、Bグループともに各1名が親戚で、残る7名は高校のときの友人や幼馴染であった。7名とも、現在友人たちは違う会社で働いている。7割以上の協力者が台湾にまったく知り合いがいなかった。これらの協力者たちは、自国ネットワークは越境しておらず、1からネットワークを築いているといえる。台湾にフィリピン人の友人がいるか否かについて聞いたところ、Aグループは20名全員、Bグループは7名がいると答えた。

表6

	台湾に来る前から台湾に友人や親戚がいた協力者	
	いた	いなかった
Aグループ	5名（1名親戚・4名友人）	15名
Bグループ	4名（1名親戚・3名友人）	8名

5.2　調査方法

Aグループに行なった調査の方法は1人30分から数時間の半構造化インタビュー方式で2008年10月から2009年3月まで行なった。使用言語は英語である。インタビュー場所は主にAグループのドミトリーで行い、その他フィリピン料理屋などでも行なった。必要があれば再度インタビューを行なったり、メールで聞き取りを行なったりした。また、インタビューとは別に協力者たちと食事や買物など行動をともにしたり、誕生日パーティや送別会などのイベントに参加したりしながら、そのときの会話の内容や状況を記録した。Bグループに行なった調査方法は多肢選択肢と自由記述式のアンケート調査で、2008年11月から12月まで行なった。アンケート用紙の使用言語は英語である。アンケートはC仲介業者から直接協力者たちに渡してもらい、後日回収してもらった。Cグループに行なった調査方法は非構造化インタビュー法で、2008年9月から2009年4月まで行なった。教会や教会で行われたイベントなどを通して知り合った協力者や筆者の知り合いに紹介してもった協力者に台湾での生活や状況などを質問した。

調査の内容としては、第1に移民ネットワーク形成が挙げられる。1.3.2で論じたように、移民ネットワークには個人的なつながりの他に、組織や機関との関わりも含まれる。今回は、特に個人的なつながりに注目して調査を行なった。まず、協力者が台湾でどのような人とつながりをもっているのかを調査した。どのような要素がある人とある人を結び付けているのか調査を行なった。第2に移民ネットワークの機能について、台湾で人のつながりがあってよかったことについて質問した。次に、台湾での情報源について質問した。情報源について予備調査を行なった結果、具体的に回答することが難しいと判断したため、

調査者が回答しやすくするために台湾で休日によく行く場所の情報源について質問した。それから、その情報源から得ている他の情報の有無について聞いた。また、台湾での生活全般について協力者たちの思いを聞いた。それが、移民ネットワークの形成や役割とどのような関連があるかを調査した。また、5.2.4 で先行研究として挙げた Lan(2003)は、フィリピン人移住労働者にとって教会が移民ネットワークの中心になると報告している。そこで、フィリピン人移住労働者が多く集まる教会は、どのような点で移民ネットワークの中心地であるかを焦点にあて、フィールドワークを行なった。さらに、協力者たちがどのような人々とどのように交流しているのかを把握するために、参与観察を行なった。その他の調査項目は以下の通りである。

1. 年齢
2. 台湾滞在期間
3. 業種
4. 中国語能力
5. 住環境
6. 勤務条件（休日数、1 日の就労時間、同国人の同僚の有無など）

5.3 分析の方法

移民ネットワークの形成に関しては、まずインタビューとフィールドワークを通して調査し、どのような要素が結びつきに影響しているのか分析を行う。インタビューと自由記述式で得られた回答を質的統合法(KJ 法)で、移民ネットワークの機能について分類した。KJ 法とは得られたデータをカードに記述し、そのカードをグループ化し整序する方法である。雑多なデータを統合するうえ、先入観や偏見を排してその状況を構造化することができ、本調査で得られたデータを類型化するのに適していると考えこの方法を使用した。まず、ネットワークがあってよかった点についての回答の意味内容によって分類を行い、また重複した意味内容をもつ回答をまとめ、ネットワークの役割を抽出した。次にネットワークの役割を構成するそれぞれの属性をキーワードとして抽出した。この方法で得られた結果を以って、移民ネットワークの役割を明らかにする。また、フィールドワークで得られた結果からも移民ネットワークの役割を論じる。台湾の情報源については、情報の内容と情報源について結果を表示する。

6. 結果と考察

6.1 移民ネットワークの形成

6.1.1 フィリピン人同士のつながり

A グループのドミトリーには 100 人前後のフィリピン人移住労働者がいる。全員仲は良いが、インタビューとフィールドワークを通して、常に一緒におり非常に仲がいい 2 人（A4 と A15、A8 と A9 ）に注目し 2 人の共通点を探った。また、それとは対照的に一緒にいるところを見たことがない 2 人（A15 と Z）についても調査した。さらに、インタビューを通して、C7 と彼女と同じ寮に住むフィリピン人労働者 Y との関係についても調査した。

事例 1：A4 と A15 の場合

A4 と A15 は、ドミトリーにいるときに一緒に食事をすることが多い。また、休みの日に一緒に出かけることも多い。どちらかが席を外している間に携帯が鳴った場合、代わりに電話に出る間柄である。お揃いの服やアクセサリーなどを持っている。A15 は A4 の写真が入った携帯ストラップを使用している。また、A15 は A4 の夫とも面識があり、2 人は親密であることがわかる。

A4 と A15 はフィリピンでの仲介業者は異なるが、同じ時期に台湾へ来た。2 人とも、台湾滞在歴は 2 年 10 ヶ月である。ドミトリーの部屋は違うが、工場では同じシフトで同じ職場に就いている。したがって、会社へはいつも一緒に行っている。また、2 人は年齢も同じである。A4 と A15 の共通項は表 7 の通りである。

表 7

	来台時期	出身地	年齢	部屋	シフト	職場
A4-A15	○	×	○	×	○	○

(注 1)○は「同じ」、×は「異なる」を意味する

(注 2)「出身地」とはフィリピンの生まれ育った場所をさす

(注 3)「部屋」とは寝室をさす

(注 4)「シフト」とは交代勤務時間をさす

2 人は寮の部屋は異なるが、工場の職場が同じであるため労働時間も共に過ごしており、台湾生活の中で他のフィリピン人労働者よりも比較的長い時間を共有している。共に過ごす中で、仕事の話や互いの家族といったプライベートな話をする仲になっていった。A4 は既婚者で息子が 1 人おり、A15 は独身である。共に過ごした長い時間の中で、互いに相手としかしないプライベートな話をするようになったりして、2 人の関係は親密になっていったのである。長い時間を共に過ごすことで仲が深まり、また、仲が深まっているので共に過ごす時間も長いといえる。2 人の親密な間柄は、フィールドワークを通しても見ることができた。2 人は行動を共にすることが多く、A4 は A15 にお金を貸したり、食事をおごったり

という場面が見られた。

事例 2：A8 と A9 の場合

A8 と A9 は、ドミトリーで一緒にいることが多い。また、休みの日には一緒に買物へ行ったり、ドミトリーの近くで料理を作ったりしている。友人同士でパーティをするときも、2 人が料理を担当する。お互いの家族についてよく知っている。母親がいない A9 にとって、A8 は家族のような存在であるという。　2 人は、フィリピンでの仲介業者は異なるが、同じ時期に台湾に来た。2 人とも台湾に約 3 年住んでいる。2 人はドミトリーの部屋や工場のシフト、職場が同じである。また、2 人とも独身である。

A8 と A9 の共通項は表 8 の通りである。

表 8

	来台時期	出身地	年齢	部屋	シフト	職場
A8-A9	○	×	×	○	○	○

(注 1)○は「同じ」、×は「異なる」を意味する

(注 2)「出身地」とはフィリピンの生まれ育った場所をさす

(注 3)「部屋」とは寝室をさす

(注 4)「シフト」とは交代勤務時間をさす

A8 と A9 も同じ時期に台湾に来ており、部屋や職場も同じであり、長い時間一緒に過ごしている。2 人とも台湾料理が苦手なため、ドミトリーの近くで料理を一緒にすることが多い。しかし、A8 が主に料理をして、A9 はそれを手伝っているような感じであった。A8 と A9 の場合も、一緒に買物をし料理をするといった共に過ごす時間の中で 2 人のつながりが徐々に強まっていった。共に過ごす中で、互いの家族関係など個人的な話をするようになったり、互いに慕うようになったりしていき、姉と妹のような関係になっていったのである。

・事例 3：A15 と Z の場合

同じ工場で働いている A15 と Z はドミトリーも同じである。しかし、普段はあまり顔を合わすこともなく、時々ドミトリーで顔を合わせても特に話はしない。Z は A15 よりも遅く台湾に来たらしいが、A15 は Z がいつごろ来たかはっきりとは知らない。2 人の部屋は違う階にあり、工場のシフトも生産ラインも違うのでドミトリーでもほとんど会わない。A15 は月曜日から金曜日まで働き、1 週間交代で夜勤と日勤であるのに対し、Z は 3 勤 1 休である。A15 は出身地や年齢など Z についてほとんど知らない。2 人は同じ工場で同じドミトリーであっても、たまに顔を合わせる知り合い程度の仲である。2 人は共有する時間が短く、互いに顔を合わせることが少ないうえ、互いついての情報もすくないことから、2 人のつな

がりは弱い。

表 10

	来台時期	出身地	年齢	部屋	シフト	生産ライン
A15-Z	×			×	×	×

(注 1)○は「同じ」、×は「異なる」を意味する

(注 2)「出身地」とはフィリピンの生まれ育った場所をさす

(注 3)「部屋」とは寝室をさす

(注 4)「シフト」とは交代勤務時間をさす

(注 5)空白は未調査

事例 4：C7 と Y の場合

インタビューを通して、C7 と、C7 と同じ工場で働く Y も親密度が高いつながりであることが分かった。2 人は、同じ時期に台湾へ来た。実家が農業をしているという 2 人の状況も似ている。台湾には 8 ヶ月いる。2 人とも台湾ではじめて知り合ったがミンダナオ北部出身で、セブアノ語[29]を話すことができる。C7 と Y は同じシフトで、部屋も同じである。そのため、ほとんどの時間を一緒に過ごしていた。Y がフィリピンに帰国してからは、C7 は、ドミトリーでも 1 人でいることが多くなった。

C7 と Y の共通項は表 9 の通りである。

表 9

	来台時期	出身地	年齢	部屋	シフト	生産ライン
C7-Y	○	○	×	○	○	

(注 1)○は「同じ」、×は「異なる」を意味する

(注 2)「出身地」とはフィリピンの生まれ育った場所をさす

(注 3)「部屋」とは寝室をさす

(注 4)「シフト」とは交代勤務時間をさす

(注 5)空白は未調査

C7 と Y は同じ時期に台湾に来たが、その期間は 8 ヶ月と比較的短い。2 人は他のフィリピン人同僚と 20 名前後で台湾へやって来た。その中で偶然出身地域が同じであった Y と知り合いになった。普段はタガログ語で会話をするが、2 人はセブアノ語を話すことができ、話の内容によってはセブアノ語で話すこともある。

2 人は出身地域が同じであるため、互いに親近感を感じているのである。同じ出身地域と

[29] セブアノ語とは、セブ島、レイテ島、ネグロス島東部、ボホール島、ミンダナオ島なでで話されている言語である。タガログ語は主にマニラ首都圏とルソン島中部で話されており、フィリピンの国語の基礎となっている(大野、寺田編;2001)。

いう共通点を見つけ、徐々に仲が深まってきたのである。

同国人同士で同じ生活空間にいても、1 対 1 の人間関係は常に均一になるとは限らない。人と人との関係は常に同じではなく、ある人との結びつきは強く、別のある人との結びつきは弱い場合もある。彼女たちが織り成すネットワークは強いつながりと弱いつながりから成っているのである。人と人を結び付けるものも常に同じとは限らない。同じ国、同じ地域出身、同じ会社、同じ立場、同じ寮、同じ時期に来台…などの共通項の多さや、さらに共有する時間の長さや台湾で同じ立場であるという親近感などの要素が複雑に絡み合って、人と人のつながりは強さを増す。会社も住居も労働時間も一緒で休日も顔を合わすといった状況は、最初は知らない者同士でも「一緒にここにいる」といった感情や親密性、連帯感を生み出す。そうして形成された強いつながりと、まれにしか顔を合わさず比較的疎遠な人との弱いつながりからネットワークは構成されているのである。

6.1.2　フィリピン人同士のネットワーク形成のきっかけ

協力者たちが形成しているネットワークは同じ会社内だけではない。インタビュー及びアンケート結果から、台湾で知り合った違う会社で働くフィリピン人の友人がいるという協力者が 17 名（53.1%）いた。どのようなきっかけで知り合いになったのかを尋ねたところ、以下のような結果となった。

表 11　(複数回答)

	A グループ	B グループ
教会で知り合った	7 名	4 名
ドミトリーの近くに住んでいる	3 名	
同僚からの紹介	1 名	
ディスコで知り合った	1 名	
ショッピングモールで知り合った		1 名
フィリピンから台湾へ行く飛行機の中		1 名
偶然	1 名	

「教会で知り合った」と回答している人が 11 名ともっとも多い。フィリピンは「国民の 80%以上がローマ･カトリック信者」(大野、寺田編 2001:88)であり、台湾にいる多くのフィリピン人移住労働者は日曜日に礼拝に訪れる。教会について質問したところ、A グループで 19 名(95.0%)が、B グループで 9 名(75.0%)が休日に教会へ行くと答えている。台湾にはフィリピン人神父によるタガログ語のミサが行われる教会がいくつかある。台中市にもそういった教会が台中駅近くにあり、毎週日曜日には 400 人近くのフィリピン人がミサに訪れる（6.4 に詳述）。何度か訪れているうちに顔見知りになり、やがて挨拶や軽い会話を交わすようになるのである。次に多かったのは「ドミトリーの近くに住んでいたため」であった。

A グループのドミトリーがある大雅は、台中工業区が比較的近いため、外国人労働者のための他の会社のドミトリーが点在している。その外国人労働者を対象とした雑貨店やレストランがあり、そこへ行き来しているうち何度か顔を合わすようになり、知り合いになったのである。

その他、少数意見として「同僚の紹介」、「ディスコ」「ショッピングモール」「飛行機」「偶然」という意見が聞かれた。教会、ディスコ、ショッピングモールといった、多くの人と出会える場での出会いや、近所や飛行機といった偶然的な出会い、同僚からの紹介といった人づての出会いが、フィリピン人同士をつなぐきっかけとなることが分かった。

A2：「日曜日に教会に行ったときによく会っており、そのうち自然と仲良くなりました。その友達を通じて他のフィリピン人とも知り合いになりました。」

A5：「偶然仲良くなりました。フィリピン人はとてもフレンドリーだから、すぐに仲良くなれます。それは台湾だけのことじゃないですよ。」

A11：「教会の聖歌隊（午後のミサ）に入っているから、同僚以外の知り合いがたくさんいます。聖歌隊は同僚に誘われて入りました。」

A16：「以前住んでいたドミトリーの近くに別の会社のドミトリーがありました。そこにもフィリピン人がおり、よく近くのレストランで会っていましたから仲良くなりました。今も教会で時々会いますね。」

B8：「台湾に来るときに同じ飛行機に乗ったフィリピン人と仲良くなりました。」

多くのフィリピン人は来台後にいったん自国ネットワークから切り離されるが、台湾で新たにネットワークを築いていく。限られた行動範囲の中で同じフィリピン人と出会い、交流を深めていく。台湾という異国の地において、マイノリティーであるフィリピン人の多くは、同じような立場であるために親近感を感じ、あるきっかけを通して知り合い交友関係を築いていくのである。

6.1.3　台湾人とのつながり

表 12 は台湾人とのつながりについて質問した結果である。台湾人の友人や知人の有無について質問し、いると答えた回答者には、どのような関係であるかを質問した。そのほとんどが同じ会社で働く台湾人と仕事場で会った時に挨拶や軽い会話をする程度の弱いつながりであった。

表 12

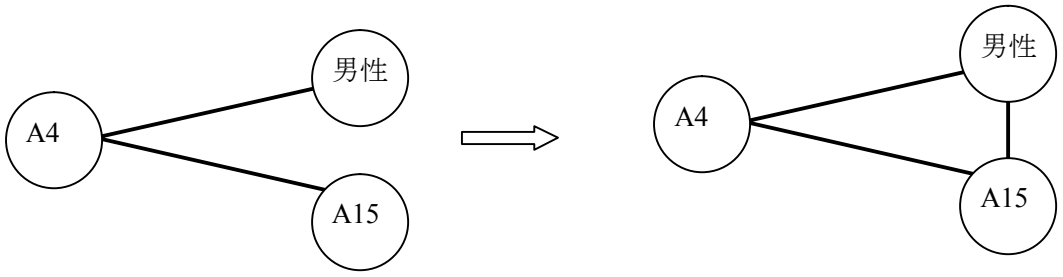
		A グループ	B グループ
いる	同僚で挨拶程度	14	4
	同僚で食事を共にする	0	0
	同僚以外で挨拶程度	0	1
	同僚以外で食事はしないがよく話す	1	0
	同僚以外で食事を共にする	3	0
いない		2	7

調査結果より、台湾人と交友関係を築いている協力者が 4 名いた。それぞれの関係は以下の通りである。

・A4 の場合

「同僚以外で食事はしないがよく話す台湾人の友人がいる」と答えた A4 のドミトリーの近所に市場がある。A4 たちはよくその市場で、料理やバーベキューのための魚を購入していた。その魚屋の台湾人男性と何度か顔を合わせるようになり、言葉を交わすようになった。そこで男性は A4 がフィリピン人であることを知り、また A4 も男性が以前 3 年ほどフィリピンにいたことがあることを知った。そのうち、男性は魚をドミトリーに届けるようになり、バーベキューの世話をするようになった。A4 と男性は中国語と英語と少しのタガログ語を混ぜて会話をしている。2 人は携帯電話の番号も交換しており、電話で連絡を取り合っている。また、A4 が男性と仲良くなったのをきっかけに、A15 のようにバーベキューに参加している他の人たちも男性と知り合い会話をするようになっていった(図 8)。この男性は A4 と A15 がフィリピンに帰るときに、他のフィリピン人労働者と一緒に送別会を開いていた。

図 8：A4、男性、A15 の関係図



2 人は買物を通じて言葉を交わすようになり、フィリピンという共通項があることを知った。A4 の中国語も男性の英語も、十分聞けて話せるまでではない。しかし、互いに知っている言葉を使って、またはできるだけ相手が分かるようにゆっくり話して会話を成立させ

ている。フィリピンという共通項があったため、2 人は仲良くなっていった。その共通項を見つけたのは、2 人が言葉を交わしたからである。

・A1 の場合

「同僚以外で食事を共にする台湾人友人がいる」と答えた 3 名のうち 2 名は、元同僚の台湾人であった。2 名とも同じ台湾人男性を指している。彼らは中国語と英語で会話をしており、連絡を取り合ったり、彼女たちのドミトリーの近くで食事を一緒にしたりしている。2 人は 2 年半以上台湾に滞在しており、そのうち 1 名(A1)は中国語が流暢であるため、台湾人の友人とのコミュニケーションも問題はない。A1 はインタビューで台湾の生活について以下のように答えている。

A1：「台湾にきて他の文化や人に会ってとても楽しいです。台湾人とのフレンドシップもとてもいいですよ。」

A1 のように、中国語が話せることで台湾人とコミュニケーションをとることができ、仕事を離れた場でも会うようなつながりになったのである。A1 は仕事を通じて台湾人の友人と知り合いになった。職場で比較的長い時間一緒にいることで、仕事場だけの付き合いから、仕事場以外の付き合いへとシフトしていった。きっかけは仕事ではあるが、言葉を交わすなかで徐々に親しい関係を築いていったのである。

・A15 の場合

「同僚以外で食事をする台湾人の友人がいる」と答えた 3 名のうち 1 名(A15)は、以前住んでいたドミトリーの近くに住んでいる台湾人の友人がいる。A15 の会社のドミトリーは現在は大雅にあるが、以前は別の場所にあった。そのドミトリーから工場までは毎日会社が用意した送迎バスで通っていた。そのときに近所に住む台湾人女性を何度も見かけるようになった。それから近所の店でも会うようになり、言葉を交わすようになり次第に仲良くなっていった。台湾人女性は 51 歳で、A15 は彼女のことを「ママ」と呼んでいる。この女性はアメリカに住んでいたこともあり、少し英語を話すことができるため、2 人は中国語と英語で会話をしている。また、女性の旦那さんは英語を話すことができる。女性には 2 人の息子（長男は 24 歳）がおり、一度紹介されたという。その後、会社の都合でドミトリーを引っ越すことになるが、A15 はそれからもこの女性と連絡を取り合って、家に食事を食べに行くこともある。また、A15 の誕生日には誕生日ケーキを作って祝ってくれたという。

A15：「以前住んでいたドミトリーから、会社の送迎バスで会社に行くとき、いつも同じ台湾人の女性を見かけました。それ以外でも見かけるようになり、いつの間にか「ママ」と呼ぶようになりました。今は違うドミトリーに引っ越ししましたけど、今も時々ご飯を食べに

お家に行っています。行くときはバスですけど、帰りはちょっと遠いですからいつもご主人の車で送ってもらいます。」

A15 とこの女性のつながりは、女性と A15 が言葉を交わしたことが 1 つのきっかけになって形成されたものである。2 人の関係は A15 と女性が会話を交わしたことから始まっている。何回か顔を合わせるようになって手を振り合うようになり、それから偶然近くの店で出会い言葉を交わしていった。2 人は中国語と英語を混ぜて、コミュニケーションを取りながら関係を築いていったのである。そして、A15 は女性との交友関係を発展させていき、家で食事を共にするほどの仲になった。A15 が引っ越してからも、A15 は 1 人でバスに乗って女性宅に通っていた。その帰りに女性から容器に入れた料理をもらい、しばらくしてから容器を返しに女性宅に伺い、また料理をもらい…と、交流を続けていた。

以上、フィリピン人と台湾人とのネットワークを垣間見てきた。A1 たちと台湾人の友人とのつながりは、会社という 1 つの共同体から生じたつながりであった。それに対し、A4 や A15 と台湾人の友人とのつながりは、たまたま近所に住んでいて顔を合わすようになったという 1 つの偶然から生まれた。これは偶然かもしれないが、言葉を交わすことで互いについて共通項を見つけ、そこから交友関係を築いたのである。どのような関係もまず出会いがなければ始まらない。その出会いを実現させるきっかけとなるのが、挨拶などまず一言交わすことことである。フィリピン人同士ではなくとも、互いの存在を認識し小さいきっかけから言葉を交わしていくことで、ネットワークが形成されるのである。

6.1.4　台湾人以外の外国人とのつながり

表 13 は台湾人とのネットワークについての結果である。台湾人の友人や知人の有無について質問し、いると答えた回答者には、どのような関係であるかを質問した。そのほとんどが同じ会社で働く台湾人と仕事場で会った時に挨拶や軽い会話をする程度の弱いつながりであった。

表 13

	台湾人以外の外国人（人）		
	合計	A グループ	B グループ
いる	19	13	6
いない	13	7	6

A グループの台湾人以外の外国人の友人がいると答えた人 13 名の内訳を表 14 に示した。

表 14

同僚のみ	9 名
同僚と同僚以外の外国人	4 名 同僚以外の外国人について質問 →2 名：ドミトリーの近くに住んでいるタイ人 2 名：筆者

A グループのドミトリーの近くに、タイ人が住んでいる別の会社のドミトリーがある。A グループのドミトリーにはタイ人女性もおり、休日には A グループのドミトリーの出入り口付近でよくタイ人労働者が集まっている。時折、一緒にバーベキューをしていることもある。そのため、何回か顔を合わすうちに知り合いになっていった。使用言語は中国語で、食事を一緒にするということはないが、時々、ドミトリー近辺で挨拶をしたり簡単な会話をするという。

6.1.5　まとめ

台湾にいる外国人労働者もネットワークを形成している。しかし、形成されているネットワークはひとまとめにはできず、多様な人々によって構成されている。

フィリピン人同士のつながりを見ると、そのつながりは全て均一ではなく、常に一緒にいるような親密度が高い人とから成るつながりと、まれにしか会わない人とから成るつながりがあることが分かった。台湾で一緒にいる時間の長さや、同じ地域出身という親近感などから親密性は増し、強いつながりを形成している。Granovetter(1973)は、時間の長さ、感情的な結びつきの度合い、親密さ、相互が提供するサービスの 4 つの要素が絡み合って強いつながりを形成すると論じている。人と人の結びつきを強くする要因は 1 つに限らず、様々な共通項や偶然や性格など他の要因もある。今回の調査で共に過ごす時間の長さや同じ地域出身という要素があることが分かった。

A4 と A15 の場合のように、互いの家族関係のことをよく知っていたり、常に一緒に行動したりするなどその親密性の高さをみることができた。長く一緒にいることで親密性が増し、親密性が増したので一緒にいる、ということである。また、宗教やフィリピン料理といった共通の文化や趣味嗜好を通して、台湾にいるフィリピン人と比較的容易に知り合いになっている。初めは知らない者同士でも、何度か顔を合わすことで徐々に交友関係を築いた人が多くいた。異国の地である台湾で外国人労働者として生活している彼女たちにとって、同じフィリピン人は身近な存在に感じられるのではないかと思われる。

ほとんどの協力者がフィリピン人とのつながりがあったのに対し、台湾人とのつながりをもつフィリピン人は少なかった。言葉の壁や接点が少ないこと、互いに見えない存在になっていることなどが要因で台湾人とのつながりができにくいかもしれない。しかし、わずかだが、偶然の積み重ねで台湾人とのつながりを持ったフィリピン人がいた。このよう

に文化の境界を越えてつながりをもつ人々もおり、つながりを築いていける関係作りという共存がみられた。

6.2　ネットワークの役割

6.1 ではフィリピン人労働者が台湾で織り成すネットワークを分析した。本節では、そのネットワークの役割について分析する。6.1 でみてきたつながりがあって良かった点などについてインタビューやアンケートを行い、得られた回答を KJ 法によって分類した。その結果ネットワークの役割として大きく分けて「情緒的機能」「言語的サポート」「経済的援助」に分類することができた。「情緒的機能」はさらに「精神的安寧」「共感」「相互依存」に分類することができた。また、「情報源」に関する調査を行い、ネットワークから得られる情報源についても分析した。

6.2.1　情緒的機能

6.2.1.1 精神的安寧

ネットワークの役割について 1 番多く聞かれたのが、「孤独を感じない」「ホームシックを感じない」といった精神的安寧に関わることであった。家族の生活のため、兄弟の学費のため、子どもの生活費のためにといった理由で出稼ぎ労働をしている協力者たちは、家族と離れて寂しさや孤独感を感じることもある。そんな時、友人と会食したり話したりして寂しさや孤独感から回避したりすることができるのである。

A12 :「家族と離れて暮らしているけど、フィリピン人の友達は我が家にいるような気持ちにさせてくれます。だからホームシックをあまり感じません。」

A14 :「私にとって友人は家族のような存在です。だから、とても大切です。」

A19 :「家族と離れて暮らすのは、安楽なことではないです。だから、台湾では友達を家族と思っています。同じ文化、言葉、心情があるから、簡単に付き合うことができます。時々、自分の国にいるような気持ちにさせてくれます。」

B3 :「家族と離れて暮らしていても友達と話していたら台湾で 1 人じゃないって思いますし、ホームシックも感じません。」

A1 のように「家族と離れて寂しい」という発言はインタビューのときによく聞かれた。彼女たちは、自分の家族の話をよくする。また、筆者の家族についてもよく質問してきた。自分の両親や兄弟のこと、結婚している人は子どもや旦那さんのことを話してくれた。ドミトリーで唯一個人のスペースであるベッドの枕元には家族の写真が置いてある。携帯の待ち受け画面が家族の写真である協力者も多い。また、A グループ 20 名のうち、19 名が定期的にフィリピンにいる家族に電話やメールをする。家族とは携帯電話かインターネットで連絡をとっており、手紙を書くという人はいなかった。彼女たちは多少金銭的に高くて

も、積極的に故郷と関わりを保とうとしているのである。さらに、彼女たちはフィリピンへの帰国が迫ると、時計や衣服、電気製品など大量のお土産を購入する。A 協力者たちと同じ寮に住むタイ人労働者はほとんどお土産を購入していないのに対し、彼女たちは家族や親族だけでなく、近所の人のためにもお土産を購入する。家族のために海外へ働きに行き、家族に毎月仕送りをし、家族のために大量にお土産を購入する。彼女たちのほとんどが、台湾からフィリピンまでの送料が 1 箱 2500 元もするダンボールを 2 箱も送る。送料だけでもかなりの金額である。このような出費は決して安いとは言えず、かなりの金銭的負担があると思われる。こういった彼女たちの行動から、彼女たちは家族に人生の中心的な価値を置いていることが分かった。

A9：「（お土産を買う買物に同行しながら）これはお父さんに、これは隣の人に、これは近所の子どもに、これは隣の隣の人にあげます。家族や親戚にはもう買いました。でも、また何か見つけたら買います。（お金がかかるのではないかと聞いてみたところ、）みんなお土産を楽しみにしているし、私も家族のためにお土産を買うのは好きですから大丈夫です。」

A15：「フィリピン人はカラオケが大好きです。寮の近くに、フィリピン関係の雑貨屋さんがあり、その 2 階にカラオケがあって、1 時間 100 元で借りられます。ここで、料理を作ったりピザを頼んだりして、みんなで過ごすのはとても楽しいし、嫌なことも忘れられます。そのときは台湾にいることも忘れています。」

大切な家族と離れ慣れない土地に身を置く彼女たちにとって、郷愁や孤独感が沸き起こるのは不思議ではない。単身で台湾にやってきている彼女たちにとって、友人との語らいや一緒に過ごす時間はとても重要である。寂しいと思ったときにそばにいてくれ、笑い話や冗談を話すことで寂しさやホームシックを忘れることができる。家族と離れて暮らす彼女たちにとって、友人とは家族のような存在である。そのような友人との団欒の時間を持つことは、精神的にもリラックスできる。カラオケやバーベキューをして仲間と楽しく過ごすことで、家族と離れて感じる郷愁の念やホームシックなどを忘れ、家族のためにまたがんばろうという気持ちを奮い立たせているのである。

6.2.1.2　共感

次に多く聞かれたネットワークの役割は、「お互いに理解しあえる」といった共感であった。台湾で外国人労働者として生活している協力者たちは、家族と離れて「外国人労働者」として生活している者にしか分からない、辛さや寂しさなど精神的なストレスを感じている。また、2 章 3 章で概観したように、台湾で生活する外国人労働者は不安定で弱い立場に置かれている。台湾にいるフィリピン人の友人とは外国人労働者として同じ状況であるために、楽しさや寂しさといった感情を共有することができる。また、フィリピン人の友人とは自分たちの言葉でコミュニケーションをとることができ、さらに共通する部分が多い

ため、自分の状況を理解してもらえ、辛さなどを分かち合うことができる。

A1：「家族や親戚と離れているから寂しいとき、友達がすごく大切だと感じます。native language(母語＝タガログ語)で話せるし、お互い理解しあえると思います。」
A18：「家族と離れて暮らしているから、友達は本当に大切です。同じ言葉で話すことができライフスタイルや感情も共有できるので、一緒にいてまったく退屈しないです。」
B8:「自分の状況を分かってもらえます。」

「文化的背景が異なる人とのコミュニケーションにおいては、これ(=共感)[30]は決して容易なことではない」(古田ら 1990:64)。台湾にいるフィリピン人労働者にとって、フィリピン人の友人とは円滑なコミュニケーションにおける相互理解を通して、互いに分かり合えることが多い。自分の状況を分かってもらえることで癒しを感じることもできる。同じような状況にあるため、ある人の考えていること、感じていることなどが自分自身の中に容易に移し変えることができるのである。そして、お互いにアドバイスができたり、相談しあったりできるのである。このコミュニケーションにおける共感は、他のネットワークの機能にもつながる。

6.2.1.3　相互依存

住み慣れた土地を離れて慣れない海外で生活し、労働することで様々な問題や悩みを抱えることがある。互いに共感することができ、家族のような存在である友人にはプライベートな悩みや問題を相談することができ頼ることができる。自分の言葉で話すことができるフィリピン人の友人には、自分の悩みや問題など本音で話すことができるのである。

A4：「友人とは問題や悩みなど個人的な話をすることができます。」
A6:「フィリピン人の友人はとてもおもしろい人ばかりです。また、困ったときはいつでも助けてくれます。」
A10：「家族と離れて生活するのはとても寂しいです。でも、フィリピン人の友達とは、コミュニケーションも簡単だし、家族のように思える存在です。困ったときにいつでも助けてくれます。」
A17：「家族や親戚から離れて生活しているときは特に大切です。いろいろなこと話したり、共有したり、精神的な重荷があったときに頼れます。」
B2：「友人がいなかったら、困ったことが起きても誰にも相談できません。」

協力者が抱えている悩みや問題は様々である。台湾に来たために起こった問題や、移住労働そのものに関連した悩みなどがある。インタビューを通して、協力者たちは以下のような悩みや問題があることが分かった。

---

[30] 括弧内は筆者による。

A4：「大きな問題は特にないですけど、時々台湾人からの差別を感じます。また言葉が分からないから、もっとゆっくり話してほしいですが、いつも早口で何を言っているのか分かりません。それに大声で怒っているようにも聞こえる話し方が好きではありません。」

A5：「労働自体は問題ないしいいんですけど、思っていたほど給料が高くなかったです。」

A15「時々、台湾人から嫌な感じで見られることがあります。少し中国語が分かるから、自分たちのことを話していることが分かります。同じ会社の台湾人でも私たちのことあまりよく思ってない人はたくさんいます。とくに女性に多いです。まったく口をきいてくれない人もいます。」

B7：「私たち移住労働者に対して、ときどき雇用主が労働条件を守らないことがあります。」

C11：「私の雇用主はいい人だったからよかったけど、友達(=家政婦として働いているフィリピン人労働者)は雇用主から見下されていると話していました。」

フィリピンでは仕事を見つけられなかったり、十分な給料をもらうことができなかったりしたため、インタビューの中で、「台湾に来てよかった」という声が多く聞かれた。確かに仕事や給料といったフィリピンに比べて良い面もあるかもしれない。しかしその一方で彼女たちは管理の対象とされ、労働力としか捉えられていなかったり、長時間労働や契約に基づかない解雇など、人権を無視した扱いをされている。また彼女たちは、自分たちが台湾人に受入れられていないことを感じており、A4 のように差別を感じ、それが精神的ストレスになっている人もいる。

家政婦として働いている人の中には C11 の友人のように、「使用人」という立場からしばしば見下され、自尊心を傷つけられている外国人労働者もいる。また、プライベートスペースがベッドだけのようにプライベートが十分に保証されていないためにストレスも抱えやすい。人に話して解決できる問題もあれば、そうではない問題もある。しかし、人に相談することで気持ちが晴れたり、良いアドバイスを貰って解決の糸口を掴むことができたりすることもある。また、MECO や台湾及びフィリピンにある移住労働者のための NGO・NPO 組織を紹介してもらい、労働条件や賃金未払いといった問題の解決につながることもある。そのため、様々な話ができる友人がいるということは精神的にも重要なことである。

6.2.2　言語的サポート

台湾で働き始めた外国人労働者にとって、新しい環境や職場、ドミトリーでの共同生活にできるだけ早く慣れるための援助も重要である。中国語ができない彼女たちにとって、自分の言葉で相談や質問することで、新しい環境にもいち早く慣れることができる。また、仕事の手順だけでなく職場やドミトリーの規則やしきたりを教わることもできる。

A12：「フィリピン人の友人がいることで、新しい環境にもすぐに適応することができました。」

A17：「フィリピン人の友人とは仕事の話をすることができるので、職場でも仕事がスムーズに

行えます。また、お互い理解するのが簡単です。」

A20：「全然中国語が分からないので、いつも助けてもらっています。お互い理解できるので、仕事でのチームワークも簡単です。」

来台したばかりのフィリピン人移住労働者は、生活から仕事から覚えなければならないことが多い。中国語ができない彼女たちにとってすぐに質問できたり相談できる人が身近にいることは、できるだけ早く新しい環境に慣れる手助けとなるのである。

6.2.3　経済的サポート

インタビューの発話の中で、多くはなかったが「経済的」という言葉も聞かれた。協力者たちはフィリピンにいる家族に仕送りをしており、日常的に台湾ではあまりお金を使うことがない。また、協力者たちは契約満了まで一度もフィリピンに帰国しないので、すぐにお金が必要になるということはほとんどないようである。

A8：「海外では家族と離れて暮らすから特にフィリピン人の友達は大切です。経済的にも気持ち的にもいつもサポートしてもらえます。経済的っていうのは、本当に時々、お金を貸してもらっています。でも、すぐに返しますよ。」

ところで、4.1 で概観したように、移民ネットワークに関する多くの研究で、親族や友人で構成された移民ネットワークは移動に伴うコストとリスクを低下させる働きがあると論じていることが分かった。これは先に移住している親族や友人に住居が見つかるまで家に泊めてさせてもらったり、移住前にすでに仕事を見つけてもらったりするからである。しかし、台湾では、先に台湾に移住している親族に仕事を見つけてもらった場合でも、手続き等で仲介業者が必要であるため業者を通さなければならず、移民ネットワークはリスクの軽減にはつながっているが、コスト低下にはつながっていない。

C12：「私の弟が台湾で働きたいと連絡してきたので、私のボスに頼んだところ、OK をもらえました。でも、私が台湾に来たのと同じように仲介業者を通さなければならず、私のときと同じ額の斡旋料も払わなければいけませんでした。いとこも私の紹介で来たのですが、弟と同じで斡旋料を支払ってきました。」

仲介というシステムが確立した現在、親族や友人といった伝がない人でも、海外労働が可能になったといえる。しかし、仲介業者を利用するためには、斡旋料を支払わなければならない。受入国や業種によって異なるが、移住労働の「斡旋料は極めて高額である」(Stalker 2000:103)。親族から成る移民ネットワークがある場合、斡旋料は抑えられるが、海外労働はネットワークがある人に限られている。仲介というシステムによって、親族ネットワー

クがなくても移住労働できるようになったが、それを利用できるのは高額な斡旋料を支払える人に限られている。親族ネットワークを介して仕事が見つけられたとしても、台湾のように仲介業者を利用しなければならない受入国もあり、移民ネットワークは常に移住に伴う費用削減に働いているというわけではない。仲介システムが確率したと同時に移民ネットワークの役割も変化していっているといえる。

6.2.4　情報的役割

6.2.4.1　台湾についての情報

予備調査で、台湾についてどのような情報を得ているのかを尋ねてみたところ、協力者たちから十分な回答を得ることができなかった。そのため、休日によく訪れる場所について質問をし、それからその場所は誰から聞いたかを質問した。B グループの中で 3 名は休日がなかった。表 15 は、協力者たちが休日に訪れる場所についてまとめたものである。

表 15：休日に行く場所（複数回答）

	計	A グループ	B グループ
教会	28	19	9
ディスコ	3	3	0
公園	3	3	0
フィリピンレストラン	7	6	1
インターネットカフェ	8	7	1
ショッピングモール	11	9	2
カラオケ	3	3	0
同僚以外の友人の部屋	5	4	1
パブ	1	1	0
休日がない	3	0	3

表 15 から、休日に教会へ行くという人が 32 名のうち 28 名でほとんどの協力者が教会へ行っていることが分かった。その他、ショッピングモール、インターネットカフェが多かった。続いて、これら休日にいく場所に関する情報源について質問した結果、表 16 の通りとなった。

表 16：情報源について（複数回答）

	計	A グループ	B グループ
フィリピン人の友人から	27	19	8
台湾人の友人から	3	2	1
偶然見つけた	1	1	0
未回答	1	0	1

休日に訪れる場所に関する情報源は「フィリピン人の友人から」が 27 名と、ほとんどの協力者がフィリピン人から情報を得ていることが分かった。

A2：「フィリピン人がよく行く教会やレストラン、ディスコはフィリピン人のほうが詳しいですし、フィリピン人の友人としか行きません。美容院もほとんどみんな同じところに行っています。それも友人に教えてもらいました。」

A2 のように、ほとんどの協力者は先に台湾へ来ていたフィリピン人やフィリピン人の友人伝に休日に訪れる場所に関する情報を得ていた。そのため、情報はフィリピン人が集まる教会やフィリピンレストランなど、フィリピン人が比較的多く集まる場所に集中している。しかし、台湾人の友人からも情報を得ている協力者も少数だがいた。

・A1 の場合

A1 はカトリックではなく、プロテスタントである[31]。フィリピンの 80%以上がカトリックであるため、A1 の周りには特にフィリピン人が多く集まるプロテスタント教会を知っている友人がいなかった。A1 は中国語が比較的流暢であることもあり、台湾人の友人から教会の情報を得ることができた。

A1：「私はクリスチャンでカソリック教徒ではありません。友人はカソリック教徒ばかりで、クリスチャンの教会を知りませんでした。ですから台湾人の友人（同僚）に連れて行ってもらいました。」

・A5 の場合

A グループのドミトリーにはインターネットが常時接続のパソコンが 12 台置いてある。しかし A グループのドミトリーにはフィリピン人とタイ人合わせて約 200 名の労働者がいるため、休日はなかなかパソコンを使うことができないうえ、長時間使用することもできない。そこで A5 は台湾人の同僚からドミトリーの近くにあるインターネットカフェを教え

[31] プロテスタントはカトリック教会から分離したキリスト教宗派であり、日本では新教とも呼ばれている。

てもらった。

彼女たちが訪れる場所についての情報源のほとんどがフィリピン人であることが分かった。しかし、少数ではあるが、台湾人から得ている情報というのもあった。情報に関しては、関係が親密な人に限らず、その情報について知っている人から得ているのである。

フィリピン人たちはドミトリー近くのカソリック教会には行かず、わざわざバスに乗って 40 分離れたフィリピン人が集まる教会へ行く。また、彼女たちは積極的にフィリピン人が多く集まる場所に行く。このことは、6.2.1.1 の精神的安寧につながると考えられる。台湾にあるフィリピンに関連する教会やレストランなどに行き、祈りをささげたり仲間と会食することで、台湾にいることを忘れたり、精神的ストレスを解消したりしているのである。また、コミュニケーションの問題から情報源も限られている。そのため、フィリピン人同士のネットワークは、情報源においても重要な役割を果たしているのである。

6.6.4.2　フィリピンについての情報源

A グループにフィリピンについての情報源を質問したところ、以下の結果となった。

表 17：フィリピンについての情報源（複数回答）

	計
フィリピンにいる家族や友人	19
台湾にいるフィリピン人友人	5
テレビ	15
インターネット	11
雑誌・新聞	9
携帯電話	1

フィリピンについての情報源として、フィリピンにいる家族や友人が 19 名であったのに対し、台湾にいるフィリピン人の友人はたった 5 名であった。これは、台湾にいながら得られるフィリピンの情報が限られており、テレビやインターネット、雑誌などの媒体から得られる情報が多いためだと思われる。

A グループのドミトリーではフィリピンのテレビが見られるため、20 名中 15 名がテレビと答えている。また、インターネットも使用できるので、インターネットの回答率も高かった。

A15：「フィリピンのことはフィリピンにいる家族や友達からよく聞きます。それかテレビかインターネットです。ここではフィリピンのテレビチャンネルが 5 つくらい見られるから全然困りません。フィリピンにいる家族や友達とは電話やチャットでほぼ毎日話しますから

フィリピンのことはよく知っています。」

C7：「お母さんはメールをしませんから、いつも電話をしています。その日の出来事とか話します。1 日 1 回必ず電話をします。妹たちとは携帯でメール交換をよくしています。妹たちはまだ学生だから、その日の学校での出来事とか勉強のことなどを話します。」

C12：「ショッピングモールは人が多くてあまり好きではありませんが、フィリピンにいる家族に電話をするときに使うテレフォンカードを買うためだけに行きます。」

フィリピンに関する情報は、台湾でのネットワークからよりもフィリピンにいる家族ネットワークから得ている。6.2.1 でも論じたが、彼女たちは家族に対して非常に強い思いを抱いている。そのため、定期的に連絡を取り合い互いの近況を報告しあいながら、故郷とのかかわりを保っているのである。

6.2.4.3　仕事に関する情報

インタビューを通して、仕事に関する情報も得ていることが分かった。新しい仕事のことや、2008 年 9 月以降の世界的な金融危機が起こってからは、台湾の外国人労働者の処遇についてのうわさや情報が回っていた。

A10：「フィリピン人の友達には何か問題があったときになんでも相談できます。また、仕事の情報もくれます。仕事の情報というのは、カナダへの申請を助けてくれるフィリピン人を紹介してもらいました。」

C7：「（世界的な金融危機を受けて）来年（2009 年）の 3 月に台湾にいるフィリピン人は全員解雇になるって同僚が話しているのを聞きました。まだ契約が 1 年以上も残っているからとても不安です。友達は教会の友達から聞いたみたいです。」

・キーパーソン R 氏について

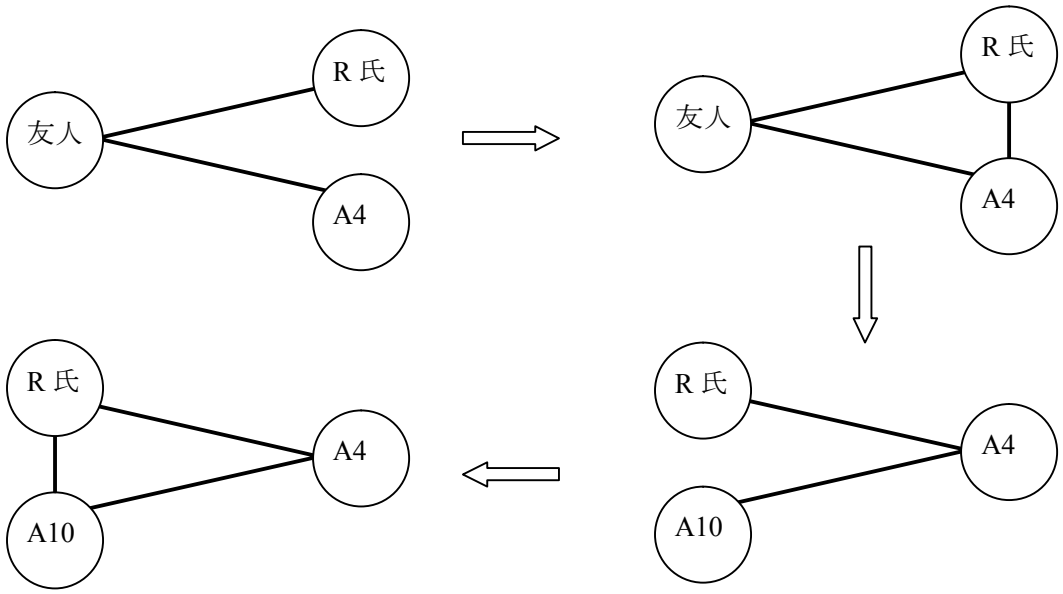
A13 の「カナダへの申請を助けてくれるフィリピン人」とは、就業服務法第 46 条第 8 項から 10 項に該当する外国人労働者ではなく、専門職として台湾で働いているフィリピン人 R 氏のことである。R 氏はアメリカの大学を卒業し、そのままアメリカのエレクトロニクス系企業に就職した。その後、台湾に赴任し、今はエンジニアとして働いている。R 氏はカナダに兄弟や知り合いがおり、彼らと連携して台湾にいるフィリピン人をカナダに送り出している。R 氏はボランティアで行っているため、斡旋料は一切受け取っていない。休日に連絡を受けたフィリピン人にインタビューをし、希望の職と需要とがマッチした場合に、ビザ所得に必要な書類作成などの手助けを行う。2008 年の 2 月から初めて 2008 年末までに約 60 人のフィリピン人をカナダに送出したという。A13 さんは、R 氏と教会で出会った友人を通じて知り合いになり、カナダへの職を探してもらったのである。

R 氏：「同じフィリピン人なのに、彼らにない物を私は持っています。彼らが知らないことを私は知っています。だからシェアーしたいのです。みなさんはカナダへの申請の手続きは難しいものと思っていますが、実は申請の手続きはとても簡単なことです。台湾の境遇は知っています。カナダは給料も高いし、台湾よりも条件はいいです。だから、私はこのようなことをしているのです。」

実際に、台湾からカナダへの申請をする場合、申請だけで 500 元かかる[32]。しかし、申請をしたからといって、必ず職が得られるわけではない。また、フィリピンから台湾に来るのに必要な斡旋料は 53,741 ペソ[33]に対し、フィリピンからカナダへ行くのに必要な斡旋料は 92,650[34]ペソ払わなければならない。そのため、斡旋料を用意することができず、行きたくても行けない人が多くいる。R 氏のような人に出会えるかどうかで、その後の人生が変わることもあるということだ。

また、この情報獲得は「弱い紐帯の強さ(the strength of weak ties)」(Granovetter;1973)を確認することができた。Granovetter(1973)は、たまにしか会わない人から成る弱い結びつきは、強いネットワーク同士をつなげる橋渡し的な働きがあり、情報が広く伝播するうえで非常に重要な役割を果たすと論じている(Granovetter;1973)。A10 が R 氏と知り合いになったのは、A4 と R 氏が知り合いであったためである。A4 は教会で知り合いになったフィリピン人の友人を介して R 氏を紹介してもらった(図 9 参照)。

図 9：友人･R 氏･A4･A10 の関係図



[32] 2009 年 1 月に行なった筆者によるフィリピン人移住労働者への聞き取り調査から。
[33] 平野(小原)(2002)より。
[34] Business Miror (http://businessmirror.com.ph/home/top-news/8755-fertile-ground-for-jobs-scams.html)より。

以前 A4 の夫も台湾で働いていた。ところが、夫の会社の業績が落ち込み、残業や休日出勤がなくなり給料が減っていった。そこで夫は台湾以外で働くことを希望していた。A4 はその話を教会で時々会う友人にしたところ、その友人から「カナダへの申請を手助けしているフィリピン人がいる」と教えてもらい、R 氏にコンタクトを取るようになった。

A4 と R 氏を結びつけた友人と A4 はミサに訪れた教会でときどき会う比較的弱いつながりであった。A4 と友人との弱いつながりがブリッジ的に働き、A4 と R 氏とのネットワークを作り出した。そして A4 と一緒に R 氏のインタビューを受けた A10 はカナダへの就労が決まった。台湾の移住労働者の間でも、たまにしか会わない人とのネットワークが重要な役割を果たしていることが明らかになった。

6.2.4.4　生活に密着した情報

協力者たちは友人から生活に密着した情報も得ていることが分かった。例えば、ドミトリー近くのスーパーよりも駅近くのスーパーのほうがインスタントラーメンは安い、といった日常生活に関する情報や送金場所についてである。また、彼女たちは帰国の途に着くとき、フィリピンにいる家族や親族、近所の人などにお土産を大量に購入する。その場合も、日用品ならこの店、パソコンや電気用品ならこの店、衣料品ならこの辺り、玩具ならこの店が安い、というような店の情報やそれらの荷物を送る配送会社についての情報が回っている。

A15：「インスタントラーメンはあそこが安いとか、買物行ったときに、これはあの店より安いとか教えてもらいます。例えば、いつも食べているインスタントラーメンは A スーパーより C スーパーのほうが 2 元安いですとか。Taichung Central にダイソーがあって、そこに圧縮袋があるのも友達から聞きましたよ。」

ダイソーにある圧縮袋とは、日本では馴染みのある、袋に布団や衣類を入れ、掃除機で空気を吸い込んで小さくする袋のことである。協力者たちがフィリピンに戻るときに、大量の荷物やお土産を箱に詰めて送る。このときにこの圧縮袋が活躍する。ある協力者は自分と友人のためにと 1 人 6 袋も購入していることもあった。このように、彼女たちにとって日常生活に密着していることは、フィリピン人の友人から聞いていることが多い。これらの情報も、親密度が高い友人やたまにしか会わないちょっとした知人など問わず、様々なフィリピン人から得ている。また、情報を共有することで、一緒に行動を共にする、あるいは買物をお願いするなどして信頼関係も築いているのである。

6.3　ネットワークの問題点

6.2 でフィリピン人同士が形成するネットワークの役割を論じてきた。どの役割もフィリピン人移住労働者にとってプラスに働く役割である。しかし、インタビューを何度か行っ

ているうちにネットワークは場合によってはマイナス面を生じることがあると分かった。

A15：「フィリピン人の同僚がたくさんいるのは、いいときが多いけど、ときどき大変なときもあります。それは、個々の性格がばらばらで大変であったり、出身地域によってグループができたりすることです。出身地域によって言葉が違っていて、タガログ語はみんな分かるけど、セブアノ語とか他の言葉は分かりません。分からない言葉で悪口言っているように聞こえるし、大きな声で話していると怒っているように聞こえたりします。」

C7：「普段は寮ではタガログ語を話すけど、一番仲のいい友達とは時々ビサヤ語で話しました。あまり話を聞かれたくないときに使うこともありました。一番仲のいい友達は同じ地域（ミンダナオ北部）の出身です。同じ時期から働きはじめました。寮では、同じ時期に台湾に来た人同士でグループになっていることが多いです。仲のよい友達と以外はあまり話しませんでした。その友達がフィリピンに帰った今は、休みのときはほとんどベッドの中にいます。音楽を聴いたり本を読んだりしています。人に会いたいとも外に出たいとも思いません。」

フィリピンは多言語国家であり、100 以上の言語が存在している(大野、寺田編;2001)。A グループのドミトリーにいるフィリピン人労働者たちは、普段はタガログ語でコミュニケーションを取り合っている。しかし、時々タガログ語以外の言葉で話す人たちがおり、その言葉が分からないため自分の悪口を言われたと誤解を招いて喧嘩になったりすることもあるという。また、C7 のように会話の内容によって使用する言葉を変えている場合もある。6.1.1 で、出身地域はつながりを強くする要素であると論じた。同じ出身地域ということで親近感を感じ、共に過ごす時間が増え親密度が増してきた。しかし反対に、出身地域の言葉が分からない人にとっては、共通言語があるにも関わらず他の言葉を話すのは自分のことを言っているのではないかと誤解を招いたりする。ある言葉の使用方法によっては、親密度が増したり、場合によっては小さな争いを引き起こしたりする可能性がある。強いつながりの要素が、場合によっては一転して個人間あるいはある集団間の対立を引き起こす可能性があることが分かった。

インタビューやフィールドワークを通して、他のマイナス面も見られた。C7 は 6.1.1 で論じたように、友人 A と非常に強いつながりをもっていた。C7 の発言にもあるように、友人 A 以外の同僚の付き合いはほとんどなかった。友人 A がフィリピンに帰国した後、C7 はドミトリーでも 1 人でいることが多く、外出もほとんどしなくなった。C7 と友人 A の強いつながりからなるネットワークは閉鎖的なものになっていたのである。親密度が高い人とのつながりは 6.1.2 で論じたような精神的安寧や相互依存といった役割をもたらす。しかし「強いつながりは、局部的に結束力を生み出すものの、全体的な断片化を引き起こす」(Granovetter 1973:1378)。つまり、強いつながりは場合によっては、結束が強まり外の世界との軋轢を生み出したり、閉鎖的な関係を作り出しどちらか一方が台湾を離れたときに、残された方の孤立を引き起こす可能性がある。これは反対に、弱いつながりばかりであると、

孤立はしないが本音を話せず精神的ストレスが溜まりやすいといえる。

また、同じ時期に来台、同じ地域出身、同じ外国人労働者といった同じような属性を持った人たちとの仲間集団が形成されやすく、異なった属性を持った人を初めからネットワークに組み込まないということも推測された。異国の地である台湾ではマイノリティーであるため、同じ国出身というだけで親近感を抱くことができても、台湾人というだけで最初から壁をつくっているのではないかと思われる。

A16：「台湾には同じ信仰心を持ついい友達（=フィリピン人）がたくさんいます。同じ信仰心を持つ友達信用できます。」

A20：「台湾人（=同じ会社で働く台湾人）とコミュニケーションをとることはすごく難しいです。なぜなら、台湾人は機嫌がいいのか悪いのか分かりません。台湾人は仕事に関する規律を守るからいいと思うけど、彼らの性格は理解できません。なぜ怒っているのか理解できないことが多いです。」

2.5 で論じたように、外国人労働者に対する台湾人の意識は否定的であり、外国人労働者の受入れを歓迎しているというわけではない。そのような意識はフィリピン人も抱いていると思われる。台湾の交友関係について質問したところ、A16 は前述のように答えた。この発言から、台湾人はフィリピン人とは違う信仰心であまり信用できないと思っていると推測される。また、台湾人に対する思いを述べた A20 の発言から、ディスコミュニケートによりその言動が理解できないだけでなく、言語的な判断材料の欠如から壁を作っている場合もあると考えられる。会社にいるある 1 人の台湾人の姿が、A20 にとって台湾人全般の姿に移し変えられていると思われる。そのような意識が、異なった属性を持った人とのネットワーク形成を阻んでいるのではないだろうか。金子(1986)は、異なった属性をもった人とのつながりは、「自分が変わることのインセンティブを与え、自分を発見する契機を提供する」(金子 1986:194)という。同国人との強いつながりのみのネットワークでは、他者に対する否定的なイメージは払拭されず、互いに壁を作ってしまう可能性がある。また、自分自身や自文化の新たな発見も逃してしまう恐れもある。

6.2 でも論じたが、台湾にまったく人とのつながりをもたない介護労働に従事しているフィリピン人労働者が 2 名いた。多くの協力者たちのネットワークは同じ会社の友人か休日に行く教会での出会いから成ったつながりから形成されていた。このことは、同僚などがおらず休日がない場合は、つながりが形成されにくいといえる。

今回、台湾での人間関係や交友関係で困ったことや大変だった点について質問したが、なかなか回答を得ることができなかった。ほとんどの協力者が口々に困ったことや大変だったことはないと答えた。しかし、時期や質問の形を変えながらそれとなく何度か聞いているうちに、前述のような話を聞くことができた。彼女たちにとって、台湾で築いているネットワークは決して広くなく、また容易に新たに作り直すことができるものでもない。

交友関係で困ったことを話すことは、聞く人によっては誰かの悪口につながる可能性もある。関係が限定されているため、話が噂となり、真意が歪曲されて他人に伝わりやすいという危険性も考えられる。協力者たちは人と人のつながりが大切であると実感しているために、言いにくいという思いがそこにあったことも、その話し方から推測された。

6.4　ネットワークの中心的な役割をもつ教会

6.2.6.1 の結果から、ほとんどの協力者が教会へ行っていることが分かった。台中市には台中駅から歩いて 10 分弱のところに、毎週日曜日にフィリピン人神父によるミサが行われるカトリック系教会がある。1 日 2 回ミサが行われ、毎週 400 人前後のフィリピン人が集まる。また、この教会では、移民の日(National migrants’Sunday)やクリスマスにはパーティが開催される。これらイベントは日曜日の午前のミサの後に開かれ、誰でも参加できる。この教会の周りにはフィリピン料理屋や雑貨店など、教会に来るフィリピン人を対象とするビジネスもある。

筆者はこの教会に何度も足を運び参与観察を行った。当初はフィリピン人ばかりで筆者の存在は異質に思えた。しかし、この感覚は台湾で暮らすフィリピン人にも通じるところがあるのではないだろうか。普段は外国人労働者として台湾社会ではマイノリティーであるが、この教会という場所では彼らは決してマイノリティーではない。暑い夏の日でも台風の日でさえも、多くのフィリピン人が教会に集まる。真剣な眼差しで祈りをささげる人もいれば、久しぶりに会ったような友人と抱き合って喜んでいる人や恋人同士で来ている人もいる。参与観察やインタビューを通じて、フィリピン人にとって教会という場所は、ミサに参加し祈りをささげる宗教的な機能があると同時に、人と人をつなぐ役割も担っていることが分かった。新たな出会いの場であったり、日ごろ会えない友人との待ち合わせの場所であったりする。筆者が多くのフィリピン人労働者に会えたのも教会である。

C5:「台湾に 2 年勤めましたけど、1 日も休みがありませんでした。また、毎日睡眠時間が 4 時間しかなく、すごくハードでした。でも、5 日後にカナダに行って、家政婦をすることが決まっています。ですから、今日は台湾で最初で最後の教会の訪問日です。今から友達とご飯を食べに行きますから、ここ（教会）で待っています。」

C10:「1 ヶ月に 1 日、日曜日に休みがあります。他のケアワーカーはほとんど休みがないけど、（台湾の）仲介業者が雇用主に言ってくれたから休みが取れました。休みがたくさんあると給料が減るだけですから、1 ヶ月に 1 日で十分です。休みのときは必ず午前中に教会に行って、それから友達にあって買物したりあちこち行ったりします。友達は教会であった友達で、ほとんどが製造業の人です。」

C5 と C10 はともに介護労働者として台湾で働いているが、仲介業者は違う。C5 は台湾に来て、1 日も休みがなかったため、今まで教会に行くことができなかった。この日に会う友人とは電話や携帯のメールで連絡を取り合っていた。この日最初で最後の日曜日の休日

に友人と会うために、教会で待ち合わせをしていた。同じケアワーカーでも C10 は、月 1 回日曜日の休みがある。休みのときはほぼ必ず教会に行き友人と会い、食事をしたり買物をしたりする。この友人とは教会で出会ったフィリピン人である。C5 にとっては、教会が自分と友人との待ち合わせの場であり、C10 にとっては、教会が人との出会いの場である。教会にアクセスできるかどうかは、その人のネットワークの形成に影響するものと思われる。

A15：「（一緒に買物をしているときに、偶然お店で会ったフィリピン人と親しそうに話しているのを見て、今のは同僚ですか、と聞いたところ）同僚じゃないですよ。今日、教会で初めて会ったフィリピン人です。台湾にいると目があった見知らぬフィリピン人に挨拶をしたり笑いかけたりします。それがきっかけで話すようになって友達になります。でも、フィリピンにいるときはそんなこと全くしませんでした。どうして台湾でそういうことをするのか分からないですけど、そうしますね。」

フィリピンにいた場合、同じフィリピン人ということで親近感など感じることは多くない。しかし、A15 のように、台湾という異国の地で出会ったフィリピン人に親近感や連帯感を感じることは少なくない。親近感を感じ、軽い挨拶から少しずつ会話をするようになり、新しいネットワークが形成される。同じフィリピン人で同じ宗派の人と容易に出会える教会はフィリピン人にとって、複数のフィリピン人が繋がるネットワークの拠点としての機能を果たしているのである。

また、多くの人が集まるということはそれだけ多くの情報も集まってくる。教会には MECO のスタッフや教会の運営に携わっているボランティアグループなどが毎週必ず来ている。MECO は台湾にあるフィリピンの外交業務を行っている事務所である。ここでは、通常の外交業務だけでなく、カウンセリングや海外労働の相談センターも兼ねている。ミサが終わったあとで、MECO のスタッフと個人的に相談をしている人を何人も見かけた。何か問題が起きたときに、相談できる組織のスタッフが教会にいるというにも、フィリピン人労働者にとって重要であると思われる。また、教会では MECO のスタッフや教会のボランティアスタッフによるタガログ語のアナウンスがされる。直接、MECO やボランティアグループとのかかわりがなくても、教会へ行くことで間接的ではあるが、このような組織のネットワークと繋がることができる。さらに、教会では「The Migrants」や「Philippine times」といったフリーペーパーがそれぞれ月 1 回配布される。このフリーペーパーにはフィリピンや台湾に関する情報や他の国での仕事の斡旋、お店の情報などが載せられており、ミサに参加したフィリピン人たちはこぞって持って帰る。このようなフリーペーパーが配られるというのも、教会が 1 つの機能を果たしているからである。

教会の周りには、教会に訪れるフィリピン人を対象としたビジネスがある。フィリピンレストランやフィリピン雑貨を取り扱っているお店もあれば、フリーマーケットをしている人もいる。また、フィリピン人が集まるディスコの案内をしている人もいる。そのよう

なレストランやお店もネットワークの拠点となったり、情報交換の場になったりする。レストランに来ていた人に話しかけると、片道 2 時間かけて高速バスに乗ってきているというフィリピン人もいた。彼らの住んでいる地域には教会やフィリピンレストランもないため、月に 1、2 回やって来て、友人にあって会食したりお酒を飲みながらカラオケをしたりしているという。教会へ行くということで、精神的にリラックス出来たり、人に会ったり、情報を得たり、間接的に組織と繋がったりといったことを同時に行うことができるのである。

6.5　ある協力者のネットワーク

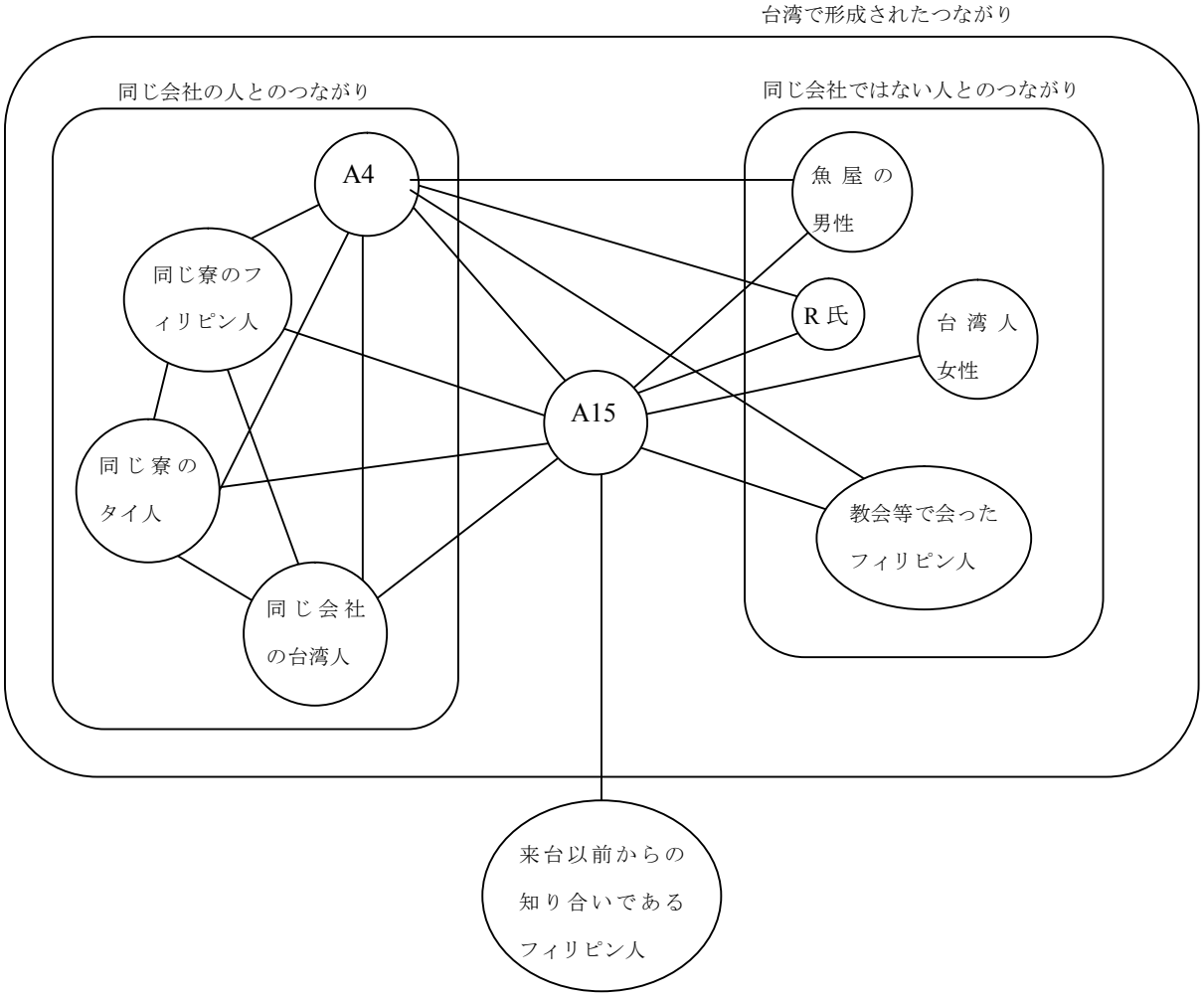
本節では、ここまで論じてきた個人間のネットワークの形成やその役割を A15 のネットワークの全体像を通して概観する。

A15 は、仲介業者を通じて台湾にやってきており、台湾に来る前には台湾に知り合いがいなかった。A15 は同じ時期に来た A4 と仕事時間が同じでよく話すようになり、親密な関係になっていった。また、同じ寮に住んでいる A4 以外にもよく話したり食事をする他のフィリピン人や交流が少なく挨拶を交わす程度のフィリピン人とのつながりができてきた。仕事を通じて、会えば簡単な挨拶を交わす程度で同じ寮に住むタイ人労働者と同じ会社で働く台湾人の知り合いができた。これらのつながりは同じ会社（あるいは寮）でのつながりである。それから前に住んでいた寮の近くに住んでいる台湾人女性と知り合い交流を深めた。

しばらくして A15 は引越し、新しい寮に住み始めた。新しい寮の近くに他の会社の寮があり、そこに住んでいるフィリピン人と知り合いになった。また、寮の近くにある市場で働く台湾人男性と A4 を介して知り合いになった。休みの日には A15 は教会へ行き、そこで会ったフィリピン人労働者とも知り合いになった。A4 を介して R 氏とも仲良くなった。さらに、A15 さんにはフィリピンにいたときからの知り合いが台湾にやって来ており、時々教会で会ったりするフィリピン人がいる。図 10 は A15 さんの台湾でのネットワークを示したものである。

A15 は台湾において図 10 のような人々との結びつきがある。A15 は、このつながりから 6.2 で論じたネットワークの役割を得ている。A15 は A4 を初めとする仲の良いフィリピン人とバーベキューやパーティをしたりすることで寂しさやホームシックを回避したり、何か悩みがあったら相談し合ったりする。教会であったフィリピン人や来台前からの知り合いであったフィリピン人と時々会って近況報告したりする。必要な情報についてはこういったフィリピン人に聞いたりする。また、台湾人女性と定期的に連絡したり会ったりして交流を続け、A15 が抱いていた台湾人に対するマイナスイメージを少しずつ払拭している。A4 を介して R 氏と知り合った A15 は R 氏に頼んでカナダへの仕事を申請したが、残念ながら仕事を得ることはできなかった。

図 10：A15 さんの台湾でのネットワーク



注:丸の大きさは人数の多さを表すものではない。

A15 はこのようなネットワークを形成しながら、台湾という異国の地で生活している。外国人労働者として台湾では搾取されやすく常に弱い立場に置かれながら、自分の生活世界を支えてくれる人とのネットワークを築いている。ネットワークを通して、ホームシックや寂しさを回避したり情報を得たりして、様々な困難を克服している。A15 は台湾に来る前には、フィリピンで家族や近所に住む親族や友人にはよく会っていたが、学生時代の友人に会うことはほとんどなかった。大学時代の友人はほとんどばらばらになり、海外で働きに行っている人も多いからである。したがって、A15 はフィリピンにいる友人に会いたいと思っていないが、家族への思いは非常に強い。A15 にとって、台湾では友人は家族に会えない寂しさを埋める存在であるといえよう。

A15 はこのようなネットワークを通して、労働という側面だけではなく、人と人のつながりから台湾社会に結びついている。外国人労働者は労働を通して台湾の労働市場に組み込まれているだけでなく、非経済活動の中での人とのつながりを通して台湾社会につながっている。このことは言い換えれば、A15 は台湾社会を構成している一員ともいえるのではないだろうか。労働や消費行動を通してだけではなく、人とのつながりを通しても外国人労働者は台湾社会の一員であるといえる。しかし、同じ社会の構成員でありながら、台湾人と外国人労働者の社会的立場は大きく違うし、基本的人権が等しく保障されているとは考えにくい。不平等で不公正な社会が常態化してしまっているように思われる。これは、台湾では外国人労働者は異質な存在あるいは不可視の存在として捉えており、社会を構成している一員とは捉えられていないからではないだろうか。そのため、台湾では外国人労働者は単なる労働力、という意識から脱却できないのではないかと考えられる。

6.6　フィリピン人労働者とその家族について

本節では、インタビューを通して筆者が感じたフィリピン人労働者とその家族との関係について論じていく。

4.1 及び 4.2 の先行研究で論じられているように、移住の動機の 1 要因として、受入国に家族や親族がいることが挙げられている。受入国に家族や親族がいることで、受入国と送出国とが結びつき、移住に伴うリスクや費用が抑えられ連鎖移住となる。家族や親族から成る移民ネットワークは移住労働の動機付けの働きがある。しかし、本研究の調査対象者は、受入国である台湾に家族や親族がいるために移住労働をしているのではなく、フィリピンに家族がおりその家族のために移住労働をしている。

B4：「台湾での生活は家族を助けることができるからいいと思います。」

先行研究では「受入国に家族がいるから」移住する一方で、協力者たちは B4 のように「送出国に家族がおり、その家族を助けるため」に移住している。つまり、移住労働の動機付けの内容が変化しているのである。フィリピン人労働者の中には国にいる家族のために働き、彼らが家族に送金したお金も食費や衣料といった消費関係や住宅費、教育費に多く使用されている(ADB;2006)。実際に、協力者たちの多くが自分の両親や子供のために移住労働しており、自分の投資のためにという人はほとんどいなかった。台湾からフィリピンに戻った A4 は以下のように述べている。

A4：「台湾で稼いだお金は子供や親の生活のために使っているため、貯金はありません。フィリピンに帰っても仕事が見つけられません。だからまた海外へ働きに行こうと思います。でも、斡旋料は高くて払うことができないから、誰かに借りるかどこかでローンを組むしかありません。」

A4 が 3 年間台湾から送金したお金は消費に回され、貯蓄はされていない。フィリピンに帰ることができても仕事が見つからず、A4 はまた移住労働をするつもりである。しかし、貯蓄がないため、移住労働に必要な費用が払えず借金をすることになる。そして A4 は、借金を返すため、そして家族のためにカナダで移住労働を行なうこととなった。

6.2.1 で論じたように、フィリピン人労働者は家族に人生の中心的な価値を置いており、また彼女たちにとって家族とは心の支えでもある。その大切な家族のために多くのフィリピン人が移住労働を行なっている。しかし、フィリピンではその移住労働が家庭崩壊という悲劇も引き起こすことも重大な問題となっている。A16 は、台湾で働く既婚者のフィリピン人男性について以下のように述べている。

A16：「台湾にいるたくさんのフィリピン人はフィリピンに家族がいるのに、他の人と不道徳にセックスをする人がいます。」

「台湾ではフィリピン人労働者の間で TLA (Taiwan Love Affiars: 台湾での恋)という言葉があることからも分かるように、外国人労働者同士の恋愛が可能な環境であるといえる」(安里 2004:24)。香港やシンガポールでは家政婦として働くフィリピン人女性労働者が圧倒的に多いが、台湾では工場労働者が多く男女比は 35：65 である。決まった休日がある工場労働者が多く、教会やレストラン、ディスコで男女の出会いがある。純粋な男女の出会いもあれば、既婚者であるにも関わらず不貞に走る人もいる。また、フィリピンに残された家族が不貞に走ったり、子供と親の精神的なつながりができにくい、相談できる親がいないといった理由で子供が非行に走るといった問題もある。移住労働は移住労働した者と残されたその家族の双方に大きな精神的不安を与える。

また、海外からの送金を当てにして家族が仕事をしないというケースもある。C7 は 5 人兄弟の一番上で、2 人の弟と 2 人の妹がいる。弟たちは 22 歳と 21 歳で、2 人の妹たちはまだ学生である。C7 は農業を営んでいる両親を助けるために、そして妹たちの教育費のために移住労働を選択した。2 人の弟たちはそれぞれ若くして子供を授かったため結婚をした。2 人とも定職にはついておらず、C7 の両親の元で生活をしている。つまり、彼らは C7 の送金で妻子を養っていることになる。2 人の弟たちは C7 の送金を当てにしているために定職にはついていないのである。

C7：「長男と次男は子供がいるのに全然働かないで、家にいます。両親が言っても聞かないですから、両親は諦めています。毎日遊んでいるようです。私が電話をしても電話にでません。私は下の 2 人の妹たちのために送金しているのに、彼らのせいで全然足りません。でも、定職につかない男の人はフィリピンには多いです。」

C7 は当初マニラで働いていた。マニラで働いていたときも家族に送金をしていた。しか

し、その金額では家族を十分に助けることができないため、マニラの仕事を辞めて、台湾で働き始めたのである。そして、弟たちはそのお金を当てにして働かず、妻子をもうけた。さらに家族が増えたために、C7 はできるだけ多くのお金を送金しなければならなくなった。C7 は自分の家族だけではなく、弟たちの家族まで養わなければならなかったのである。しかし、世界的な金融危機の影響により、C7 は契約途中で解雇になり帰国しなければならなくなった。再び海外で出稼ぎ労働をしようと考えているが、たった 8 ヶ月の台湾での労働では斡旋料を溜めることができず、途方に暮れていた。

移住問題が引き起こした課題を解決するためにフィリピン政府が取り組まなければならないことは多いと思われる。「フィリピンに欠けているのは、契約移住と国内経済で必要な構造改革との連携である」(ノエル 1995:51)。フィリピン政府は海外労働からの送金に大きく依存しているため、急な舵取りの変更は難しいかもしれない。しかし、フィリピン政府は海外労働の積極的なプロモートではなく、国内産業の発展や社会福祉の充実、移住労働者と残された家族のための保護政策に取り組むべきではないだろうか。また、フィリピン経済の将来を見据え、生産や雇用の増加につながる投資や労働者に対する支援体制も必要であると思われる。

家族のために、どんな苦労が伴っても海外出稼ぎ労働をすることが家族を助ける最短の道だと考えている人もいる。しかし、時としてその家族が移住労働の要因となるときもあれば、家族のための移住労働が新たな問題を引き起こすこともある。家族を大切にすることは誰も賛成することであるが、個人の人権や自由よりも優先にされるものではないと思われる。協力者たちのインタビューから、彼女たちは自身の自由や人権よりも家族を特権化し家族への価値が優先していると感じられた。協力者の中には過酷な労働条件でもプライバシーが守られていない住環境でも、家族のためだから仕方がないというと諦めに近い気持ちでいる人もいた。辛いことがあっても家族が心の支えになるという人もいた。家族の価値というのは、個人の人権や自由が守られてこそ成り立つものではないだろうか。家族や親族が血縁という共同体を作り、いくつもの共同体が合わさって社会ができる。つまり、個人の人権より家族を優先させるということは、個人の人権より共同体や社会、そして国家の価値を尊重することにつながるのではないだろうか。家族のための移住労働は、必然的に共同体や国家への奉仕につながると考えられる。家族を考える前に、個人の人権や尊厳を捉えなおすことが、移住労働者にとって必要なことであると思われる。

7. 終章

7.1 まとめ

7.1.1 台湾で形成される移民ネットワーク

フィリピン人労働者は、台湾で強いつながりと弱いつながりから成る移民ネットワークを形成していることが分かった。台湾においてフィリピン人同士のネットワークは言葉の面からも形成は容易であることは察しがつく。それは、8 割以上の協力者がフィリピン人の友人がいると答えていることでも明らかである。しかし、ミクロにみていくと、6.1 で分析したように、フィリピン人同士で形成されたネットワークは、強いつながりと弱いつながりから成っている。Granovetter(1973)は、時間の長さ、感情的な結びつきの度合い、親密さ、相互が提供するサービスの 4 つの要素が絡み合って強い結びつきを形成すると論じている。本研究においても、共に過ごした時間の長さや同じ出身地域といった要因が 1 対 1 の関係を親密にしていることが示唆された。長坂(2007)は、フランスに移住したフィリピン人の参与観察を通して、フィリピンのイロコス地方出身者達の「出身地域を同じくする言語集団レベルでの集団形成が行なわれやすい」(長坂 2007:213)と論じている。このことは、台湾にいるフィリピン人労働者にも該当する。本研究でもミンダナオ北部出身であり、セブアノ語で会話をすることができる協力者の間で、強いつながりが形成されたことが観察された。

台湾にいるフィリピン人労働者の多くは仲介業者を介して台湾にやってくる。そのため、多くのフィリピン人は知り合いがいない状態で台湾に来ており、1 からネットワークを形成しなければならない。初めて出会った者同士がコミュニケーションを通して共通点を持ち、親密な関係を築いていく。また、教会やフィリピンレストランといった、比較的同国人と会いやすい場所で知り合い、関係を築きネットワークを広げているのである。

ほとんどのフィリピン人労働者が同国人同士のネットワークしか形成していない中で、フィリピン人以外の人とのネットワークを形成している人が少数いた。たまたま近くに住んでおり顔を合わすようになった、という偶然からネットワークが生じていた。互いが互いの存在を認識し、あるきっかけから言葉を交わしたことで、フィリピン人と台湾人との国境を越えたネットワークが形成されたのである。どんな人間関係も初めからあるものではなく、出会いから始まる。それはフィリピン人でも台湾人でも同じである。偶然同じ時期に台湾に来た、たまたま近くに住んでいたなど様々な要因で人は出会う。その出会いを実現するためには挨拶など言葉を交わす必要がある。

多くのフィリピン人は企業に管理され、ドミトリーから工場まで送迎バスで行き食事もドミトリー内で取るため、台湾人と接触する機会は限られている。フィリピン人と台湾人は言葉も違うので、ネットワークを形成することは容易ではない。しかし、容易ではない状態にしているのは、言葉の問題だけではなく、意識の問題でもある。3 章で概観したように、外国人労働者は台湾政府や企業による管理下の元に置かれている。また、外国人労働者は台湾社会において「労働力としては受けいれながらも人間としては排除」(伊豫谷 2001:21)しているかのように思われる。外国人労働者の増加について「好ましくない」とい

う意識が働き、外国人労働者は不可視の存在になっていると考えられる。彼女たちの存在が目に入らないため、偶然すら起きにくくなる。互いの存在を認識しない限り、言葉を交わすこともなく弱いつながりすら生じないということである。

ネットワークを形成する人とのつながりは均一なものではない。また、形成されたネットワークがもたらす役割はそれぞれだが、どの役割も強いつながりから常にもたらされるわけではない。弱いつながりが新しい情報をもたらすなど、弱いつながりが重要な役割をする場合がある。それぞれのつながりからなるネットワークの形成経緯を明らかにすることで、「ネットワークは形成されている」という単調な論から抜け出すことができると考えられる。

また、今回の調査で台湾に友人や知人がまったくいない協力者がBグループに2名いた。多くの協力者たちのつながりが同じ会社で働くフィリピン人か、休日の活動を通じて知り合ったフィリピン人であった。2名とも在宅の介護労働者であり、毎月決まった休みはなく、1日の労働時間は18時間と長時間労働を強いられている。同僚もおらず、休日もないため他の人と接触する機会がほとんどない。このように非常に過酷な労働条件で働いているのにも関わらず、台湾には友人がいない彼女たちはどのようにしてストレスを発散するのだろうか。情報はどのようにして得るのだろうか。台湾では介護労働者が増加傾向にあり、友人や知人がまったくいない外国人労働者が今後増えると予想される。そのため、パーソナルなネットワークではなく、仲介業者や外国人労働者の支援組織といった機関とのネットワークがますます重要になってくる。

7.1.2　移民ネットワークの役割

台湾におけるフィリピン人労働者が織り成す移民ネットワークには大きく分けて、情緒的機能、情報的役割、言語的サポート、経済的援助の 4 つの役割があることが分かった。また、情緒的機能と情報的役割はさらに細かく分類することができる。しかし、どの役割も個別に分離したものではなく、1つ1つがつながっている。

情緒的機能は、共感、精神的安寧、相互援助の 3 つにわけることができた。ネットワークとは人と人のつながりであるため、コミュニケーションがうまく取れることで、共感や相互依存が生まれる。

6.2.2 で論じたように、多くのフィリピン人労働者は家族に比重を置いている。家族を大切に思うがために、ホームシックにもかかりやすい。台湾に来て生じた問題や移住労働に関する悩みなども抱えやすい。また、台湾ではマイノリティーであり、管理の対象とされている。景気の変動により一番に解雇の対象になるなど不安定で非常に弱い立場に置かれているため、様々な精神的ストレスも受けやすい。台湾人からの差別を感じている人もいるように、台湾社会では外国人労働者に対する偏見もある。しかし、そのようなストレスも身近に友人がいることで軽減する(Berry, Kim, Minde and Mok;1987)。いつでも問題が起こるわけではないが、何か問題が起こったときに頼れたり様々な悩みを打ち明けることがで

きる友人がいることは、慣れない台湾生活において心強いことである。

多くのフィリピン人労働者が定期的に教会へ通っている。彼らにとって教会とは宗教的な役割だけでなく、人と人を結びつけるネットワークの中心地的な役割もあることが分かった。ミサに出席し祈りをささげることで、精神的に落ち着くことができる。同時にちょっとした知り合いや友人の友人といった弱いつながりも形成される。そしてこの弱いつながりが新しい情報を伝播するという重要な役割をすることがある。Granovetter(1973)によると、強いつながりで結ばれている友人は共有する情報が多く新しい情報を得にくいが、弱いつながりのネットワークから得られる情報はより新しく重要なものが多く得られることがあるという。今回の調査でも、弱いつながりから成るネットワークがもたらした情報の重要性が明らかになった。Arango(2000)は、仲介業者を通じて移住した場合ソーシャルキャピタルは生じにくいと論じているが、台湾におけるフィリピン人労働者の場合ソーシャルキャピタルが生じているといえる。彼女たちは自ら人脈を形成し、有益な情報を得たり、仕事を紹介してもらっている。それらは彼女たちにとって、大切な資本である。

外国人労働者は言語のハンディがあり、常にインターネットや新聞といった情報を得るための手段が常に自由に使えるわけではないため、情報源が限られている。特に家政婦や介護労働者として住み込みで働いている外国人労働者は休みがない場合が多く、他の外国人労働者と接する機会が少ないため必要な情報が得られにくい。そのため、賃金や労働条件など他の外国人労働者と比較することができず、経済的、精神的、身体的搾取される危険性が高い。それを防ぐためにも、「社会的な力である『情報』へのアクセスは不可欠である」(長橋 2002:132)。また、情報を受信できるということは、自ら情報を送信することもできる。つまり、情報にアクセスできないということは、自らの状況も他者に知られることが少ないことを意味する。賃金未払いや虐待といった苦境も他者に伝えることができす、苦境から逃れるために逃亡したり、精神障害を招く恐れがある。

また、移民ネットワークは場合によってはマイナス面をもたらすことがあることが分かった。お互いに一番よくできる言葉を話すことで親近感や仲間意識を感じる一方で、その言葉が理解できない人にとっては自分の悪口を言っていると、誤解を生じることがある。このような小競り合いは頻繁に起きるわけではないが、小さな軋轢が大きな軋轢に発展する可能性もないわけではない。

さらに、強いつながりは閉鎖性が強い関係を生み出すこともある。高田(2006)は、強いつながりから成るネットワークは、弱いつながりがもたらす他のネットワークとのブリッジがかからず、閉鎖的になると論じている。本研究でも、2 人の親密度が増し他の人を受入れないような閉鎖的なネットワークになり、孤立を招くという例が見られた。どちらかが台湾から離れた場合、もう 1 人は精神的にも現実的にも孤独になってしまう。孤独になる、すなわち移民ネットワークの役割を受けることができない状態であるといえる。他者を寄せ付けず、親密なネットワークを築き続けることは、孤立マイノリティー化を一層強いものにする可能性がある。そういった意味でも、弱いつながりは必要なつながりであるとい

える。

フィリピン人労働者が台湾で形成する移民ネットワークの形成経緯や役割は、様々な要素があり、1 つ 1 つがつながりを持つ。「移民ネットワークが形成されている」とあたかも自明なことであるかのように語られているが、細かく見ていくとある労働者の台湾での世界を垣間見ることができた。彼女たちの移民ネットワークは、フィリピンから連続したものではなく、台湾で新しく編成されたものである。多くの協力者から「海外にいるから特に友人は大切である」と話していた。どの役割を見ても、海外であるからこそ特に必要と思われる役割であった。移民ネットワークは、移住労働者が比較的手にしやすい資源である。強いつながりも弱いつながりも両方の特質をみていくことで、どのような役割を生みだすのかを明らかにできた。移民ネットワークは「ダイナミックな移民による文化的反応」(カールズ、ミラー 1996:25)であり、移住労働者たちの社会でもある。したがって、その変遷を今後も検証していくは移住労働者の姿を知ることができ、移住労働者たちが抱える問題を考える場合でも必要だと考えられる。

7.2　今後の課題

フィリピンや台湾には外国人労働者を支援する NGO 組織がある。移民ネットワークは個人的なつながりだけでなく、こういった組織や機関とのつながりも含まれる。フィリピン政府は国の利権のために強く主張できない面もあり、移住労働者保護について十分取り組まれているとも言いがたい。そのため、フィリピンでは移住労働者のための NGO 組織が重要な役割を担っていることもある。そういった組織や機関とのつながりについても、今後検討していく必要がある。

本研究では女性のフィリピン人労働者しか取り上げることができなかった。性差によって形成される移民ネットワークに違いがあるのか不明なので、男性にも対象を広げる必要がある。また、国籍による違いについても不明である。台湾にはフィリピン人の他にインドネシア人やベトナム人、タイ人も多く働いている。国籍によって違いがあるとしたら何に起因するのかを明らかにするためにも、対象者を広げる必要がある。

さらに、調査地も拡大する必要がある。今回は台中縣および台中市に住むフィリピン人労働者を対象とした。台中縣および台中市には多くのフィリピン人が住んでおり、フィリピン人神父がミサを行う教会やフィリピンレストランがある。しかし、大･中都市から離れた工業区や農村地で生活している移住労働者もいる。地域性によって移民ネットワークの形成や役割に差が生じるのかを検討する必要がある。

また、台湾にいるフィリピン人労働者は、フィリピンにいたときも自国ネットワークを構成していたと思われる。本研究では移民ネットワークを焦点に考察してきたが、移民ネットワークと自国のネットワークはどのように異なるのか、またどのような点でどう重要なのかということ調べる必要があるだろう。

移民ネットワークは静態的なものではなく、常に変化をする。弱いつながりが生じ、何

かのきっかけで瞬時に強いつながりに変化することもある。その逆もあり得る。そのため、継続的に調査する必要がある。移住労働者は受入国の経済的社会的状況に影響を受けやすい。移住労働者を取り巻く環境の変化は移民ネットワークにも影響を及ぼすのかを明らかにするためにも、継続的な調査が必要である。

本研究はあくまでひとつの移民ネットワークについてのケーススタディである。そのため現段階では、フィリピンから連続したネットワークがないために、弱いつながりであっても形成しなければならなかったのか、台湾で形成されたネットワークはフィリピン人労働者がフィリピンに帰国した後も継続しているのかという、詳細なネットワークのメカニズムまではまだまだ論じきれていないし、論じるための材料も豊富には持ち合わせていない。本研究での成果と反省をもとに、質問項目を再考しさらに発展的に、移住労働者にとって移民ネットワークとは何かということと、どのような機能があるのかということについて研究を深めていきたい。

7.3　結びにかえて

本研究を振り返って、ネットワークの重要性を一番感じているのは他ならぬ筆者であるかもしれない。研究当初は、どこからスタートしていいか分からず、ただ教会に通ってそこにいるフィリピン人に話しかけていた。それだけでは、本音など聞けるはずはなかった。筆者と協力者たちが出会ったのも偶然であった。偶然が重なりフィリピン人の友人ができ、交流も深まり様々な話を聞くことができた。交流を重ねるうちに、少しずつ親しい間柄へと変化していった。他のフィリピン人を紹介してもらうなど、筆者自身のネットワークが広がっていった。移民ネットワークのダイナミズムは人と人の弱いつながりから始まり、そこから強いつながりが生じる。そのネットワークを各々がうまく機能することも今後改めて検討する必要があるだろう。

そして、交流を通して初めて見えたことも多々あった。調査当初は、移住労働者は相対的に弱い立場に置かれているため、労働条件や住環境など多くの問題を抱えていると思っていた。しかし、「台湾の生活は快適ですし、楽しいです」という声が多く聞かれ、当初抱いていた返答とまったく反対だったので戸惑いを感じた。戸惑いながらも彼女たちと共に行動するうちに、彼女たちは問題が起きても自分なりに消化していることに気がついた。そして、彼女たちが持つしたたかな強さを感じることができた。言葉を交わし交流を通して、彼女たちのある一側面を見ることができた。また、筆者自身が彼女たちに「弱者」というレッテルを貼っていたことにも気がついた。これは外国人労働者に対する台湾人の「好ましくない」という意識と共通するところがあるではないだろうか。

彼女たちは「弱者」ではないので、外国人労働者問題は考える必要がないということではない。外国人労働者に関する問題は依然として多い。したがって外国人労働者問題を理解し、問題の所存を知り解決に努めなければならない。そのためにも、外国人労働者に対して一方的なイメージを持ちながら彼らを捉えているのではないか、ということを改めて

考え直す必要があるということだ。彼らを定義してから見るのではなく、見てから定義をする必要がある。コミュニケーションを図り相手を知ることが重要である。台湾人が抱く外国人労働者に対するステレオタイプ化されたイメージも相手を知ることで払拭することができるであろう。国籍や職種で判断するのではなく、1 人の人として向き合っていく必要がある。

また、外国人労働者問題とひとまとめにしても、その業種によって表出の仕方は違うし、同じ業種でも働く場所が違えば問題の内容も異なってくる。外国人労働者は不安定な立場に置かれており、受入国のわずかな経済や社会的変動に雇用状態や雇用条件が左右されやすいうえに、精神的にも経済的にも搾取されやすい。劣悪な労働環境や住環境ではないか、政府機関は仲介業者や外国人労働者の支援組織と連携して、幅広い企業や雇用主に対してチェックする体制を整えなければならない。また、労働基準法が適用されない家政婦や看護介護労働者に対して、労働基準法に代わる法を早急に施行することや標準契約書の提案をする必要があると思われる。

今回の調査を通して、「家族」の意味を改めて考えてみた。「台湾女性の高学歴化と労働需要の拡大によって、女性の社会進出が進み、それによって生じた家事･育児･介護の担い手問題を解決するうえでも、また女性の就業を促すという意味でも」(安里 2004:11)、外国人労働者、特に女性の外国人労働者の需要が高まった。台湾では育児においても高齢者の介護においても、脱家族化が進みつつある(安里;2004)。一方、多くのフィリピン人移住労働者は家族のために移住労働をする。彼らは個人の人権や自由よりも家族を優先し、家族の生活のために、両親を助けるために、兄弟や子供の教育費のために海外で働く。子供がいる場合、両親が移住労働し、その両親の親や兄弟が子供を育てたり、片親だけが移住労働している場合もある。その結果、家庭崩壊や子供の非行といった社会問題を招いている。家族のための移住労働を通じて社会や国家に奉仕しながら、家庭崩壊を引き起こすという悲しい結果になっている。

台湾人女性が社会進出し、その女性の代わりに彼女の親や子供を外国人労働者が世話をしている。そして、その外国人労働者の親や子供はまた別の人が世話をしている。家族が家族の世話をする、という当たり前に思ってきたことは、もはや当たり前ではなくなってきている。台湾でも日本でも少子高齢化、晩婚･晩産化、非婚化などが進み、それとともに家族の形も変化している。台湾人にとって、フィリピン人にとって、筆者にとって、家族とは一体何だろうか。簡単に答えられないところに、家族形態の多様化、すなわち人の生き方の多様化があるのだと思われる。移住労働をする人だけではなく、残される人、受入国政府、送出国政府すべてが基本的人権や基本的自由を尊厳した中で、家族および家族内関係に関する認識を今一度改めて考える必要がある。

最後に、1.3.2 で述べた「外国人労働者」と「移住労働者」について触れておきたい。「外国人労働者」とは受入れ側からの視点である。言葉の違いは、送出国側と受入国側の海外労働を行なう人の捉え方の違いを表していると考えられる。また、「台湾人－外国人」とい

う 2 項対立のように、別々の人として区別していると捉えることができる。「台湾人」と「外国人」という 2 項対立は台湾社会から排除される人を生みだすことにもなる。台湾の「中華民国憲法」の第 2 章第 7 条に「第七條　中華民國人民，無分男女、宗教、種族、階級、黨派，在法律一律平等。(中華民国の人民は、男女、宗教、種族、階級、党派の区別なく、法律上一律に平等である[35]。)」とある。国籍については言及されておらず、「中華民国の人民」ではない「外国人」は平等ではないと受け取れる。すなわち、「外国人労働者は平等ではない、なぜなら外国人だから」といえるのではないだろうか。丹野(2007)は「人格的存在を欠いた労働力としてしか捉えられない契約労働者が人間的存在を回復することこそ、グローバル化に直面している各国が共通に抱える課題である」(丹野 2007:34　原文強調)と指摘している。移住労働者たちは労働者であると同時に、生活者として台湾で税金を払い自身の価値観をもって生活している。また、彼らは人と人のつながりを通して、台湾社会に結びついており、台湾社会を構成している一員といえる。「労働力」ではなく「人」として受入れ「労働者であり生活者」と捉えること、まずこれが台湾に求められることではないだろうか。台湾で生活している人が立場に関係なく、公平である社会をつくっていくこと。そして、国籍に関係なく、台湾で生活する人すべてが平等である社会を実現することが台湾社会が早急に取り組むべき重要な課題である。

[35] 台北駐日経済文化代表処 HP
（http://www.taiwanembassy.org/lp.asp?CtNode=3259&CtUnit=246&BaseDSD=7&mp=202）より。

参考文献

日本語文献

明石純一(2006)：「外交資源としての移住労働者－台湾の事例分析－」、『国際政治』第 146 号 pp.172-186

安里和晃(2003)：「介護労働市場の形成における外国人家事･介護労働者の位置づけ」、『龍谷大学経済学論集』44(5) pp.1-29

－(2004)：「台湾における外国人家事･介護労働者の処遇について　－制度の検討と運用上の問題点－」、『龍谷大学経済学論集』43(5) pp.1-28

－(2004a)：「高齢者介護施設の移住労働者 –台湾での聞き取り調査から-」、『社会科学研究年報』No.35 pp.55-76

石井敏、久米照元、遠山淳、平井一弘、松本茂、御堂岡潔(1997)：『異文化コミュニケーションハンドブック』　有斐閣選書

稲月正(2006)：「北九州市と板橋市(台湾)における外国人労働者の受け入れについての意識－受け入れの『好ましさ』とその規定要因－」、『社会分析』No.33 pp.41-59

伊豫谷登志翁(2001)：『グローバリゼーションと移民』　有信堂高文社

ウ･チア･シェン(1992)：「外国人労働者問題と台湾の政策」、『日本労働研究雑誌』390 号 pp.110-123

龔玉齢(2008)：「台湾における外国人労働者の現状－家事･介護を中心に」、『人間文化』23 号 pp.17-26

大野拓司、寺田勇文編(2001)：『現代フィリピンを知るための 60 章』　明石書店

S.カースルズ･M.J.ミラー、関根政美･関根薫訳(1996)：『国際移民の時代』名古屋大学出版会

金子郁容(1986)：『ネットワーキングへの招待』　中央公論社

川喜田二郎(1970)　『続発想法 - ＫＪ法の展開と応用』中公新書

菊地京子(1992)：「外国人労働者送り出し国の社会的メカニズムーフィリピンの場合」、伊豫谷登士翁、梶田孝道編『外国人労働者論－現状から理論へ』　弘文堂

洪栄昭(2006)：「アジア移住労働者受入れの制度と実態　台湾二国間協定に基づく受入れを実施」、『Business Labor Trend』　2006.4 pp.32-34

小ヶ谷千穂(2003)：「フィリピンの海外雇用政策」、小井土彰宏編『移民政策の国際比較』　明石書店

国際協力銀行(2008)：「『貧困プロファイル』フィリピン共和国」平成 20 年 7 月

駒井洋編集(1997)：『新来･定住外国人がわかる事典』　明石書店

佐野哲(2004)：「台湾の外国人労働者受入れ政策と労働市場」、『連合総研レポート』 No.185

－(2006)：『グローバル化で変わる国際労働市場　－ドイツ、日本、フィリピン外国人労働力の新展開』 明石書店

施昭雄(1992)：「台湾の移住労働者問題について」、『福岡大学総合研究所報』 144 号 pp.9-34

高田洋(2006)：「社会関係資本と自発的協力の発展: 家族関係における社会統合」、『第 2 回家

族についての全国調査 (NFRJ03) 第 2 次報告書 No. 2: 親子、きょうだい、サポートネットワーク』日本家族社会学会 全国家族調査委員会　pp.151-163
丹野清人(2007) :『越境する雇用システムと外国人労働者』　東京大学出版会
中原由美子(2003) :「外国人労働者が台湾の雇用と産業構造に与える影響」、『日本台湾学会報』 Vol.5 pp.107-128
長坂格(2007) :「フランスにおけるフィリピン人移住労働者のエスニシティ」、佐々木衛編『越境する移動とコミュニティの再構築』　東方書店
長橋敦志(2002) :「グローバリゼーションと女性の国際移住労働：香港におけるフィリピン人労働者の概況」、『国際移民労働者をめぐる国家･市民社会･エスニシティの比較研究：経済危機の中のアジア諸国における出稼ぎフィリピン人を素材として』大阪外国語大学研究成果報告書 pp.125-156
二村泰弘(2005) :「フィリピンの海外労働者―「出稼ぎ」と貧困のジレンマ」、『新領域研究センター』 2004－Ⅳ－29 pp.103-125
ノエル･ヴァスケス(1992) :「移民労働の経済的･社会的影響　フィリピンの場合」、『日本労働研究雑誌』34(6) pp.43-57
林顕宗(2006) :「台湾板橋市のコミュニティ意識」、『社会分析』Vol.33 pp.5-39
樋口直人(2005) :「移住システムと移民コミュニティの形成－移民ネットワーク論からみた移住過程－」、梶田孝道･丹野清人･樋口直人著『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会
平野（小原）裕子(2002) :「台湾における外国人出稼ぎ労働者の抑うつに関連する社会経済的要因」、『九州大学医療技術短期大学部紀要』Vol29 pp.127-138
フィリピン日本人商工会議所(2007)：フィリピンビジネスハンドブック 2006 年版
古田暁、石井敏、岡部朗一、平井一弘、久米昭元(2001) :『異文化コミュニケーションキーワード[新版]』　有斐閣双書
マリア･ロザリオ･ピケロ･バレスカス、山田満里子訳(1994) :「在日フィリピン人労働者の多様な状況」、駒井洋編集『日本のエスニック社会』　明石書店
水野順一郎(1998) :「フィリピン雇用情勢の実態」、『労働時報』 No604 pp.54-57
森本哲夫(1994) :「中華民国における開放政策と移住労働者受入れの現状」、『アジア研究所紀要』21 号　pp.45-63
山田亮一(2007) :「フィリピンの移民政策と戦略プログラム」、『Int’lecowk』 Vol.62 No.9 pp.19-27
吉村真子(2000) :「国際労働力移動におけるアジア女性－アジアの出稼ぎ女性労働者－」、『国際労働力移動のグローバル化－外国人定住と政策課題』　財団法人法政大学出版局
労働政策研究所(2007) :「アジアにおける外国人労働、第 2 章台湾における外国人労働者受入れの制度と実態」、『労働政策研究』 No81

英語文献

Arango Joaquin,(2000), “Explaining migration: a critical view” *International Social Acience Journal,* Vol.165, pp.283-296

Asian Development Bank, (2005) ”*COUNTRY STRATEGY AND PROGRAM 2005 – 2007 PHILIPPINES*”

- (2006) “*Workers’ Remittance Flows in Southeast Asia*”

Asis. M., (2008) “How International Migration can Support Development A Challenge for the Philippines” *Migration and Development: Perspectives from the South*, IOL

Bauer, T., Epstein, G. and Gang, I. N., (2000), “What are Migration Network?” *IZA Discussion,* Paper No. 200

Berry, J. W., Kim, U., Minde, T. and Mok, D., (1987), “Comparative Studies of Acculturative Stress” *International Migration Review,* Vol.11, No.3, pp.491-511

Bourdieu, P. and Wacquant, L. J. D., (1992), “*An Invitation to Reflexive Sociology*”, The University of Chicago Press

Caces, F., Arnold, F., Fawcett, J. T. and Gerdner R. W., (1985), “SHADOW HOUSEHOLDS AND COMPETING AUSPICES: Migrantion Behavior in the Philippines” *Journal of Development Economics,* Vol.17, pp.5-25

Constable, N., (1997), “*Maid to order in Hong Kong: stories of Filipina Worker*”, Cornell University Press

Goss, J. and Lindquist, B., (1995), “Conceptualizing International Labor Migration: A Structuration Perspective” *International Migration Review*, Vol.29, No.2, pp.317-350

Gonzalez, J. L. Ⅲ, (1998), “*Philippine labour migration: critical dimensions of public policy*”, Institute of Southeast Asian Studies

Goza, F., (1994), “Brazilian Immigration to North America” *International Migration Review*, Vol.28, No.1, pp.136-152

Gurak, D. T. and Caces F., (1992), “Migration Networks and the Shaping of Migration Systems” M. Kritz et. al. eds., *International Migration Systems: A Global Approach*, Oxford: Clarendon Press.

Granovetter, M., (1973), “The Strength of Weak Ties” *American Journal of Sociology*, Vol.78 pp.1360-80.

International Organization for Migration:IOM, (2006), ”*Handbook on Establishing Effective Labour Migration Policies in Countries of Origin and Destination*”

Lan, P. C., (2003), “Political and Social Geography of Marginal Insiders: Migrant Domestic Workers In Taiwan” *Asian and Pacific Migration Journal,* Vol.12, No.1-2, pp99-125

Massey, D. S. and Aysa, M., (2005), “Social Capital and International Migration from Latin America” *Expert Group Meeting on International Migration and Development in Latin America and the Caribbean,*. United Nations Secretariat 2005/04 pp.1-24

McKenziea, D. and Rapoportb, H., (2007), “Self-selection patterns in Mexico-U.S. migration:The role of migration networks”, *World Bank Policy Research Working Paper* 4118

Nagasaka, I., (1998), “Kinship Networks and Child Foatering in Labor Migration from Ilocos, Philippines to Italy” *Asian and Pacific Migration Journal*, Vol.7, No.1, pp67-92

POEA(2007), “*Overseas Employment statistics*”

Sills, S. J., (2007), “Philippine Labour migration to Taiwan: Social, political, demographic, and economic dimensions” *Migration Letters*, Vol.4, No.1, pp1-14

Spaan, E., (1994), “Taikongs and Calos: The Role of Middlemen and Brokers in Javanese International Migration” *International Migrant Review*, Vol.28, No.1, pp.93-113

Stalker, P., (2000), “*Workers Without Frontiers; The Impact Of Globalization On International Migration*”, International Labour Office

Tsay, Ching-lung.,(1992), ”Clandestine Labor Migration to Taiwan”, *Asian and Pacific Migration Journal*, Vol.1, No3-4, pp.637-655

－(2001), ”Labor Important and Unemployment of Local Workers in Taiwan”, *Asian and Pacific Migration Journal*, Vol.10, No3-4, pp.505-534

Winters, P., Janvry, A. and Sadoulet E., (1999), “Family and Community Networks in Mexico-U.S.” *University of New England Graduate School of Agricultural and Resource Economics*, No.99-12, pp.1-26

中国語文献

行政院労工委員会労工安全衛生研究所編(1994)：「外籍労工職業災害及健康之追跡調査」、行政院労工委員会労工安全衛星研究所

－(1996)：「外籍労工生活適應性之研究」、行政院労工委員会労工安全衛生研究所

行政院労工委員会職業訓練局(2008)：「97 年外籍勞工運用及管理調查」

江豊富(2006)：「外労引進対本国労工失業、職業選択及薪資之影響」、『中央研究経済院研究所』37:1 pp.69-111

余月娥、陶宏麟(1999)：「我国外籍労工政策興核配政策之演進」、『労工研究季刊』 第 134 期 pp.44-67

李惠茹(2001)：「企業外籍勞工管理措施與績效關聯之研究」、国立中央大学修士論文

亜太移駐労工工作團(2002)：「菲律賓移駐労工在台湾的處境」、『台湾社会研究季刊』 No.48 pp.219-234

呉挺鋒(2002)：「台湾外籍労工的抵抗興適応」、『香港社会科学学報』第23期 pp.103-150

夏曉鵑(2002)：「騒動流移的虚構商品：「労工流移」専題導読」、『台湾社会研究季刊』 No.48 pp.1-13

－(2005)：「全球化下台湾的移民/移工問題」、『台湾的社会問題 2005』 pp.328-367

楊明仁、施春華、顔永杰(1996)：「外籍労工之適応困擾興心理障礙」、『社区発展季刊』第 57

期　pp.193-202
楊明仁、施春華、鄭夙芬、何●（扁辺に攵）恭、陳順勝(1999)：「在台外籍労工之適応困擾探討」、『中華心理衛星学刊』 第 12 巻 pp.93-107
蔡明田、余明助(1998)：「台湾地区外籍労工跨文化適応問題分析」、『労資関係論業』第 7 期 pp.153-186
謝臥龍、楊奕馨、陳秋蓉、陳九五、駱慧文、許嘉和(1997)：「台湾外籍労工工作満意度興生活適応性之探討」、『中華衛誌』 Vol.16, No.4 pp.339-353
藍佩嘉(2002)：「跨越国界的生命地図：菲籍家務移工的流動興認同」、『台湾社会研究季刊』 No.48 pp.169-218

謝辞

本論文の作成にあたって、多くの方にお忙しい中インタビューをさせて頂きました。当初は「修士論文のためだけの」インタビューであったものが、話を伺わせて頂くうちに人生論にまで発展していくことが多く、今後社会に出ていく自分にとって参考になる貴重な意見を数多く頂くことができました。このような、多くの人との貴重な出会いに恵まれたことに心から感謝し、謝辞を述べさせて頂きます。

フィリピン人労働者 V.D.さんには感謝してもしつくせないくらいお世話になりました。彼女との出会いがなければ、本論文を進めることはできなかったでしょう。常に私のことを気遣い心強い言葉で励ましてもらい、彼女の「移住労働者たちのことを考えてくれて、あなたを誇りに思う」という言葉は、本当に励みになりました。その他、貴重な休日に、嫌な顔一つせず長時間に渡りインタビューに答えて頂いたフィリピン人労働者のみなさんに、心から感謝の意を表します。

C 仲介業者の黄さんにはアンケート調査をご協力していただいたり、お忙しい中わざわざ東海大學までご足労頂き、インタビューに応じていただきありがとうございました。また、C 仲介業者をご紹介していただきました、東海大學文学院日本語学科の紀朝栄先生に、心から感謝いたします。

本研究を進めるにあたり，多くの方々にご指導とご協力をいただきました。お力添えをいただいた方々に、感謝の辞を述べさせていただきます。

研究テーマを決める段階から親身なご指導をいただいた、東海大學文学院日本語学科の松永稔也助理教授に感謝の意を表します。本研究のご指導のみならず、様々な相談に乗っていただきました東海大學文学院日本語学科の大西仁助理教授に感謝致します。そして、本論文作成にあたり、貴重なご意見をいただき、ご指導いただきました、静宜大學文学院日本語学科の桂田愛助理教授に感謝致します.

本論文の作成にあたり、藤田美佐さん、大内宏信さんを始めとする大学院の皆様にはお世話になりました。お忙しいところ、論文を読んで貴重なご意見をいただき、本当にありがとうございました。また、この 2 年間多くの時間を共に過ごし、苦楽を分かち合った飯田美郷さんに感謝致します。精神的に辛かったときに支えてもらい、素を出して笑い合えたことでこの 2 年間を何よりも充実し楽しいものとさせてくれました。本当にありがとうございました。ここにお名前を挙げることのできなかった方を含め、本論文を作成するにあたり、お世話になった全ての方に感謝申し上げます。

また、日本から支えてくれた家族や日本に帰国したときにいつも暖かく迎え入れてくれた友人にも深く感謝いたします。

最後に、いつも話を聞いてくれて励まし、分析方法や論文についてコメントや指摘をしてくれた私の大切な人に心から感謝します。